

第 2 回 日本ルワンダ学生会議 現地渡航報告書

目次

序章	3
団体紹介	4
全体挨拶	7
第 1 章 第 2 回日本ルワンダ学生会議概要	8
第 2 回日本ルワンダ学生会議 活動概要	9
第 2 回学生会議日程	10
第 2 章 第 2 回本会議活動報告	11
プレゼンテーション&ディスカッション	
- 「官僚制度と日本の近代化」	13
- 「ワーキング・プアと日本の格差問題」	14
- 「ラテン・アメリカの連帯経済」	16
- 「日本の農業とルワンダとの協力の可能性」	17
- 「日本のマイノリティ-外国人の人権」	19
- 「日本における識字と社会的差別」	21
- 「日本のマイノリティ-Koreans in Japan」	23
- 「裁判員制度」	24
- 「ルワンダに必要なファミリープランニング」	25
第 3 章 ルワンダ現地見学活動報告	28
-PFR 和解村	29
-メモリアルセンター	34
-人間開発戦略計画コーディネーター Emmanuel Havugimana 氏	36
-JICA・農村開発プロジェクト	38
-WFP 学校給食プログラム	40
-UNHCR 難民キャンプ	42
-COLLEGE IMENA de RUNYINYA	47
-REACH 家造りプロジェクト	51
-ウムチョムイーザ学園	63
-Gacaca 裁判	67
第 4 章 日本・ルワンダ学生意識アンケート結果	71
第 5 章 感想	77
付録 訪問先に関する参考資料・URL	98

序章

団体紹介	4
全体挨拶	7

日本ルワンダ学生会議団体紹介

<ルワンダという国>

ルワンダはアフリカの内陸部に位置し、ウガンダ・ブルンジ・タンザニア・コンゴ民主共和国と国境を接している。元首はポール・カガメ大統領で、主な輸出品はコーヒーや茶などである。1994年には、植民地政策と独立後の民族自決の結果として、多数派のフツ族による少数派のツチ族へのジェノサイド（大量虐殺）が行われた。一説では100日間で100万人の人が亡くなったとも言われている。

<団体設立経緯>

—学生主体・黎明期—

日本ルワンダ学生会議は前身であるルワンダ・プロジェクトとして2005年10月、小峯茂嗣氏（アフリカ平和再建委員会事務局長兼、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師）によって設立される。2007年7月より学生を主体とした大学公認プロジェクトとして活動を再開。

2008年度より学生主体の団体としての活動を本格的に始め、小峯氏は相談役に就いた。同年9月は日本側の大学生が8名ルワンダに渡航し、ルワンダ国立大学において第1回学生会議を開催。議題は日本側より南京虐殺、核問題、公害問題や少子高齢化など日本社会の負の側面中心にプレゼンし、ルワンダ側は市民コミュニティの形成、虐殺のイデオロギーや青少年のリーダーシップをプレゼンし、各テーマに沿ったディスカッションを行った現地で活動する日本人NGO職員やJICA、世界食糧計画(WFP)職員の協力も得られた。この活動を経てメンバーは国家間の外交関係やODA等日本からの一方向的な援助のみならず、日本人とルワンダ人の学生が個人レベルで、対等な立場の人間として接し国家の抱える問題や発展の方向性について相互に理解を深めることの意義深さを学ぶ。そしてこの活動を継続する意志を両国学生間で確かめ合った。

<ルワンダ現地の交流相手>

- ・INDANGAMUCO Cultural Troupe (National University of Rwanda)

<公認>

- ・駐日ルワンダ共和国大使館
- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
- ・アフリカ平和再建委員会

<後援>

- ・鶴田綾 一橋大学大学院法学研究科博士課程
- ・京野楽弥子 英国ブラッドフォード大学院平和学部紛争解決学科修了

<特別顧問>

- ・小峯茂嗣 アフリカ平和再建委員会
- ・外川 隆 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター事務局長

<団体連絡先>

- ・団体代表メール：japan.rwanda@gmail.com
- ・団体ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>

<団体基本理念>

一人間同士の関係づくりー

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれている。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持つ。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものである。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではない。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得るだろう。途上国が真に自立し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要だと考える。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again’に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となれるはずだと考える。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立がある。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作り出した。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流している。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていく。

<団体理念の継承>

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保するものである。ユネスコ憲章には以下の文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。

ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。

文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならぬ神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表出した。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。

実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。

この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

全体挨拶

私たち日本ルワンダ学生会議は、今夏もルワンダ国立大学学生とのディスカッション、交流を通じルワンダの社会状況について様々な視点から考える機会を持った。日本側は戦後復興と日本特有の課題を、ルワンダ側は和解や開発に対する取り組みを紹介し、両国が直面する問題と解決策について議論をかわした。交流しているルワンダ側大学生が所属する伝統ダンスグループは、そのパフォーマンスでルワンダの美しさと逞しさを表現していた。

ルワンダ政府が VISION2020 で明言しているように同国における国際協力のニーズは、紛争時の緊急支援から自立可能な中堅国へ発展する為の開発援助へとそのフェーズを移してきた。同国の安定化にとって経済開発は必須の課題としてある一方で、今も心に深い傷を負っている多くのルワンダ人の精神ケア、和解への取り組みも依然として必要である。

私たちは、食糧支援や農業開発援助の現場、和解と生活向上を目指す NGO の取り組み、虐殺孤児のための学校、生存者と加害者へのインタビュー、Gacaca 裁判を通して虐殺が単に過去のものではなく現在進行形の問題として厳然と存在しているということを実感した。また、ルワンダ国内にある UNHCR 難民キャンプ訪問では、太湖地域の情勢と難民が抱える課題を知ることができた。

学生会議では「相互理解」と「対等な関係」を基本理念にそれぞれのメンバーが各々の目的意識から本活動に参加し問題意識を深めている。学生という立場から僅か 15 年前に虐殺を経験したルワンダ人と関係を築こうとする私たちは、日本という軸を持って何を学び伝えることができたのだろうか。国際社会における日本の責任という意識のみならず、今後も虐殺というテーマに対し人間同士の交流を通じ、取り組んでいきたいと考える。

代表 千田大介

第1章

第2回学生会議概要

第2回日本ルワンダ学生会議 活動概要.....	9
第2回学生会議日程.....	10

第2回日本ルワンダ学生会議 活動概要

第2回学生会議活動 概要

ルワンダ現地での会議開催によりルワンダ人が日本の産業、文化、慣習を理解できるよう促す。また、被爆や世界大戦を経験した日本が、虐殺を経験したルワンダと共通点を見出し、和解の在り方、平和構築をともに考える。さらに、技術大国・先進国というイメージ以外の別の日本の側面を知ってもらい、日本のより深い理解を促す。

第2回学生会議活動 理念

活動理念

- ・対等な関係における相互理解を通じルワンダと日本両国間の関係を深化させる。
- ・両国における紛争や社会状況を学ぶ多様な機会を設ける。
- ・ルワンダの平和構築と平和維持に対し協力関係を模索する。
- ・ルワンダの開発において協力関係を模索する。

活動方法と目的

- ・市民レベルの友好交流により二国間関係を強化する。
- ・青少年学生に対し両国における実際の社会状況を学ぶ機会を設け社会的責任の意識を養う。
- ・社会的問題や話題における多面的理解を共有し、次世代のリーダーとなるべき参加者の啓発を計る。

第2回学生会議 年間日程 (2009年1月～11月)

12月 新メンバー追加 (*年によって異なります)

1月 顔合わせ

2月～7月 勉強会 (週1回のミーティング、月1回の合宿:ルワンダに関する文献、映像資料、研究者の講演など)

6月～8月 現地との調整 (学生ディスカッション議題決め、チケット予約・購入、見学活動先のアポ取り)

8月 直前合宿 (早稲田大学鴨川合宿場:ディスカッション議題のプレゼン練習)

9月 現地渡航・会議開催

11月 事後報告会

第2回学生会議 現地渡航・活動日程(2009年9月1日～20日)

9月

- 1日 成田出発
- 2日 ルワンダの首都キガリ到着
- 3日 ニヤマタの和解村と虐殺記念館訪問、加害者と被害者の証言
- 4日 ルワンダ国立大学 NUR (ブタレ) へ移動、会議日程確認、ダンス交流
- 5日 本会議①開始 (NUR 校内教室にて)
- 6日 本会議②
- 7日 キガリへ移動、ギソジの虐殺記念館訪問、元少年兵社会復帰施設職員へのインタビュー
- 8日 JICA 事務所訪問、プロジェクト見学 (東部ブゲセラ)
- 9日 国連世界食糧計画 (WFP) 事務所訪問、学校給食プログラム見学 (東部ブゲセラ)
- 10日 国連高等弁務官 (UNHCR) 事務所訪問、活動報告を頂く (キガリ市内)
- 11日 ブタレに移動、ギコンゴロの虐殺記念館訪問、ブタレの中学校で文化交流
- 12日 INDANGAMUCO (交流相手ダンス団体) メンバーの結婚式に参列 (ブタレ)
- 13日 本会議③、文化交流会 (NUR 校内)
- 14日 イメナ孤児学校を訪問見学 (ブタレ)、キガリに移動
- 15日 JICA 協力隊助産師の職場見学 (キブンゴ)
- 16日 REACH (NGO) の償いの家造りプロジェクト見学 (キレヘ郡)
- 17日 UNHCR 難民キャンプ見学 (ビュンバ)
- 18日 ウムチョムイーザ学校見学 (キガリ市内)
- 19日 Gacaca 裁判傍聴 (キガリ市内ギコンド)
- 20日 日本へ帰国

第2章

第2回本会議活動報告

- 「官僚制度と日本の近代化」	13
- 「ワーキング・プアと日本の格差問題」	14
- 「ラテン・アメリカの連帯経済」	16
- 「日本の農業とルワンダとの協力の可能性」	17
- 「日本のマイノリティ-外国人の人権」	19
- 「日本における識字と社会的差別」	21
- 「日本のマイノリティ-Koreans in Japan」	23
- 「裁判員制度」	24
- 「ルワンダに必要なファミリープランニング」	25

第 2 回本会議

2009 年 9 月 4 日～6 日、11 日～13 日

活動内容：

日本・ルワンダ両国が直面する社会問題に対し問題意識を共有し自由に意見交換する。

会議目的：

学生の主体的な学び・両国の社会の現状や問題に対しより深い理解を得る。

今回のテーマ：

- ・ 日本の負の側面を伝え「発展」の在り方を考察する。
- ・ ルワンダ社会に適した制度を考察する。
- ・ 和解へのアプローチを学び平和構築を考察する。

成果：

- ・ 日本に対するより深い理解の促進。
- ・ 日本社会との違いを確認しよりよい制度について議論。
- ・ ルワンダにある和解への取り組みを理解。
- ・ 学生として世界で起きている諸問題への認識を共有。

交流・ディスカッションの意義：

- ・ 「人間」としての関係
- ・ 諸課題への関心が高まる。
- ・ 多様な価値観の形成
- ・ 両国の協力関係を模索

<ディスカッション議題>

1 日目

1. 「官僚制度と日本の近代化」
2. 「ワーキング・プアと日本の格差問題」
3. 「ラテン・アメリカの連帯経済」
4. 「ルワンダにおける農業開発の取り組み」
5. 「日本の農業とルワンダとの協力の可能性」

2 日目

6. 「日本のマイノリティ-外国人の人権」
7. 「ルワンダにおけるオンブズマン制度」
8. 「NURC の和解への取り組み」
9. 「日本における識字と社会的差別」
10. 「ルワンダの経済状況」
11. 「ルワンダに必要なファミリープランニング」

3 日目

12. 「ルワンダのコントラクトパフォーマンス制度」
13. 「日本のマイノリティ-Koreans in Japan」
14. 「裁判員制度」

プレゼン1「官僚制度と日本の近代化」

発表者：清水大志

【プレゼン要旨】

このテーマを設定した狙いは、ルワンダが発展途上の国であり、日本の近代化や戦後復興に貢献した日本型官僚制がルワンダにも適用し得るのではないかと考えた点である。また、両国ともに資源に乏しいという点でも、この制度が有用である可能性を高めるのでは、とも考えた。

大きく分けて、四つの内容から構成される。一つ目は、「官僚制度がもたらした、日本の戦後復興」、二つ目は「日本の官僚制の特徴～他国との比較を用いながら～」、三つ目は「日本における官僚制度の歴史と成り立ち」、そして最後は「現在、官僚制度が抱える問題点」というものであった。

一つ目の「戦後復興と官僚制」に関しては、始めに視覚的にインパクトを与えるべく終戦直後焼け野原の写真と現在の東京のビル群の写真を用いた。具体的な内容としては、傾斜生産方式と戦後都市復興計画を例にあげ、官僚主導型政治がこれらの計画を牽引していった事実を述べた。その際に、日本は（ルワンダと同様に）資源に乏しい国であるために、限られた資源をいかに運用してゆくことが必要であったという事実、そしてそのために官僚機構と官僚主導型政治が有効である場合もあることを述べた。また、官僚主導型政治を説明すべく、自民党による長期政権運営という特殊な政治状況に関する説明も補足した。

二つ目の他国との比較を用いた箇所では、アメリカ型、イギリス型、フランス・ドイツ型、といった様々な官僚機構を例に出し、それぞれが持つメリット、デメリットについて説明をした。また、日本独自の特徴として「天下りの慣

習」についても言及した。

三つ目の「官僚制度の歴史と成り立ち」に関しては、明治期における官僚機構の必要性、官僚創出のための帝国大学の創立等、歴史的経緯に関して説明を述べた。なお、その際に、日本の近代化が西洋による支配を防ぐため急務であったという背景も補足した。

最後に現在、日本の官僚制が抱える問題点として、「天下り」の社会問題化、官僚主導型政治の負の側面等を取り上げた。また、このプレゼンが行われたのが、衆院選直後ということもあり、自民党政権の崩壊、官僚制度の見直し等のも言及した。

【ディスカッションテーマ】

「日本の官僚制はルワンダにでも用いることが可能だろうか。」

【グループワーク】

A：結論は出ず。（政治制度の違いを互いに理解しあうことに費やした。）

B：ルワンダには適合しない。（ルワンダはボトムアップ型？）

C：ルワンダには適合しない。（中央集権型政治自体がルワンダでは機能をしないであろう。ルワンダはすでに地方自治体のもとで発展をしてきている。）



【感想】

今会議最初のテーマかつ、朝一番のテーマから「官僚制度」というものであったためかあまり活発に議論が交わされなかったように感じられた。実際の問題としては「官僚」という言葉が持つ意味の違いが大きかったと思われる。

ルワンダ人学生にとっては、地方自治体や公共機関も職員も「官僚」であるらしく、国家の中枢で働く役人、という意味に理解してもらうのに随分苦労をした。さらに、大統領が実質的に全権力を握っているルワンダにおいては官僚主導型政治といったものは理解しにくく、ある意味での政治主導が行われているとも感じた。

プレゼン2「ワーキング・プアと日本の格差問題」

発表者：千田大介

【プレゼン要旨】

ルワンダにおける日本のイメージは科学技術の発展した先進国であり、ルワンダが抱える問題からは無縁の目指すべき模範国と写っているだろう。実際、多くの学生から「ルワンダが日本のように発展するにはどうすべきか」と質問された。世銀の算出する世界 GDP ランキングでは180カ国中144位(2008年)であるルワンダが発展する必要性は言うまでもなく、経済・科学技術の進んだ日本は国際協力分野において大きな責任を担うべき存在である。しかし、現在の日本社会はGDP世界第2位の経済大国でありながら、まじめに働いても安心した生活すら得られない不平等な社会になってきている。いかに経済発展しようとも貧困や格差は社会構造によって生み出され得るものであることを伝える為にこのテーマを選んだ。

ワーキング・プアとは、非正規雇用者など毎日過度な労働をしたとしても十分な収入も社会保障も得られない人のことを指すと定義した。日本のGDPは1999~2008年の間増加し

JRYC

続けていたにもかかわらず、一方で不安定な生活を強いられる非正規雇用者は増え続けていた。OECD加盟国内における日本の相対的貧困率は13.5%(2006年)とアメリカに次ぐ2位であり格差社会であることが示されている。ワーキング・プアと呼ばれる人たちを生み出した主な構造的要因は、1. 国際競争の激化・テクノロジー進化によるコスト削減の必要性とそれに伴う国内労働賃金の降下、2. 国際競争への対応と経営合理化のため1990年代後半から始まった雇用に関する規制緩和、3. 正規・非正規雇用者間の待遇格差と機会格差、4. セーフティネットの崩壊、が挙げられる。グローバル競争への対応という側面はあるものの日本では所得再分配が機能していないことが問題である。結果として、犯罪や自殺の増加など社会不安の増大、内需の停滞といった日本社会全体にとっての悪影響が生まれている。最後に、グローバル時代において競争力向上は重要であるが、不平等で行き過ぎた規制緩和による、富裕層だけが潤う経済は持続可能ではないと強調した。

【ディスカッションテーマ】

- ① 貧困者が貧しい生活を送っているのは彼らの責任だろうか？
- ② 貧困と格差の問題をどうやったら解決・改善できるか？
- ③ 政府の役割は何か？
- ④ NGO や地域コミュニティの役割はなにか？

【グループワーク】

A：貧困の責任

・多くの国民がそれぞれの立場からルワンダ社会発展に寄与しているものの、未だ多くの問題がある。

・ルワンダにはまず、人口密度の高さ、内陸部の山がちな地形といった環境的難しさがあ

り、社会的にも人口の90%が農業従事者である。

・94年の虐殺で残された孤児や未亡人（貧困層）という外的要因がる。

・教育を軽視し農民の生活から抜け出そうとしない親の自己責任がある。

政府の責任

・一定の教育の向上はしてきた。全ての子供に均等の教育機会をとる政策（義務教育）を広めようとしている。

・教育支援。孤児や未亡人といった生存者の為の政府基金がある。

・経済圏強化のため東アフリカ共同体（East Africa Community）などに加盟。

・労働時間の拡大。午前8時から午後5時までの労働時間を午前7時から夜遅くまで働くよう意識向上を図っている。24時間営業の仕事もある。

・経済成長政策によって貧困の削減を目指す。

・健康向上も主導している。（国民保険整備？）

B：貧困の責任

・貧困の責任には仕事しない、学校行かない、といった自己責任もありうる。

政府の役割

・経済政策ルワンダでは「One cow for one family」いう政策がある。

・Cooperativeをつくる。

・健康に関する政策として、年間1,000ルワンダ・フランの保険支援金や健康の意識を高める。—銀行預金を根付かせるため、貯金の仕方、お金の使い方などを教える。

C：貧困の責任

・働かない者は自己責任を負っている。

・貧困家庭は物質だけでなく教育機会を確保することも困難であり貧困に対する責任はない。

政府の役割

・教育の発展、教育機会均等の実現

・医療保険整備

・農業発展させる政策

・国際社会から利益を得る（東アフリカ共同体など）

NGOなど役割

・ネットワーク構築

・民間投資の促進

【感想】

要約にある通り「貧困」問題は物質的な発展だけで解決されるものではなく構造によって造り出されるものだということを協調し伝えるよう励んだ。しかし、農業従事者4%で2008年GDP497兆円という日本の経済状況を紹介すると、むしろ「やっぱり日本はすごい」という感想を持っているようだった。ワーキング・プアなど日本の「格差問題」というのは「元々平等だった」というのがある程度社会の前提となっている。農業従事者90%というルワンダの社会において「ネットカフェ難民」というような日本の格差問題がどこまで問題として響いたかは定かではなかった。効果的な成長戦略でこの経済危機にもかかわらずGDP年二桁の成長をしているルワンダでは大統領のカリスマが強く国際社会を始め一定の評価を得ている。一方、経済発展の利益が末端の人々まではなかなか行き届いていないのが現実で、そこに目を向けることの重要性を伝えたかった。実際写真や映像、証言を通して問題を抱えている個人に焦点を当てて紹介するという工夫をもっとするべきだったと改めて反省した。また反対に、ルワンダの現実に比べて日本の「格差問題」を同じ「貧困問題」として並べられないという緊急性のギャップを当然ではあるが、改めて実感させられた。

プレゼン 3 「ラテン・アメリカの連帯経済」

発表者：渡部香

【プレゼン要旨】

ラテン・アメリカの新たな経済システムは興味深く、ルワンダや日本は学べることもあるだろうとおもいこのテーマを選んだ。

1970 年代から急激な新自由主義的な改革によって同様の失敗を犯してきたラテン・アメリカでは、開発主義や利益至上主義とは異なる原理に依拠し、コミュニティ内外での討議による合意形成と、開かれた共同性に基づく他者との連帯によって、新たな経済セクターを創出し、自律的な社会経済発展が模索されている。

いま世界的な潮流となっている新自由主義およびその経済的実践である「構造調整」は、国家の財政面からみれば、過剰な財政負担に耐え切れなくなった福祉国家が、市場調整に多くを任せてスリム化するための原理・政策と理解できる。日本を含め世界の様々な国・地域では、こうした国家の機能低下の隙間を埋め、暮らしを守るために、そしてより積極的な意味では、国家との関係を再考し、自らの手で新たな価値観に基づく豊かな人間関係と地域社会を築くために、NGO や非営利組織、協同組合など、いわゆる社会経済セクターが拡大している。

ラテン・アメリカでのアソシエーションを核とする試みは、新自由主義の名のもとに福祉国家が後退し、人々が「個化」する時代にあって、「住民—地域社会—国家—市場」のよりよい関係についての示唆を含むものである。

【ディスカッションテーマ】

①ルワンダではどのような社会を構築していきたいですか？

②そのためにはどのような経済的アプローチが有効ですか？

【グループワーク】

A :

- ・平和な国
自己経済持続可能、教育の促進、ビジネス、計画、農業の促進
- ・自由主義、政府の介入、民営化:

B :

- ・協働開発
社会(社会的な共同体)を発展させる共同体(学校、村、市場)への協力 -各村には、それ自身のプランがあります。
- ・経済開発
 - 基本的なインフラストラクチャ
 - 投資を促進する
 - 観光促進
 - 農業促進

C :

- ・平和な社会
 - 健康と知力
 - より多くのインフラストラクチャがある開発された社会
 - 外国との良い関係
- 達成するために
 - 医療を改良する
 - 知識を改良する
- 外国からお金を得るために。
 - 外国の会社から投資
 - 国際市場に加わる
- ・なし

【感想】

「Peaceful society を目指したい」というルワンダの学生の想いに希望を感じた。各チームのディスカッションの内容をみると、医療・教育・インフラ・周辺国との協調・海外投資など様々な分野を視野に入れた複合的な開発を提案している。また、「それぞれの地域にとって

最適な開発計画をたてる」という意見が印象的だった。あらかじめできあがった計画をすべての地域に機械的にあてはめようとするのではなく、地域の特性を見極めて、柔軟でその地域にとって効果的な計画をたてることは重要である。

プレゼン 4「日本の農業とルワンダとの協力の可能性」 発表者：大山 剛弘

【プレゼン要旨】

日本に対する海外の評価として、工業先進国としてのイメージが先行することは、ある意味当然のことで、実際それも一つの真実である。しかし、その陰で日本にも他国と同じように様々な人が住み、伝統があり、文化があり、日々を営んでいる。今回は、ともすると見過ごされがちな日本の農業国としての側面を取り上げ、ルワンダの学生たちに紹介した。また、日本とルワンダの農業環境の類似点についても取り上げ、今後の両国の協力関係について考える機会を設けた。

構成 1. 日本の農業事情

日本は温暖湿潤気候に属し、多くの地域で1年を通して降水は豊富で、極端な寒暖を経験することも少ない。特に水には恵まれる国であり、単に降水が多いだけでなく、森林が水の地面への吸収を防ぐために、同じだけの雨が降っても活用できる水量というのは、ヨーロッパなどと比しても多い。一方、日本の国土面積は約37万 km²で、1億3千万人近い人口を持つ国であることを考えれば、決して広い国とはいえない。加えてその国土は山がちであり平地面積はさらに少なく、人々は限られた空間の中で生

活をしている。そして言うまでもなく人間の生活の基礎には食があり、それを支えるのが農業であるが、この国においては当然農地の面積も限られたものとある。

現に1農家あたりの農地の面積は、諸国と比べても非常に小さい。これからは1農作物あたりにかかる高い人件費、生産効率の悪さ、といった問題が生まれる。また国土の60%以上は山地であることから、新たな農地の開発や機械化が難しいという問題が発生する。たとえばアメリカやオーストラリアのように大規模な企業的農業を日本で展開することは不可能だろう。実際に日本でも頻繁に自給率の問題が取りざたされるように、決して現在の農業事情は好ましくないことも確かである。これらを考えると日本の農業が目指すべきなのは、限られた農地の可能性を最大限に引き出し、かつ人件費などの諸経費を抑えることであると考えられる。

構成 2. 1 に対しての日本の(将来的)対策

1つ目には品種改良を挙げた。日本はこの分野においても高い技術力をもち、ここからは単位面積当たりの収益の増加や、異なる気候下での栽培の可能性につながっていく。また安全性や倫理の観点からの反対意見も根強いが、遺伝子組換えについても日本は高い技術力をもち、将来的にはその分野の開拓を行っていくことも視野に入れておくべきだと思う。特定の宗教をもたない国であるということもここでは有利に働くのではないかと考える。2つ目は、農業の自動化・無人化である。これはまだ幅の広い実用化はされていないが、着実に研究の進められている分野である。いわば作物の”工場”をつくり、その中での温度・湿度や給水を完全に自動化するという試みである。これは人件費の削減につながるだけでなく、現在の農業の後継者不足の一つの解決の仕方にもなりうるものである。

構成3. 日本とルワンダのこれからの協力の可能性

もちろんルワンダは内陸国であり気候日本とルワンダに共通した環境の特徴として、

- ・ 人口に比して国土面積が小さいこと。(人口密度はほぼ同じ)
- ・ 「1,000の丘の国」といわれるように、ルワンダも山がちであること。
- ・ 自然資源に乏しいこと、などが挙げられる。またこれらから想像されるように、抱える課題も。
- ・ 満足な自給が出来ていない。
- ・ 限られた農地を最大限利用すること。
- ・ 発展には技術力が必要とされること。

など似通ったものも多い。したがって、現在日本が進めている研究や技術はこれからの両国の協力を大きく寄与すると考えられる。そして将来的にルワンダが技術力を獲得した時には、両国で協力して研究を進め更なる状況の改善が進むものだと考える。これはルワンダのみならず、同じような課題を抱えるアフリカ諸国などについても同様である。

【ディスカッションテーマ】

ここで紹介された他に、どのような共通点が日本とルワンダにはあるのか。

そこから考えられる協力には、どんなものがあるのか。先にも書いたように、日本とルワンダには一定の共通点を見つけることができる。今後密になっていくであろう両国の関係について、互いの国の学生が考える貴重な機会となると思ったので、このようなテーマを設定した。

【グループワーク】

A: 日本は活発な貿易を通して発展をしてきた。ルワンダも現在「アフリカのシンガポール」を目指している。技術力を活かすノウハウを共有すればルワンダの発展につながる。

B: 人々が周辺国に比べシャイであることが共

通している。

それを活かす道はあまり思いつかなかった。

C: 他の国との関係性を断っては発展していけないところ。外交上のテクニックを共有することが、両国のメリットになる。

【感想】

これが1日目の最後のプレゼンテーションとなったわけだが、朝9時から始まったのにもかかわらず時間も18時近くそこにいた皆にかなり疲れがみえた。加えてこのプレゼンテーションの前のルワンダ側の発表とややテーマが似通ったところがあり、それほどディスカッションは発展しなかったように思う。しかし幸いにも彼らは最後まで耳を傾けて聞いてくれていたし、日本人自身によって工業国日本のあまり注目されない側面が紹介される、ということはやはり彼らの注目を引きつけるのに十分な理由となるのだなと感じた。そして、少なからずルワンダが日本と似た側面を持っていることが、ディスカッションを通して彼らに印象を残していることが確認できてよかった。

また惜しむらくは、自らの英語力不足である。より踏み込んだところまで詳細な情報が伝えられたなら、発表もディスカッションもより興味深いものになったはずだ。言語の壁は私たちの間にある。文脈では読み取れないような詳細かつ重要な単語は、かみ砕いて説明できるだけの知識を身につけなければ、と感じた。とはいえ、全く異国の人々の前で自国の紹介が出来た、ということはとても貴重な機会であったし、自分が広い世界のなかのほんの小さな島国で生きてきたのだな、と実感することができた。このような機会を逃さないように、虎視眈々と次を見据えていたい。

プレゼン 6「日本のマイノリティ—外国人の人権—」 発表者：Kristina Gan

【発表要旨】

日本は先進国でありながら、「人権」では遅れているということが現状である。特にマイノリティの問題はオープンに議論されていないといえる。外国人または外国籍はマイノリティに属する。過去数年間労働者の不足を補うため多く入れるようになった。しかし、日本国内は社会的と制度的にも受け入れる体制は整っていない。その数は他の先進国と比較しても少ない。日本に住む外国人・外国籍を取り巻く問題を紹介することで、日本と人権の現状を追求し、理解を促進したい。

まず、日本にはどのようなマイノリティが存在するのか紹介した後、「外国人及び外国籍の人たち*」にフォーカスしてプレゼンを進めた。日本は経済の面では発展しているが、人権の面は遅れているといっても過言ではない。ここ外国人は、移民（長期滞在の外国人を含む）、在日、難民と非正規滞在者を指す。2008年の総務省の統計によると日本に住んでいる外国人は総人口のわずか2%（総人口 127,614,000: 外国籍 2,217,426 人）。大半はアジアから来た人たちである。

日本では外国籍に各市役所で外国人登録し、外国人登録証の常時携帯を義務つけている。警察に捕らえられたとき、携帯していないという理由だけで逮捕可能となっている。この制度に代わる新たな在留管理制度「外国人住民票制度」が導入される。しかし、この新たな制度では難民申請者や非正規滞在が対象外になってしまう。そのため今まで受けられた行政サービスを受けられなくなる。たとえば、子どもは学校に行けなくなってしまうのだ。だが、外国籍の子どもにはもともと教育権は保護されていない。そのため、外国人学校などは正規な学校

としてみなされていない、教育援助を受けられない。

それだけではなく、日本では外国人に対する差別を禁止する法律が設置されていない。そのため、大家さんが外国人へのアパートなどの賃貸を拒絶することがある。日本は多くの外国人労働者を受け入れているが、社会保障や労働保障がない企業もある。経済危機で失業した人の多くは外国人。失業した人の子どもたちで学校に行けなくなった人もいる。

そして、日本に長く住んでいても外国籍には選挙権は持てない。マイノリティとして政治的に声をあげることは重要だが、事実上声をあげ

る機会は事実上あまりない。



日本は、外国人及び外国籍の人権に関して解決しなければならない問題が多い。本当の国際化とは表面上のものだけではなく、国籍問わず

の人権保護と適切な制度の設置、一般市民の外国人などのマイノリティに対する意識を高め共存できるように、内面から取り組む必要がある。

*外国人・外国籍＝外国から来た人たち。しかし、在日など日本に生まれ育った人もいるため外国籍の人たちという表現の方が相応しいかと判断した。

【ディスカッションテーマ】

3つのテーマを提示して、それぞれテーマごとにグループに分かれ、それぞれの国での人権状況を議論した。

- ① :ホモセクシャル
- ② :女性
- ③ :難民

【グループワーク】

A:ホモセクシャルチーム

- ・ 日本では、多くのホモセクシャルが存在しているのにもかかわらず社会は彼らに対してまだオープンといえるほどではない。差別されることもある。
- ・ ホモセクシャルを取り締まる法律も保護する制度もない。曖昧な立場に立たされている。
- ・ ホモセクシャルは人間として、他人に被害を加えているわけではないため差別をするのは間違っている。

ルワンダ側：

- ・ ルワンダではホモセクシャルになることは文化的に恥じるべきと思われている。そのため日本と同様彼らを保護する制度はない。
- ・ ホモセクシャルが増えれば人間の生殖が低下してしまう心配がある。
- ・ ルワンダでは、ホモセクシャルになることは生物学的要因ではなく、精神的な異常として捕らえているため治療すべきである。

B:女性

日本側：

- ・ 国会での女性議員の割合は男性と比べ低く、10%程度。
- ・ 政治的参加が少ないが、女性という性別により教育を受けられないことはない。
- ・ 日本社会ではジェンダーロール（性的社会役割）が強い。
- ・ 無意識に女性自身が自分の人権を自覚していない。

ルワンダ側：

- ・ 政府はジェンダーバランスを目指しており、30%の席は女性議員に確保している。24%の席は女性を優先に取るが自発となっている。

- ・ 大統領夫人は女の子への教育支援を熱心に取り組んでいる。
- ・ 政策では女性の科学と技術分野の訓練を支援している。
- ・ 女性が参加できる活動の活発化。
- ・ 女性のための就職支援もある。

C:難民

日本側：

- ・ 日本ではホームレスやネットカフェ難民ちと言われている国内難民がいる。
- ・ 日本の難民受け入れ人数は他の先進国と比べ少ない。受け入れに対し非常に厳しい要因のひとつは外国人の人口増加による政治的不安定を恐れている。
- ・ 難民問題に関して日本はまだ大きな課題を抱えている。

ルワンダ側：

- ・ ルワンダ自身は大量のルワンダ人難民を出した経験があるため、難民の人権を尊敬している。
- ・ ルワンダは難民が発生する原因には腐敗した政治であり、受け入れなければならぬと理解している。

【感想】

「人権」は普遍なものであり、日本にとってもルワンダにとっても重要な課題である。日本は先進国として多くの外国人が住んでいるというイメージがあったのか、総人口のわずか2%だと伝えると日本メンバー同様にルワンダ人は驚いていた。日本に住む外国人は、在日韓国人や中国人、また日系人も入れたら他の国と比べ独特な特徴がある。日本を理解するには欠かせない面であろう。

現在のルワンダ政府には先進国ほどのガバナンスキャパシティはないが、人権に対する市民の意識を高めようという努力が強い印象を

受けた。職業の面では、ルワンダと比べ日本の



方が圧倒的に仕事は多い。だが、女性の政治や社会進出の割合を高めようとい

う意識は、経済的な理由で仕事が少ないルワンダと比較して低く感じた。しかし、ホモセクシャル問題など保守的なところもある。宗教や文化の影響もあるだろう。

置かれている環境の影響があるかもしれない。教育の面では日本国籍を持っていれば援助は受けやすい。正規な滞在許可を所持している外国人も援助は受けられる。そういう現状にいと、そのなかに潜んでいる問題は見えにくい。人権というものは普遍なものではあるが、異なる文化・歴史・環境の国の人権状況についての情報を交換することができ、人権というものと自分の国にある人権問題を気づかせてくれた。

違う価値観を持っている人たちとの議論はとても刺激だった。改めて自分の価値観を自覚する機会であり、また他の意見を受け入れ視野を広げさせてくれた。ルワンダ国立大学の学生とのディスカッションは有意義な時間で、貴重な経験だ。

プレゼン 7 「日本における識字と教育」

発表者：大久保美希

【プレゼン要旨】

日本の教育問題の一つとして、マイノリティの非識字の問題を提示することで次の二点を伝えることを目的とした。①「教育の行きとどいた日本」という一定のイメージを崩し、マイノリティの教育課題を伝える。②「識字」の意味の多義性を伝え、両国の教育の重要性を改めて考えるきっかけとする。

まず「識字」という言葉の定義と世界の識字率の紹介をした。世界の識字率は南北で二分化されており、例えばルワンダは 64%である一方で、日本は 99.8%と報告されている。この実態を見た上で、1800 年代から高い識字率を誇ると言われる日本について、その背景の一つを寺子屋の活動に見出し、日本の伝統的な民衆教育について紹介した。1830 年代に広がりを見せたと言われる寺子屋は、商人のみならず農民たちも読み・書き・算を学ぶ機会となった。このような幅広い民衆に対する学習の場の提供によって、多くの人々が日常的に文字の読み書きができるようになったと考えられる。

しかしその一方で、現在の日本にも非識字者が存在している。しかしこれは、0.02%であるがゆえに見えない問題である。日本の非識字者とは、被差別部落の人々、アイヌの人々、在日外国人、障害を抱えた人々などである。今回は、被差別部落の人々の非識字の背景に焦点をあて、日本の歴史的な差別や格差の一側面について触れた。日本で文字が読めないことは、社会生活をまともに送ることが出来ず、自らを社会の片隅に追いやることにつながっている。

この日本の非識字は、識字教室の開設によって数十年かけて改善されてきた。1960 年に広

島県で始まった識字学級は、1990 年代に全国の様々な夜間中学校や市民施設で広がった。最後に、50 代や 70 代という世代の人々が文字をおぼえて綴った作文を提示する中で、識字の意味についてまとめた。識字とは、ただ文字が読めて書けるという能力を意味するのではなく、その人の社会の見方や生き方に大きく関わるものであるということである。そして、日本では 99%以上のマジョリティが社会の「当たり前」をつくることで、マイノリティの問題がいかにかに認識されにくいのかということについて提示し、そこを強調して結論とした。

【ディスカッションテーマ】

- ① ルワンダにおいて、教育や識字問題から生まれる社会的な課題とは何か
- ② ルワンダと日本の識字問題の共通点や相違点とは何か

【グループワーク】

A、C:の討論及び発表内容は不明。

B:

①について

- ・ 1994 年の虐殺を経験している人々の中には、まだ読み書きができない大人が多く存在している。しかし、かれらはなかなか教育の機会を得られない。
- ・ 政府は「Education for All (全ての人々に教育を)」という政策を打ち出しているが、教育の重要性を認識していない親のもとで育つ子ども(※)やストリートチルドレンが存在しており、理想と現実のギャップがある。(※農業で生計を立ててきた家庭の親たちの中には、しばしば子どもを学校に行かせることに意味を感じていない。)
- ・ 教師が慢性的に不足しているが、教師の給料が低いことから、教師になりたいと思う人たちが少なく問題が改善されない。ルワ

JRYC

ンダでは、Secondary School の中に小学校の教員養成コースがあるが、そのコースは不人気(自ら希望して行く人が少なく、普通科で成績が取れない人や、大学進学の見込みがない人など、モチベーションが低い人が多い)。

②について

- ・ ルワンダも日本も教育格差は問題になっている。しかし、ルワンダでは、全ての子どもに義務教育を行きわたらせることが課題である一方で、日本では義務教育を終えた後の進路による学歴格差の問題が課題である。特に日本では、学歴格差が生涯賃金の格差に直結しており、これが社会問題と化している。
- ・ 日本の学校教育における大きな問題として、「いじめ」があげられるが、ルワンダでは認識されていない様子。

【感想】

このプレゼンテーションをする前から、日本の 99.8%の識字率から問題をあぶりだすことなど、ルワンダ側からは皮肉に聞こえてしまうのではないかと懸念していたが、当日は皆が問題を真摯に受け止め、日本の社会的差別について興味を示してくれたことが嬉しかった。また、教育問題について真正面から議論してわかったことは、日本とルワンダの両国にとっての様々な社会問題は、そのほとんどが教育の問題に起因すると言っても過言ではないということであった。そのくらい本質的な問題(特に「格差」に関する問題)がいくつも浮かび上がってきた。

ルワンダの学生の話の中で意外だったことは、学校に行けていない子どもについて、その原因を虐殺や貧困ではなく「親の怠惰」と表現していた場面である。親が、自分のこれまでの人生の中で教育の重要性を認識してこなかっ

た場合、子どもを学校に通わせないことをさほど問題視しなくなるというのだ。だからこそ、政府がどのような政策を打ち出しても、親の認識を変えていかなければ実際の効果はでないと言っていた。これは、日本側の私たちが予期していなかったルワンダの実情であった。個人的には、ここにいる私たちは皆大学まで通うことができた学生として、教育による恩恵を最大限享受しているという自覚についてももっと話し合い、将来自分たちが使命感をもって国内の教育問題をどのように変えていきたいかというところまで議論したかったが、両国に存在する格差の問題について向き合えたことは意義深かったと思う。

プレゼン 8 「日本のマイノリティ -Koreans in Japan」 発表者：朴淳夏

【プレゼン要旨】

本学生会議の目的である、日本とルワンダ間の社会問題の相互理解という視点から、日本におけるマイノリティ問題に着眼する。このプレゼンテーションでは、日本での最大の外国人問題である在日コリアンの問題から、日本の社会問題の理解を即す。また同じ虐殺の歴史を持つ在日コリアンの現状を紹介することによってその共通点、差異を知り、お互いの社会問題を理解することを目的とした。

構成 1. 朝鮮半島について。

ここではアフリカ大陸から遠い朝鮮半島の位置、衣食文化、宗教分布などの基本情報を提供し、ルワンダの学生の朝鮮半島理解に努めた。

構成 2. 歴史について。

朝鮮半島の現代史についての概略を説明し、第2次世界大戦、朝鮮戦争、世界において唯一分断されている朝鮮半島の歴史について紹介した。

構成 3. 4. 在日コリアンについて、日本と朝

鮮半島の関係について。

この部分では、在日コリアンがどのように日本に定住するようになったのか、その過程について、そして



現在日本における在日コリアンへの処遇について言及した。ここで

は主に本名を使わず、通名を使う在日コリアンや、民族学校卒業生の国立大学進学制限、永住権を有する在日コリアンの外国人登録証の保持義務などを言及。最後に、在日コリアンが経験した関東大震災での朝鮮人虐殺について説明し、日本と朝鮮半島の関係については、日韓、日朝の過去の歴史と現在の交流について言及した。

【ディスカッションテーマ】

「アフリカとアジアでの民族間対立の共通点と差異は何か。」

このテーマを設定した狙いは、「虐殺」の歴史を潜り抜けたという共通点を持つルワンダの人々と在日コリアンにとって、アフリカとアジアで、とりわけルワンダと在日コリアンの（民族間）対立の共通点と差異は何かを知り、現在この問題の解決の糸口を少しでも認識しようということである。

【グループワーク】

A B: 不明

C: ルワンダでは現在少なくとも、外見や身体的特徴で差別、区別することはない。その他、ルワンダでの外国人認識について聞いた。

【感想】

- ・ ルワンダ、日本学生お互いの、ルワンダ国内での外国人政策の認識の不足からか、発

言が活発ではなかったと感じた。

- ・ ルワンダ国内の外国人の数、政策に関して、日本側が認識不足であった。事前学習の必要性を感じる。
- ・ アフリカ、アジア間の民族間の共通点と差異を討論したかったが、少数学生以外、ルワンダ以外の外国の外国人問題を認識しておらず、討論がスムーズではなかった。討論範囲が広すぎたと思われる。
- ・ ルワンダの学生の反応を見る限り、日本における在日コリアンの歴史、虐殺の歴史を認識でき、プレゼンテーション以前よりも理解を促進できた。

プレゼン9「裁判員制度」

発表者：勝俣玲

【プレゼン要旨】

裁判員制度は2009年5月から始まった、日本の新しい司法制度である。これは市民が裁判に参加し、専門の裁判官と一緒に議論し判決を下すという制度で、ルワンダの持つ伝統的な裁判システム、Gacaca 裁判と似た性格を持っているので取り上げた。これを元に、裁判への市民参加の意義を議論することを意図した。

構成1. 裁判員制度とは

これまでは3人の裁判官によって判決が下されていたが、裁判員制度の下では原則3人の裁判官と6人の市民とで決められることになる。裁判員には、20歳以上の日本国民であれば誰でもなることが出来、ランダムに選抜される。前科を持っている人、被告人・被害者とその関係者、警察官や国会議員などは、裁判の公平性にかんがみ裁判員になることが出来ない。また、この制度は広く市民に

参加を求めるものであるため、基本的に選ばれたら拒むことは出来ない。参加を拒否できるのは、70歳以上の人、学生、重大なケガや病気の人など。また、裁判員制度の対象事件は、刑事事件の殺人事件などの重大事件に限られる。

構成2 見込まれる効果

- ①国民の司法への理解を深め、信頼を向上させる(裁判員法1条に明記されている)。
- ②裁判がより迅速に行われるようになる。
→家族や仕事を持っている一般市民も参加できるようにしなければならないため。
- ③裁判がより理解しやすいものとなる。
→裁判官は、市民にもわかりやすいように易しい言葉で説明しなければならないため。

構成3. 問題点

- ①市民に参加を強制するものであること。
 - ②裁判員になった人は、会社で不利益を被る可能性がある。
→大企業は、裁判員に選ばれた社員に対して有給制度を導入することが出来るが、零細企業には負担が大きい。そのため裁判員に選ばれた場合も有給休暇を取れず、昇進などに影響が出る場合がある。
 - ③問題点が表面化しにくい。
→裁判員は裁判の内容についての守秘義務を負っている。そのため、裁判の中で問題が生じていても、それを公表して議論することが出来ない。
- ① 判に参加することへの不安と匿名性。

【ディスカッションテーマ】

市民が裁判に参加することに賛成か反対か？

【グループワーク】

B、C:の討論及び発表内容は不明。

A:

・反対

市民は感情的になるため、公平な裁判を期待できない。

・賛成

国民にお互いや自分の地域・国に起こっていることを理解してもらうのは重要なこと。

国民の裁判と司法についての教育促進になる。

【感想】

渡航のメインの活動である第 2 回学生会議においてルワンダ国立大学（National University of Rwanda : 以下 NUR）大学生の意識はとても高まり、議論もさらに幅広く深いものとなった。学生会議ディスカッションは NUR が授業期間であるため 2 週に渡り土日に開催されることになっていた。キャンパスに到着すると、すぐに会議全体についてスケジュールを確認した。驚かされたのは、2 週目の土曜日は会議を休みにしようというものだった。次の土曜日は、ルワンダ側学生会議メンバーが所属する INDANGAMUCO というダンスグループの友人の結婚式がありそこでダンスを披露するため日本メンバーも一緒に参加し結婚を祝おうと提案してきた。どうやら日程は変えられそうもないので、頑張って 1 週目の土曜・日曜と 2 週目の日曜だけで会議を終わらせようと確認した。ところが、今回はルワンダ側から 15 名程発表したい人がいるというのだ。嬉しい悩みではあるがさすがに全員に発表してもらうことはできないので 7 名に絞り、毎回 9 時から 18 時まで集中して会をすることで合意した。日本人 8 名のプレゼンに対しルワンダ側 1 名だった去年と比べれば 15 名が発表希望ということで意識の高まりは驚くべきものがあった。ただ時間については心配が残っていた。去年は 9 時から始める確認したにもかかわらず結局リーダーのカリオペ以外は 10 時くらいに現われ予定通り進まなかった経験があったからだ。今回はリーダーのカリオペが文字通り 30 回くらい他のメンバーに 8 時半には完全集合だと強調していた。当日少し不安もあったが教室にしてみると 10 名くらいのルワンダメ

JRYC

ンバーが席についていた。他のアフリカ諸国と比べ勤勉と言われるルワンダ人にはあるが、朝 9 時という約束を守り予定通り会議が進んだことには驚きとともに潜在力の高さを感じさせてくれた。結局、全日程 9 時から始め夕方まで 10 時間以上も真剣にディスカッションすることができた。ルワンダメンバーは皆試験期間中であり相当疲れただろうが共に頭を使い精一杯意見交換し双方向の理解は深まったと実感する。日本側も何ヶ月もかけ歴史、政治、経済、法律など様々な角度からルワンダについての勉強会を重ねてきたからこそより深い議論もできた。今後はルワンダ側でも定期ミーティングを開き日本についての勉強会や団体として企画を立てるなど年間を通して学生会議としての実質的な活動が発展していけばより相互理解を深め強い関係を築いていけると考える。

ルワンダ側プレゼン

Family Planning

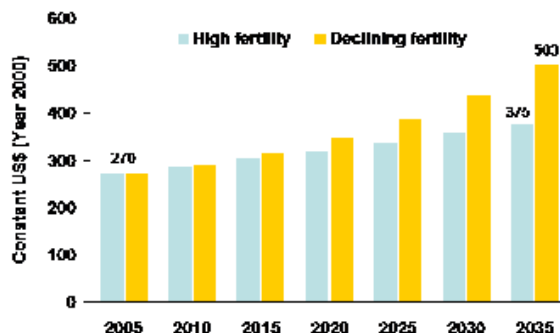
発表者：AKINTIJE SIMBA Calliope

【プレゼン要旨】

現在のルワンダの平均出生率は 6.1% である。ルワンダも日本のように人口密度が高い（日本とルワンダの統計）。人口増加は貧困から抜け出せない理由のひとつと思われる。政府と市民団体などはファミリープランニングを普及させようとしている。ファミリープランニングとは、個人や夫婦が計画的に子どもの数を決め、余裕があるときに生むことを指す。

98%の女性はひとつくらいの避妊を知っているが、実際避妊している割合は都会（キガリ周辺）では 32%で、田舎では 15%（情報源は？）。このまま放つとけば、2035 年には総人口は約

2倍に増える(統計)。コンドーム、注射やピルなどの近代的な道具を使用されている確率は10%で、膣外射精という伝統的な方法で避妊をしているのは7%。人口の増加はルワンダの教育、健康、農業、開発、都会化や環境に多大な影響がある。ルワンダの9割は農家である。



◆人口増加と開発

子どもの数を計画的に抑えることができれば、しっかり家族を扶養できる。東アジアでは、人口の増加抑止政策を打ち出し、国民の社会福祉を優先したことにより「アジアの奇跡」につながったと思われる。資源の配分より効果的となったためより多くの人に行き届いている。未熟練労働者よりも生産性の高い労働者が育成できるようになった。教育にあてられる国費も人口が低下してから拡大した。

上記の図で読みとれるのは、出生率を理想の4.5%に抑えることができれば、経済成長を7%まで向上し一人当たりのGDPも上昇する。7%の経済成長率は貧困撲滅アクション計画にも含まれている。

◆社会福祉と開発

人口の増加は土地(農業)にも影響する。例えば、ある土地を1代目では一人で使用していたにもかかわらず、2代目となる6人の子ども

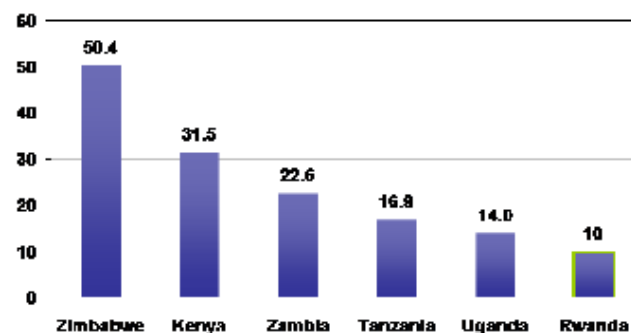


に分けるとする。

そして3代目にはその土地を9つに分けなければならない。このような連鎖は農業の非効率性を生み出し、土地自身の質を落とすことになる。

◆避妊普及には

「現代の避妊方法の浸透率」



ファミリープランニングを普及させるには、以下の政策が必要である。

- 第一、避妊したいけれども情報などにアクセスがない人を発見し支援する。
- 第二、低コストで避妊方法を教える。
- 第三、生む子どもを減らす前提ではなく、ファミリープランニングを定着させること。避妊を知らない人にそのことを教え、望まない妊娠を防ぐ知識を植え付ける。
- 第四、国の経済成長と社会福祉の保障改善につながるよう意識を高めること。

政策を効果的に実行でき、かつ成果を出せるには、個人単位のオーナーシップと、国家と

地域レベルでの取り組みが求められる。お手頃であり、誰でもアクセス可能な公共医療サービスの確立も重要である。より医療サービスを充実させるため民間団体や企業の参加も必要だろう。そして、この問題に対する無関心さを改善するよう、教育を全員に行き届くようにすること。



第3章

ルワンダ現地見学活動報告

-PFR 和解村	29
-メモリアルセンター	34
-人間開発戦略計画コーディネーター Emmanuel Havugimana 氏	36
-JICA・農村開発プロジェクト	38
-WFP 学校給食プログラム	40
-UNHCR 難民キャンプ	42
-COLLEGE IMENA de RUNYINYA	47
-REACH 家造りプロジェクト	51
-ウムチョムイーザ学園	63
-Gacaca 裁判	67

PFR 和解村 訪問報告

担当：大久保美希

【訪問日時・場所】

9月3日(木) 9:00~15:00

Prison Fellowship Rwanda オフィス：キガリ
(キチュキロ)

Reconciliation village (和解村)：東部ブゲセラ
(マヤングセクター)

【訪問目的・準備】

1994年の虐殺以降、国内では国家・草の根レベルで様々な和解の取り組みが為されてきた。その中で、国家政策レベルの取り組みを概観しただけでは、コミュニティにおける人々の関係性の変化や住民一人ひとりの心理的な葛藤などを伺い知ることができなと感じてきた。そのため、草の根レベル、つまり、住民が住民同士でどのような和解の活動を展開しているのか、その実態を知りたいという思いをもち、今回現地 NGO が主導で行う和解村への訪問を決めた。

訪問を実現するまでの準備は次のような手順で行った。和解村づくりの創始者である司教デオさんと事前にメールで連絡を取り、ルワンダに到着した9月2日の午後、ドライバーのムニャカジさんを通じて電話でスケジュール調整。その翌日に訪問が実現した。訪問当日は、まずデオさんが代表を務めるルワンダの現地 NGO の Prison Fellowship Rwanda (以下 PFR) を訪問した。そこでは、PFR の立ち上げ、ルワンダ国内の和解の問題、和解村の立ち上げと現状などについてブリーフィングを行った。その後、PFR のスタッフ1名に同行してもらい、東部ブゲセラにある和解村に向かった。和解村では、そこに暮らす人々のうち一軒のお宅を訪問し、スタッフによる通訳を介して4名の被害・加害者証言を聴いた。最後は、日本メンバーのギターに合わせて皆で踊る場面

もあった。全スケジュールで5~6時間ほどの訪問であった。

【和解村の概要】

1. 現地 NGO PFR について

① 設立背景

PFR とは、1994年の虐殺のわずか一年後に作られた現地 NGO で、虐殺の被害者と加害者の和解を通じてルワンダ社会における公正なコミュニティづくりを目指している。ルワンダでは、1994年以前にもいくつかの虐殺が起こっており、人々の間には長い歴史の中で世代を超えても癒えない憎悪や悲しみがある。また、ルワンダの刑務所には、虐殺に関わった多くの囚人がおり、全国の地域コミュニティには多くの被害者が暮らしている。この意味で、ルワンダ社会にとって、二度と虐殺を繰り返さないための「和解」とは多くの困難や問題を抱えていると同時に、大きな意味を持っている。

PFR の代表を務める司教 Deo は、1996年から刑務所にいる囚人たちに向けて教えを説く活動を始めた。Deo は、囚人たちに自らの罪と向き合うこと、そして罪を告白し、許しを求めることを語りかけ続けた。このことが囚人たちの心に様々な変化を生み、かれらは自らの罪を受け入れ始めたという。2003年以降、罪を自白した囚人たちの多くは釈放され、これまでに35000人がコミュニティに戻る事が出来た。

現在の PFR は、9名の有給スタッフと45名の国内ボランティアで成り立っている。他の連携組織は、国内では政府の National Unity and Reconciliation Commission(NURC)、国際 NGO では PFR International、Norwegian church Aid、Action Aid、そして様々な個人とも協力して活動している。

② 活動内容

PFR のミッションは、キリストの教えに則り、刑務所やコミュニティの中で人々に対し聖

書に基づく公正さを教え、人々の調和、和解、修復、社会復帰を促進することである。PFRの主な事業は3つで、①福音事業、②カウンセリング事業、③開発事業である。この中で、主に①と③の活動にまたがって展開されているものの一つに、ルワンダのコミュニティにおける実践的な和解を促進するための「和解村」というシェルター作りがある。

2. 和解村について

2003年より、虐殺の被害者、加害者、そして孤児などのために全国10カ所に計400件の家が建築され、総数3,000人の被害者と35,000人の加害者が10個の新しい村に暮らしている。そのほとんどの村で、被害者と加害者が共に暮らすという試みを実施されている。

Deoによれば、両者が再会し共に暮らすことは簡単なことではなく、元囚人である加害者にとっては、被害者に会うことで恐怖心や羞恥心に襲われてコミュニティに復帰することが新たにトラウマになることがあり、被害者にとっては、戻ってくる加害者に対し家族を殺した「人殺し」というイメージを改めて抱くことで、恐怖心とトラウマをもつことがあるという。そのため、PFRでは、コミュニティに復帰する元囚人、釈放された囚人を受け入れる被害者の人々、そして共に暮らし始めた両者に対し、刑務所と村の両方で継続的に説教をしている。Deoは、説教、そして神の力がなければ人々が同じコミュニティで暮らすことを実現するのは難しいだろうと話していた。それでも、この和解村の活動には困難な側面も多くあるという。例えば、加害者の中には自らの罪について告白したとしても、それが心からの告白ではないことが明らかである場合があり、なかなか心からの和解のプロセスが進まないことがある。また、虐殺時にレイプされ現在HIVに感染している被害者にとっては、尚も続く自らの苦しみによってなかなか加害者を受け入れること

JRYC

ができないという。PFRの活動は、このような人々の心や精神面のケアを慎重に考慮した上に成り立つ活動であり、プロセスが重要である。その意味で、非常に難しい仕事であるし、様々な組織との協力体制が欠かせないとDeoは話してくれた。



PFR代表のDeoさん

【当日の概要】

今回は、東部ブゲセラのマヤングセクターの和解村を訪問し、被害者と加害者の証言や彼らの暮らしについてインタビューした。この和解村には45棟の家、100人以上の人々が暮らしている。村に到着後、何人かの住民や子どもたちがJannetteさんという被害者のお宅に集まっており、そこで証言を聞いた。



◆証言1：Saveri（加害者、男性、48歳）

「虐殺とは、ツチを殺し、かれらの持っているものを全て奪うということを意味していました。RPFが国を取った時、私は逮捕されました。中には、国外へ逃げた人たちもいましたが、捕えられるまで戦う人たちもいました。RPFは、私たちを殺すのではなく、投獄しました。」



虐殺は、前政権の私的企みによって起こされました。かれらは、「ツチは敵だ」と言って私たちを洗脳しました。

私は、長い間刑務所で過ごしました。それはとてもみじめでした。でも、司教が刑務所にやってきて、私に向かってこんなふうに教えを説きはじめました。「自分たちがしたことを告白し、心からの許しを請いなさい」と。とても難しいと思いました。司教はこのようにも言いました。「もしあなたが心からの許しを請うのであれば、許されるはずです。」

私たちは、良い政府によって和解できるようになりました。

私たちは、虐殺で生き残った人々が住む村へと連れてこられました。それは、当時の私たちにとっては簡単なことではありませんでした。被害者も加害者も、再会することに対してとても不安でした。被害者は、私たち殺人者が戻ってくることを心配し、私たち加害者は、復讐が待ち受けているのではないかと不安がりました。

はじめの数日間は互いを嫌っていました。しかし、和解プログラムによって、私たちはゆっくりと隣り合って座ることが出来るようになってきました。私たち加害者が被害者に向かって罪を告白すると、かれらは私たちを許してくれました。私たちは共に抱き合い、感じていることを話し合いました。被害者は、自分たちが感じてきたことを私たちに話しました。

当時、多くの人々が家を持っていませんでした。そこで、私たちは家づくりを始め、それが私たち加害者と被害者を結ぶ橋を築くこととなりました。お互いの家づくりを手伝いながら、隣り合って暮らすようになりました。

私たちは今、平和に暮らしています。私は元囚人で、今私の隣に座っている女性は被害者で

す。でも、私たちは一緒にここに座っています。私たちは助け合っています。例えば、私の子どもたちは彼女（被害者）の家を訪問することだってできるのです。」

質問1：司教に出会う前は、刑務所でどのようなことを考えていましたか？

「負けた／やられた」という気持ちがありました。でも、司教に出会って、気持ちが変わりました。

質問2：この村のような和解村がもっと存在すべきだと思いますか？

はい。もし、和解村がもっと様々な地域につくられて、そこに住む村人が増えたら、和解がもっと進むと思います。今、多くのルワンダ人はまだルワンダの国外に住んでいます。

質問3：もし悪い政府がまた現れ以前のように虐殺を命令されたら、どうしますか？

殺し合いは、悪い政府によるものでした。私たちは、もしそんな政府に従ったら、何が起こるのかすでに経験してわかっています。だから、もう同じことを繰り返すことはありません。

質問4：キリスト教という宗教は、あなたの和解にとって必要不可欠なものでしょうか？

キリスト教徒であるということは、心の中にその信念をもっているということを意味すると思います。他の人を自分自身よりも愛することを意味します。キリスト教徒であることは、時に自分が何も間違っていないのだと感じさせてくれることもあります。

◆証言2： Jannette（被害者、女性、30歳）

「私はとてもみじめな生活を送っていました。虐殺の時、2カ月間国外に逃げました。そこには水もありませんでした。家に戻ってきたとき、私は何もかも失っていました。」



加害者が村に戻ってきたとき、私はとても心配でした。でも、私たちは和解というミッションについて聞かされてきました。かれら加害者は、罪を告白しました。今、私たちは見てわかるとおり、とても平和に暮らしています。今は何も問題はありません。もし私に何か問題が起こったら、私はよく Saveri (証言1の男性) に相談しています。今、私たちは友達です。例えば、子どもを預けあったりもしています。」

質問1 : どのようにして許すことができたのですか?

許すのはとても難しいことでした。しかし、祈れば、許すことが出来るようになります。神が、許しを与えてくれるのです。

質問2 : 虐殺について、神を責めませんでしたか?

いいえ。虐殺は、悪い政府の、悪い政策によるものでしたから。

質問3 : 虐殺の経験について、子どもに話すことはできますか?

時々、私の子どもたちは「おじいちゃんとおばあちゃんはどこ?」と尋ねてきます。そんな時、私は虐殺についてかれらに話します。おじいちゃんとおばあちゃんは、悪い政府によって殺されたのだと伝えています。

質問4 : キリスト教という宗教は、あなたの和解にとって必要不可欠なものでしょうか?

宗教はとても重要です。心で感じるができます。宗教によって、生活が変わりました。

◆証言3 : Louis (加害者、男性、55歳)



「和解は、私たちの心一つにしてくれました。私たちは今互いを兄弟のように想っています。私たちは、一緒に働きます。以前は、被害者に近づくのはとても困難でした。

でも、働いたり同じプログラムに参加したりすることで一緒になれて、被害者に近づくことができるようになりました。被害者と一緒に働くとき、私はとても自由になったような気がします。私は、被害者から一度も復讐などを受けたことがありません。私たちは、ゴスペルを一緒に読んだり歌ったりします。何か一緒にやることがあると、和解しやすいと感じています。」

【感想】

今回私自身が和解村を訪問したかった一番の理由は、「虐殺」という信じがたい出来事を少しでも自分にも起こり得たかもしれない行為として受け入れるために、どうしても当時の人々の心の内を人々の声から知りたいとの思いがあったためだった。実際に訪問してみて、彼らの口から紡がれる一つ一つの言葉に注意深く耳を傾けるなかで、メンバーの多くは複雑な気持ちが芽生えたようだった。私たちは、自分たちには想像もつかない「虐殺」という過去を背負ったかれらに対し、一体どのような質問が受け入れられるのかということに敏感になろうとするあまり、始めは質問が出来なかった。ルワンダ到着翌日に訪問した場所が和解村であったということもあり、いきなり村を訪問して証言を聴くということに私たちメンバーは緊張や困惑を隠せなかったように思う。その一方で、証言者であったジャネットさんやルイスさんは、このような訪問客に慣れていたためか、なんのためらいもなく自らの虐殺体験を語り始めたことが印象的だった。彼らの表情や話し

方から、15年で乗り越えられたこと、そしてまだ続いている葛藤などを少しずつ感じ取ることが出来たように思う。



和解村を訪問して印象的だったことは、3～5歳くらいの元気な子どもたちがたくさんいたことである。証言の最中も、子どもたちは親に叱られながら騒いでいて、にこにこ笑いながら私たちの様子を伺っていた。この子どもたちは皆、証言をしてくれた加害者や被害者の子どもだった。今では、加害者と被害者が結婚をして家庭を持つというケースも稀ではないという話を聞いたときは、私たちメンバーの多くが驚いていた。15年経って新しい家族に囲まれながら賑やかに暮らすコミュニティを見ることができて、人々の回復力や、未来への希望を感じた。

しかし、数時間の短い訪問の中では、思うようにかれらと打ち解けることができず、和解村の全体像を見ることもできなかったことが反省点の一つとして挙げられると思う。かれらの話を聴くだけではなく、こちらの日本での暮らしや私たちの思いも伝えてこそ、対話が成り立つのだと思う。その意味で、メンバーとの反省会の中で、「この村に、住民と一緒に数週間暮らすことができれば、もっと違ったことが発見できるかもしれないね」という話も出てきた。メンバーの中には、「ただ行って話を聞かせてくださいと言い、それが終われば帰るという状況にとっても抵抗があった」と言う人もいた。その通りであると思う。和解村は、現在私たちのような多くの訪問客に開かれているようだが、訪問時にはより双方向性のある交流を考えていくことが大切なのではないかと思った。これ

JRYC

は、来年以降の渡航時の課題なのかもしれない。それでも、今回は日本側のメンバーの一人が持ってきたギターが大活躍した。証言の後、メンバーの一人がギターを弾き始めるとたちまち子どもたちが嬉しそうに手を叩き寄ってきたのだ。更に、先ほどまで証言をする中で暗い表情をしていた大人たちが一気に明るくなって、私たちの手をとってルワンダの伝統ダンスを踊り始めたことがとても印象的だった。



最後に、この和解村の取り組みに関して感じたことを記しておきたい。ルワンダでは、経済発展による国の繁栄と経済的安定を目指すことが、虐殺を経験した人々の傷を癒す一つの手段となっているという話をよく耳にする。しかし、15年前に家族を失い、或いは隣人を殺してしまった人々が、本当に今ハード面の開発で和解を実現できるのだろうかと考えると、それはやはり疑問である。ルワンダに入る国際機関や国際NGOの支援内容のほとんどが、ハード面におけるものであり、なかなかソフト面に手が回っていないという現状がある。人々の心の傷の回復という具体的に進歩や成果が目に見えないものに対する支援には力が入らないということも現実であると思う。今回PFRのデオさんにお話を聞いて、人々が心からの許しや和解を受け入れることがいかに難しいことなのか、そのためにいかに多くの時間や人々の協力が必要なのかといったことを伺い知ることができ、現地NGOや草の根レベルでの和解の取り組みの必要性を実感した。

和解村という、たとえつくられた環境であっても、それが実行されているという現実に私た

ちはただただ驚くばかりだった。これは、PFR創設者のデオさんをはじめとした関係者の努力があって生まれたものであるという前提を忘れてはならないし、人々の意識やめざしたい方向があれば15年間でここまでできるのだということの証明であると思う。



ルワンダの未来を担う子どもたちと

メモリアルセンター訪問報告

担当：朴淳夏

【訪問日時・場所】

2009年9月7日~9月11日

【訪問目的】

ここルワンダでの虐殺から15年。文献から見受けられるものはかなり悲惨なものであった。しかし100日間で100万人が殺されたというこの虐殺の傷後は、ルワンダの町並みからも、ルワンダの人々の笑顔からも容易に見当たらない。15年前の虐殺の記憶を克服しようとしている彼ら。あの残酷な記憶を後世に伝えるために建てられた虐殺記念館をいくつか訪問した。写真を交えて紹介する。

【訪問概要】

1. GISOJI (キガリ)
2. GIKONGORO. (ブタレ)
3. NYAMATA (ブゲセラ)

【メモリアルセンター概要】

このメモリアルセンター、虐殺記念館はルワンダ国内に多数存在する。これは国内至る所で虐殺がなされたということの意味する。ほとんどのメモリアルセンターが、現場現状保存という形のため、こんなどかな所で人が集まるのか？隠れるには最適の草むらではないか？と思ってしまう位ひっそりとした農村に虐殺記念館がある。

1. GISOJI

キガリ中心よりバイクタクシーで10分の場所に位置するこの記念館は首都・キガリ議会よりにて建立された。犠牲者の追悼、教育、資料提供、生存者への資金に充てるのを目的し、とてもよく整備されており、歴史の開設も含め虐殺までの大まかな流れ国内外の情勢をともに把握できるように展示、紹介されている。敷地内のすべてが虐殺の犠牲者、生存者、そしてこれからの未来を意味し建てられている。

室内展示はルワンダの虐殺、外国の虐殺、ルワンダの虐殺の中での、子供の犠牲者の具体的な紹介(写真、子供の性格、死亡時の情報など)。建物は2階建て、1階は94年の虐殺までの経緯や、その犠牲者などについての説明、写真、遺品、遺骨などが展示されている。2階はドイツやベトナムなど、ルワンダ以外での虐殺を紹介や子供の犠牲者の説明や、写真などが紹介されている。

ベトナムの戦争記念館では外国の事件は紹

介していなかったが、なぜルワンダの記念館では外国の同じような事件を紹介するのか。同じ歴史をたどったという連帯感、今後の発展への期待などを表しているのか、一方では、2度と同じことは繰り返すまいという決意をも感じた。もし他国の犠牲や被害を肌で感じていたらこの過去の悲しい歴史は違っていたらどうか。歴史を学び、そして伝えることは過去顧みることのみではなく、未来を見つめる行為だと思った。

2. GIKONGORO

National University of Rwanda がある Butare より、車で少しの所に位置しているこの記念館は、虐殺現場の保存現場とともに、写真のようにしっかりとした記念館が建っている。中に入ると当時学校だった建物が数十棟並んでおり、中に被害者の遺体を集め保存している。写真のように（写真1参照）、腐敗防止の為に白い薬品で処理されているため、全ての遺体が真っ白だが、よく見ると2つに刻まれていたり、体の部位が欠けていたり、とその凄まじい虐殺の様子が伝わってきて、薬品のおかげで遺体の状態からその場から逃げ出したいくなってしまう。この虐殺記念館には18万体の遺体が収容されている。

その他、虐殺時に生き埋めするために掘られた穴をそのまま保存してあったり（写真2参照）、当時の加害者側であったフランス軍の行動を批判的意味であらわした標識がいくつかあった。

これまで朝鮮半島、中国、ベトナムなどの戦争博物館や、虐殺現場を見てきたため「このような」現場や写真などには問題なく対応できると思っていたが、ここは違った。その場から逃げ出したいくなるのは初めてだった。幼稚な表現で失礼になるかもしれないが、これが率直な感想であった。



(写真1)



(写真2)



3. NYAMATA

上記2つの記念館が立派な建物であるが、ルワンダにあるほとんどの記念館は、教会などの「現場」である。この教会の天井や壁には無数の穴があいている。建物の老朽化のためかと思いきや、手りゅう弾や鉄砲などの弾の後であった。それに教会中を血が飛び散った跡が今も残っている。



教会の中に入ると数百人、いや数千人以上の犠牲者の衣服や、生活道具（スプーン、くし、くつ、メモ、鏡、ID 手帳など）がそのまま残っている。ここには犠牲者の肉体こそ見えないが、肉体以外は全部その場に残っているようだった。

【感想】

このメモリアルセンターの訪問が今回のルワンダ渡航目的の一つでもあった。これを見に来たようなものである。しかし骸骨をこの目で見るのは初めての経験であり驚いた。これが率直な感想である。骸骨と虐殺現場、ミイラのような死体がある部屋では、正視するのが、立っているのが「やっと」であった。

個人的な視点では、今までの私が日本と朝鮮半島では見たことのない現場を見て、感じたこと、なぜこんなにつらい思い体験をしたのに、和解しようとしているのか、彼らはこの過去をどのように越えようとしているのか。ただただ頭が混乱している。

また、今後のとても貴重になるだろうこのメモリアルセンターの現場や遺体、遺品、遺骨の保存状態が気になった。本ではわからない、虐殺のにおい、色、ほこり、温度、空気などを直に感じ、ルワンダの人々の「今の笑顔」とのギャップを感じるとともに、彼らの克服、前進の意思を感じた。そしてこの強い勢いを感じ、同じ歴史を持つ私は今後どのように生きていくべきか、より前進しなければ、この歴史を必ず後世に伝えなければと叱咤されるような思いをも感じた。

ルワンダを知ろうと旅立ったが、自分を見つめる旅になった。



Emmanuel Havugimana 氏インタビュー

担当：Kristina Gan

【訪問日時・場所】

9月7日 2009年（月）

キガリ市内のレストラン

【訪問目的・準備】

Emmanuel Havugimana 氏は数年前まで少年兵の社会復帰を支えている施設で働いていた。現在は人間開発戦略計画のコーディネーターをやっており、10年間の人間開発計画を設定。そして、子どもの権利・保護のカウンセラーでもある。Emmanuel 氏から、子どもに関わる問題に取り組むカウンセラーとしてルワンダの子どもを取り巻く現状を聞くためインタビューを申し込んだ。同氏は現地の子どもたちと密着しながら活動しており、身近にその子どもたちがいる環境を見ている。

準備は、日本で Emmanuel 氏にインタビューのお願いをメールでやりとりし、具体的な日時はルワンダで電話にて交渉した。

【当日の概要】

Emmanuel 氏が見たルワンダの子どもたちを取り巻く現状：

ルワンダでは家庭内暴力や子どもの虐待は大きな問題のひとつである。しかし、子どもは自分の権利を知らない。子どもの人権は守るべきということに対しても社会の認識は低い。子

子どもと親のキャパシティを拡大することによって子どもの保護を向上させたい。

◆問題とその背景

大きく 5 つある。第一に、親が週 45 時間働けなければならないため、子どもと触れ合う時間があまりない。さらに、十分な教育を受けられなかった読み書きできない親もいるため、より子どもの人権についての意識を低くしている。

第二に、児童労働も大きな問題となっている。14 歳以下の子どもたちがお金を稼ぐため、街で働けなければならない。場合によっては、違法な仕事をしている子もいる。大虐殺で孤児となった子どもは家政婦やベビーシッターとして働き、その子どもたちのなかに雇い主から虐待を受けたり、強姦されたりすることもある。だが、子どもたちを守る法律は設置されていないのが現状。

第三に、自分の血の繋がった子どもより、養子の方が多家庭もある。しかし、その子どもが搾取されてしまう事件が多発していた。今では、児童搾取を取り締まる法律が設置され、改善されつつある。

第四に、ストリートチルドレンの増加も深刻化している。民間の NGO は街に出て、ストリートチルドレンを施設に連れていくが、何人かの子どもは数時間後にまた路上に戻ってしまう。ストリートチルドレンのなかにお金持ちのものもいる。話してみると親による愛情の欠如や放置、または家族の中がよくない原因で家に戻りたくない打ち明けてくれた。場合には、他の男や女を家に連れてくる親が嫌で家出してしまう子もいる。

第五に、麻薬に手を染めてしまう子どもたちの多くは貧困層である。空腹を忘れるため食べ物の代わりにコカインなどを吸う。また、親、同年代の友だちや仲間からのプレッシャーもある。周りにいる人たちが麻薬を吸っていれば

子どもが真似してしまう。しかし、麻薬中毒になってしまった人を治療するための公共リハビリテーションセンターがない。民間が運営している施設はあるが、足りない。

Emmanuel 氏は、彼が見た上記の現状を私たちに話した。さらに、子どもには権利と共に背負う責任がある。それらは、国を愛すること・家族や政府が提供している教育をしっかり終えること・親、親類などすべての人を尊重すること。ルワンダでは権利は与えられるものだけではなく義務も伴うものである。

【感想】

首都キガリを歩いてもストリートチルドレンはそんなに見かけなかった。むしろフィリピンやタイなどアジアの発展途上国の方がストリートチルドレンの数が圧倒的に多いのではないかという印象を受けた。本当に数が少ないかもしれないが、それは私たちが見たものは限られていて、残念ながら Emmanuel さんが語った現実を見えなかつただけかもしれない。貧困は多くの問題を引き起こしている。未来の社会の担い手である子どもたちからも可能性を奪っている。そのような環境で教育の重大だと思った。教育を受けられない親に子どもの権利、そして子ども自身も自分の権利が分からない。侵害されているにもかかわらず気づかない。

親の愛情の欠如がストリートチルドレンの増加の原因になっているというは意外だった。このような要因はルワンダではなく、世界どこでも共通する問題ではないだろうか。仕事が長く子どもとあまり一緒にいられる時間が少なくなっていると言っていたが、話していたルワンダ人の多くは「ルワンダ人はもっと働けなければならない」と。発展するために必要なことなのだが、この問題をより深刻させてしまうのではと懸念している。一生懸命仕事すること、または女性が社会に進出できるようになる環

境はすごくよいと思う。だが、社会の基礎的な基盤は家族であり、バランスを大切にしなければならない。

Emmanuel 氏との対談によってルワンダのなかなか見えない部分が見えた。大虐殺とは直接繋がっていないルワンダの子どもに関する問題の要素は「大虐殺」を軸に研究している私たちには気づきにくいものだ。これが大虐殺後のルワンダが抱えている課題。この問題なら大虐殺を経験していない国でもあること。

JICA・農村開発プロジェクト 訪問報告

担当：大山 剛弘

【訪問日時・場所】

9月18日（金）8:00～13:30

JICA ルワンダ在外事務所

東部県ブゲセラ郡農村開発プロジェクト対象地

【訪問目的・準備】

-目的

- ① 国家の最基幹産業である農業の分野で日本が行う支援の現状を学び、また自国とは全く異なる環境下での支援に触れることで、新しい視点から国際協力について考える素養を養うこと。
- ② 日本の国際協力を現地の人々がどのように受け止め、またどのように彼らの未来に繋げていこうとしているのか、現場で活きた声から体感すること。

またこのサイト訪問に向けては、アフリカの農業全般について勉強会や合宿でトピックとして取り上げる、あるいは専門家の方に講演を行っていただくなどして基礎知識の充実を図った。

【プロジェクト概要】

名称：東部県ブゲセラ郡持続的農業農村開発計画調査

実施期間：2006年4月～2009年1月

目的：住民主体の農業・農村開発を通じた貧困削減

取り組みの例：稲作栽培の指導・湿地帯や丘陵地帯の開拓・給水施設の建設・改良牛の導入

【当日の概要】

◆スケジュール

8:00-8:30 ブリーフィング

於：JICA ルワンダ在外事務所

8:30-9:30 JICA 事業概要説明・質疑応答

於：同上

9:40-11:10 東部県ブゲセラ郡サイトに移動

11:15-12:00 現地 cooperative※代表による

サイトの現状説明・インタビュー

於：ブゲセラ郡 cooperative

事務所

12:10-13:30 農業サイトの視察・現地村民へ

のインタビュー

於：ブゲセラ郡 JICA 調査対象サイト

※cooperative…農業を進める上での集団の単位。日本でいう農協のようなもの。現在ルワンダには100程度ある。上位機関としてはAPEX(国内に8)、下位機関としてはAssociationという組織がある。

◆得られた情報・見解

対象エリアの背景

- ・ この地区をはじめ東部は、古くから湖・川と豊富な水資源を持ちながら農地の多くが開発の丘陵地帯や湿地帯であり、開発が遅れ慢性的な食糧不足に悩まされている。
- ・ ブゲセラの湿地帯は約6,100haに及ぶが、そのうち開発されたものは3,000haに満

たない。

- ・ (これはルワンダの国土全体に対していえるが)「千の丘の国」と言われるように、ルワンダの国土には見渡すかぎり丘陵地帯が広がるのに加え、農民は各家庭など小さな単位で自給自足の生活を営んできた。一農家あたりの農地面積:0.76ha。⇒機械化が難しい
- ・ 上の様な要因に加え、今までの対策の欠如も相まって2001年の調査では国連の定める食糧危機レベルを下回る人の割合が52.8%に達した(ルワンダ全体での平均は41.6%)。

プロジェクト

- ・ この地区ではJICAは稲作栽培の指導を行っている。
- ・ 機械化は進んでおらず、支援としては耕し方や苗の植え方といった知識や農具の供給、適切な品種の選択といった基礎的なものが主。
- ・ プロジェクト実施後、生産量は大幅に増加。湿地の開発などを凌ぎルワンダ内での他種の農業プロジェクトを凌ぎ最も成功した分野の一つとなっている。
(現段階での費用対効果は $\text{benefit/cost} = 3,911,500 / 2,873,095$ ルワンダフラン ≈ 1.4 。ある農地では収穫量が4tから7tへと増加)。
- ・ 今回のような小規模で集約的な農作業では関係者皆の協力が不可欠。それが共同体であるという意識を育み、虐殺で崩壊した人間関係の修復=和解につながっている。



- ・ 基礎的な支援によって大きな効果が上がるのは、土地が元来農業に適しているといえる。ルワンダの農業に大きなキャパシティが残されていることを意味する。
- ・ 一層の機械化・土壌の改良が進めば、支援

に頼らずとも独立し「住民主体」の農業を獲得できる日もそう遠くはないだろう。

抱える問題

- ・ 政府の定める基準を満たす器具(脱穀機など)が購入できず出荷できない作物がある。⇒訪問した cooperative では、8つの cooperative で共同の脱穀器をローンで購入する計画がある。
- ・ 資金管理が確立していない。透明性が低い。ex.)数か月前にも、前 cooperative 代表による400万ルワンダフランの盗用があった
⇒今後の経済成長を考えれば急務である。
- ・ 労働者内での意思疎通の欠落。特に上位の組織で決められていることを一般の人々が知らない、というケースが多い。
- ・ ルワンダの税収は600億円と少なく(ウガンダ:2000億円、ケニア:6000億)、支援の不足のみでなく、契約ベースでの雇用をするなど収入が安定しない。

【感想】

もっとも印象的であったのは、様々な問題を抱えつつも、村民たちが支援に頼った生活に甘んじることなく自立にむかい努力している姿だった。また、訪問先の cooperative 代表の方も「あと2年で自立できるはずだ」と、いう発言があったこともとても印象的だった。

特に農業のような継続性が求められる分野では、一時的な物的支援以上に、コストはかかっても草の根から人々の自主性に訴えかける取り組みが重要であると思うし、そして今回の視察では支援プロジェクト中での定期的なセミナーの開催やノウハウの伝授などを通して、先の発言に見られるような自主の意識が人々に根付いていくことを実感することができた。

目先の成果だけを求めるのではなく中・長期的な視点で事業に取り組むこと、その過程で受

益者たちとの活きたコミュニケーションをとることの大切さを学ぶことができたと感じる。

また個人的に驚いたのは現地サイトでトマトやナス、キャベツといった野菜も栽培されていることだった。首都中心部の高級スーパーに行けばかろうじて見つけられたが、それらがルワンダの一般的な食卓に並ぶことはあまり想像できなかった。トウモロコシをはじめそれら野菜は、いま殆どが外貨獲得のために輸出されているということだ。

これを問題として取り上げるには、ルワンダはまだ早い段階にあるのだろうが、いったん安定した主食の供給を達成すれば、未開拓な野菜の市場にもビジネスが生まれてくるだろう。その意味でここにも可能性が感じられる。

ルワンダという日本とは環境や歴史的背景の全く異なる国においても、日本の人材やノウハウが有効に機能し、国の基幹に働きかけることが出来るのだと身をもって知ることができた。現在はまだ農業全般について機械化が進んでいる段階ではないが、そのような段階に進めば技術大国・日本の貢献できる分野は更に広がっていくものと思う。

このような視点から、今後の国際協力の可能性に大きな希望を感じられる視察であったと感じている。



このプロジェクトを担当していた
JICA 職員の鈴木さん

WFP 学校給食プログラム 訪問報告

担当：清水大志

【訪問日時・場所】

9月10日（木）

WFP ルワンダ事務所

Ruhuha primary school

Minedec primary school

【訪問目的・準備】

ルワンダの学生と会議をする上で、お互いの社会が抱える問題を理解することは不可欠である。就学率、食糧問題というルワンダのみならずアフリカの抱える大きな問題とはどれほどのものか、そして現在、国、国際機関はいかにそれらと向き合っているかということを通じて、より深い議論を交わせるのでは、と考えた。

昨年度も学校給食プログラムを見学させていただいており、今回も見学申請から当日までは、比較的スムーズにいったと思う。

【WFP 学校給食プログラム概要】

WFP 学校給食プログラムは 45 年以上にわたり、途上国の教育機関に対して行われてきたプログラムである。学校における給食の支給を通じた、児童の栄養改善と就学率の向上を目的としている。

ルワンダにおいては、1994 年のジェノサイド後から現在まで行われおり現在、200 校以上の学校が学校給食プログラムの支援を受けている。また、2012 年までにすべての活動をルワンダ政府に委譲を WFP は構想している。



【補足：南部ブゲセラの状況】

我々が見学を行った、南部ブゲセラ地区はルワンダにおいても特に食糧不足に悩まされている地域である。その主な原因としては、数年置きに訪れるという干ばつであり、児童の教育・栄養状況だけでなく、地域全体の不安定さが認められる。

【当日の概要】

朝 8 時過ぎに、WFP Rwanda office に到着しその後、Ahmed Zakaria 氏から現在のルワンダにおける WFP の活動についての説明を受ける。その後、WFP の公用車にて南部ブゲセラ地区にある学校三校の見学へと向かった。

1 校目 (Ruhuha primary school) は 300 人の孤児を含む、1000 人以上の生徒が通っている。ここでは、食糧貯蔵庫、給食の調理場を見学した後、小学校、中学校のクラスをそれぞれ一つずつ見学させてもらった。そこでは、子どもたちとの質疑応答の機会も設けられた(内容は後述)。この学校では、授業を午前・午後の部と 2 つに分けて行っている。ただ、給食に関しては、午前組、午後組ともに同じ時間となっていた。

2 校目 (Minedec primary school : 生徒数 1462 名) では、ちょうど給食の時間ということもあり、教室にて配膳をしている様子、食事の様子を見学した。その後、校長から校内で飼育している家畜についての説明を受けた。校舎の裏に飼育小屋があり、乳牛や豚を数頭飼育していた。飼っている牛は 1 頭あたり 1 学年分の牛乳を生産することができるということ。

3 校目 (生徒数 1206 名) は教室にて生徒との質疑応答の後、子どもたちに伝統的な踊りを披露してもらった。この学校は他の学校とは違い、中学校を併設していない。また、これも他の 2 校と異なるのだが、制服の着用率が著しく低かった (WFP 職員の話では、以前に支給をしたが、最近では更新出来ずにいるとのこと)。また、教師の給料の低さというものも問題となっていた。

3 校を見学した後、WFP の公用車にて我々が宿泊していたキガリの宿まで送ってもらった。(午後 4 時半頃)

【生徒、教師との質疑応答内容 (抜粋)】

- WFP に対する要望は？→提供する食事が足りない
- 将来の夢は？→教師、医者等
- 学校に今何が必要か？→コンピュータ

【感想】

WFP の学校給食プログラムは以前から知っていた。ただ、このプログラムが与えるインパクトというものがいかなるものか、ということやはり自らの目で見ることによって知ることが出来るということに気付かされた。まずは、やはり給食というものの価値である。給食が待ち切れず調理場まで足を運ぶ子どもたちの姿は、給食の重みというものを端的に表していた。また、地域雇用までも創出しているというこのプログラムの地域に対するインパクトの大きさというものも知った。ただ、子どもたちや教師の方々とのやり取りの中で、食事量、教育設備など多くの不満や要求を耳にした。これらには、WFP の事業とは直接関係のないものが多く、WFP と他の国際機関、そしてルワンダ政府の連携や協力を求める声とも感じられた。

U N H C R 訪 問 報 告

担当：Kristina Gan

【訪問日時・場所】

①9月10日（木）

UNHCR キガリ事務所

②9月17日（木）

Gihembe Refugee Camp (Byumba 地区)

【訪問目的・準備】

ルワンダは内陸国であり隣国から難民が流れてくるのは避けられないことである。ルワンダ自身もそれに対し過去の経験からも受け入れの責任を自覚している。現在、隣国であるコンゴ民主共和国では起きている紛争により多量の難民が発生した。UNHCR への訪問目的は、ルワンダの統治能力と難民の受け入れ過程・難民の保護と人権状況・現地の UNHCR 職員は政府と連帯しながらこの問題にどう対応しているのかブリーフィングを通して難民

の状況を理解すること。そして、実際難民キャンプへ行くことにより自分の目でその現状を視察する。難民と難民キャンプで働いているスタッフに生活についてなど現状を直接聞くことにより彼らが置かれている環境の理解を促進することだった。

この問題を学ぶことは、ルワンダの安全保障と政治的安定を理解するのに重要である。また、日本社会にルワンダの難民への取り組みを伝達することで、人権に対する国家の義務の意識向上につなげ、両国における「平和構築」に関連できると考えている。

準備に関しては、日本でルワンダの難民事務所宛に日本ルワンダ学生会議の団体説明・訪問目的・希望を記載した訪問申請書を送った。具体的なブリーフィングの時間は電話で現地調整。難民キャンプも視察し日に行くこととなった。UNHCR が難民キャンプという意思が伝わらなかったのか、別のプを管理している政府機関に許可を取っていただいて、後日その許可

① UNHCR キガリ事務所訪問

【UNHCR の活動概要】

UNHCR は他の国連機関と違いルワンダの開発プログラムには含まれていない。国連機関、ルワンダ政府と外部の団体（民間・非政府機構）と協力しながら独立性がある。必要ではなくなるまで活動を続ける。難民の保護は UNHCR のみがやっているが、衛生、食料、家、教育、設備、医療などは他の国連機関（eg.WFP）と民間団体（GLZ、AHA、ARC、JRS、MINLOC、FAWE）と協力しながら提供している。

難民のなかには政治的加害者の人も混ざっているが、彼らと一般市民を区別する責任はルワンダ政府の警察庁が担当している。指紋採取と個人写真撮影の導入でセキュリティが厳しくなった。キャンプ内で犯罪者を発見すればた

だちに政府関係者に知らせている。

【当日の概要】

◆ルワンダの難民状況の概要

現在、ルワンダに滞在している難民は外国から来た人々であり、国内難民はいない。Kiziba、Gihembe、Nyabiheke、Kigali の 5 カ所で難民キャンプがある。難民の人口は約 54,038 人（内約 53,000 はコンゴ人）。ルワンダにいる難民のほとんどは Primafacia(プリマファァシエ)難民という。これはコンゴの情勢のように、出身国が紛争中の場合自動的に難民として認められる。一方でルワンダ政府はブルンジ難民の Primafacia を解除し、個人（一般）難民に変更するか検討している。個人難民の場合は申請を拒絶される可能性があるため強制帰還されてしまう人が出てくる。ブルンジはもう停戦しているが、実質政治的・経済的に不安定であり、帰国すれば身の危険にさらされる人もいる。UNHCR はルワンダ政府に Primafacia の延長を要請している。

キャンプ内では複数の委員会を設立し、代表となる難民は選挙によって決めている。定期的に委員会同士、そして UNHCR 代表団との話し合いが行われている。このように UNHCR は難民とコミュニケーションを取っており、キャンプ内の秩序と治安を維持するだけでなく、難民は本当に何が必要なのか、変える必要がある規則があるのかなども伝えてもらっている。課題は女性の委員会への参加。女性のための委員会はあるが、文化的な要素で男性と比べ女性の参加は消極的である。女性の積極的参加を促す手助けもしている。

社会復帰には職業訓練を行っている。すべての希望者が参加できないが、ルワンダの伝統的ななかごである agaseke の作り方というような収入源となるスキル、または大工というような帰還後に活用できる技術を身に付ける職業訓練を設置している。女性にはハンディクラフ

トの作り方を教えている。他には散髪、基礎的な IT 教育なども教えている。帰還後取得したスキルを活かす人が多い。



◆難民キャンプが抱えている問題

土地不足

- 広く、水源があるところを探しているが最適な場所が見つからない。人口が多く排泄物に臨時の便所はすぐ埋まってしまうため、臨時の便所を十分に建設できる地域が必要。便所の建設にはとても費用がかかる。衛生を保ち、伝染病を防ぐためには欠かせないものである。
- 一人当たり 45 ヘクタールの土地が必要にもかかわらず、現実には 1 人 14 ヘクタールが平均となっている。
- 学校を建設する場所も足りない。

女性と子どもに対する性犯罪とジェンダーハラスメント

難民の大半は女性と子ども。難民キャンプ内には容疑者を保留する部屋もあり、被害者のためのメンタルケアも提供している。警察もいるが、人口と匹敵し犯罪を防止するほどの数とはいえない。

教育

中学校以上の支援が非常に困難。10,000 以上の子どもがいるが、海外奨学金のオファーは 124 件しかない。

職業

難民がキャンプ内で働くと給料は受給できない決まりとなっており、小額の報酬をもらえるシステムとなっている。ルワンダ自身も仕事が不足しているため、キャンプ外での就職は難しい。

資金不足

国連からもらっているのは実際必要な予算の5%のみ。他の民間団体、または国際非政府機構からも資金援助を受け取っているが、UNHCRが自由に使えるのは一部であり、あとは特定の目的のために活用している。HIV/AIDSに対する支援が一番多い。昨年と比べ外部からの支援金は15%減少した。

難民依存症候群 (Dependency Syndrome)

難民が自立心を失ってしまう現象。移住や再移住(下記参照)するときにもずっと支援をもらえと思え込む難民がいる。

◆帰還・移住のためのプログラム

ここ数年間ブルンジの帰還を活発に進めている。コンゴ難民でも比較的紛争が縮まったところでは帰還を許可している。難民から帰還の希望があっても、まだ紛争が続いている地域には戻すことはできない。

自発帰還 (Voluntary Returning)

難民自ら自国への帰還を希望すること。

移住 (Local Integration)

受け入れ国への移住を勧めている。ルワンダではスワヒリ語やフランス語といった言語も普及しているため融合は他の国と比べ難関ではない。しかし、職業不足という経済的な問題が難民のルワンダ社会への融合を妨げている。

再定住 (Resettlement)

第三国への移住。第三国への移住を認めるためには下記の8条件が必須となる。受入国でも命が危険にさらされている・受け入れ国が女性に対して非常な差別を持っており、安定かつ安全な生活ができないとみなされるというジェンダーの問題・受け入れ国に十分な雇用の機会がない・緊急な手術が発生した場合など。

再定住の受け入れ先国には、アメリカ、デンマーク、カナダ、ブラジル、チリ、オーストラリア、スウェーデン、フィンランドなど。各国はそれぞれの条件を設けている。ほとんどの受け入れ国は難民の支援政策を実施している。国家が再定住の受け入れ国としてなりたい場合、なぜ受け入れ国になりたいのかを説明し、受け入れるキャパシティがあるということと社会融合政策や支援内容がしっかりしているということも証明しなければならない。そして、文化紹介を難民に難民キャンプでする必要がある。

例えば、フィンランドは難民に正式なビザを与え、社会に融合できるように語学と職業訓練を提供している。ただし、3年以内には仕事を見つけなければならない。アメリカの場合は、定住して3年目にはグリーンカード、5年目にはアメリカ国籍を与えている。

定住5年目となる難民には新しい難民への支援をする責任がある。

②難民キャンプ現場視察

【Gihembe Refugee Camp 概要】

人口は19,203人で、難民キャンプのなかでは一番古い。ここでは、病院・学校と職業訓練場を訪問した。難民とスタッフをインタビューすることで、彼らの現状を学んだ。

◆ヘルスセンター

ルワンダの他の病院と比較して、このキャンプ内の病院には設備が整っている。しかし、医者は1人。看護師はルワンダ人とコンゴ人合わ

せて 54 人。ルワンダが設定している手術可能な病院の基準を満たしていないため、キャンプ内での手術は不可能。ルワンダの国立病院へ病人を運ぶ手段がなく困っている。よく相談される病はリウマチ。難民キャンプの位置は高めで温暖気候に住んでいた住民には寒い。

HIV/AIDS に対する意識を高めるようセミナーを実施している。定期検査も定着させているが、住民は消極的である。毎月約 300 人の人の検査を行っている。陽性になることを恐れ、または自分が HIV・AIDS 感染者であることを認めたくない人は検査に来ない。

難民キャンプのたった 1 人の医師である Pascal にインタビューした。彼はルワンダ人で、この難民キャンプで働きはじめてもう 40 年以上になるという。



Pascal 医師

質問：なぜ難民キャンプで働こうと思ったのですか？

「私も昔は（コンゴで）難民生活を送っていた。そのときはいつか難民のために尽くしたいと思った。私なら難民の生活も分かる。難民になることの苦しさや現状を知っている。誰よりも彼らを理解し、支えられると思った。」

また、ヘルスセンターでスタッフとして働く Jastine という青年にもインタビューした。



質問：なぜここで働いているのですか？

「僕はこのキャンプの難民で、高 3 までは学校に通ったんだ。本当は大学に行きたいけれど、チャンスがなくてまだ行けていないからここで働いている。でも、ボランティアのようなもので、このキャンプで働いても給料がでないんだ。」（難民には給料がでないそう。1 カ月に 1000Rf だけもらえるが、これは給料としてではない。）

◆ファミリープランニング

人口が増え続けられないようファミリープランニングを浸透させようとしているが、あまり効果がない。新しく生まれた子には食料は 1 人分与えられるため、子どもが多いと帰還後に食べさせるものがなく、学校にも行けないという現実の自覚が薄い。



◆学校

生徒数は 720 人で、先生は 28 人（そのうち女性 2 人）。生徒は勉強に熱心だが、今年から予算や資金の関係で高校への進学が閉ざされてしまった。それが原因で全体的に生徒の今年の成績が落ちており、やる気も失いつつある。生徒たちは、キャンプ内に有給の仕事もないため、卒業後の進路がない状態である。訪問当日、中学校のある教室の生徒達に将来の夢をインタビューしたところ、生徒たちは次のように答えていた。

質問：将来の夢は何？

生徒 A（男子）：「そんな質問、僕には答えられない。夢なんてない。僕はもう高校に進学できないんだ。」

質問：中学を卒業したら何をする？

生徒 A：「何もすることはない。両親の手伝いをする。」

生徒 B（男子）：「僕はいつかコンゴの大統領になりたい。」

生徒 C（男子）：「僕は権力をもった人になりたい。」

生徒 A：「僕も、今夢をもう一度考えてみたよ。この国では、まだ英語を話せる人達が少ないから、英語をもっと普及させたい。」

生徒 D（女子）：「早く国に帰りたい。」

◆職業訓練

大工・洋服仕立業・メカニックス・ジュース作り・工事・Agaseke 作りなど。各プログラムの参加者は 30 名まで。何人かはキャンプ内で雇われている。難民がキャンプで働く場合給料わずかなお小遣い意外受給しない決まりになっている。キャンプの外で働いている人もいる。ハンディクラフトによる商品はまだ難民キャンプ内でしか売られていないが、これからは外に売る予定。販売場所にいた A 君にインタビューした。

質問：将来、コンゴに帰りたいですか？

「はい。今は紛争が続いていますが、いつかはまたコンゴに戻りたいです。ここに生まれ育った人もいますが、私たちはコンゴの文化を持っています。私たちの母国はコンゴです。」

質問：難民キャンプでの生活はどうですか？

「大学に行きたくても行けないのがとても悲しいです。それで未来への希望を失っている子もたくさんいます。食べ物などは支給してもらっていますが、収入はほぼないので生活は苦しいです。」

【感想】

日本でも難民受け入れは大きな問題のひとつである。しかし、ルワンダのような立地にある国で、隣国から逃れてきた難民を受け入れなければならないということは日本と条件が違う。世界多数にある「難民」というものはどういふものなのか、*Prima facie* や再移住など新しい情報ばかりだった。ルワンダにある UNHCR だからこそ知れたと思う。必要な予算のわずか 5%でどういうふうに難民を支えるのか分からないが、『現実の壁』を教えられ、ずっと疑問だった『自立』がなぜできないのか少なくとも分かったような気がする。ブリーフィングでは「いろいろな問題に直面しているけど難民キャンプには経済活動があり、場合によっては外の町より活気がある」とルワンダの事務局長に言われた。まずまず難民キャンプとはどういうところなのだろうと見たくなった。

難民キャンプのイメージはテントだったが、Gihembe では一般的な赤土でできている家が並んでいた。あそこは難民キャンプというより普通の町に見えた。ただ、政府から訪問許可を取らなければならないことや現地での訪問許可証チェックを考えるとやはりそこは難民キ

キャンプだと思い出す。現地の人たちはやさしく対応してくれて、彼らの生活についても正直に教えてくれた。子どもたちは車を降りた瞬間から私たちに近づこうとしていた。移動のときは「ジャッキー(Jackie Chen)」と叫びながら、何百人もの子どもに囲まれ大変だった。これは決して日本では経験できない。恐ろしくも、面白かった。難民キャンプなら国際機関やNGOで働いているスタッフが訪れ、白い人はめじらしくないだろうと思ったが違うようだ。

私たちが見た難民キャンプには生活を営んでいる人たちがいる。確かに、高校に進学できない、仕事がない、収入がない、職業訓練も不足している、人口が増加しているため狭くなっている、いつコンゴに帰れるかも分からない、女性は難民キャンプという限られた社会のなかでも文化に縛られているなど切実な問題はたくさんある。しかし、そこに住んでいる彼らのたくましさも伝わった。私だったらこの難民キャンプに生活できるのかと考えたとき、できないだろうと思った。子どもたちには希望を失わないで欲しい。援助への依存症を解決することが自立に欠かせないことだと思う。具体的にどう解決するのかは一日訪問しただけでは分からない。そこで働いている人に感銘を受けた。特に病院に働いているお医者さん。UNHCRも完璧な組織ではないかもしれない。そこに活動しているNGO、またそこで働いているスタッフにそれぞれの利害があるかもしれないが、UNHCRの存在、そして難民のために活動を続けているNGOは必要だ。

UNHCR訪問は事務所と連絡がなかなかつながらずブリーフィング受けられるのか、そして本当にキャンプに行けるのか不安だった。根性と粘り強さが試される。難民キャンプで見たものは一生忘れない。

COLLEGE IMENA de RUNYINYA

訪問報告

担当：渡部 香、Kristina Gan、大久保美希

【訪問日時、場所】

9月14日(月)

COLLEGE IMENA de RUNYINYA

孤児の学校(ブタレ)

【訪問目的・準備】

1994年の大虐殺の後、約30万以上の子どもが孤児となった。この子どもたちのなかには身寄りがいない子もいれば、親戚がいるとしても養ってもらえる余裕がないなど事情は様々である。教育は、ルワンダの経済発展のためだけではなく、子どもたち一人ひとりの将来のためにも重要である。しかし、政府が作った生存者基金や教育支援だけでは援助を必要としている人全員に行き届いているわけではない。更には、虐殺生存者の若者のケアとサポートは平和構築に欠かせないものである。私たちは、虐殺後の教育的な取り組みの一つとして、孤児のために設立された学校がどのように運営され、精神面でのサポートがどのように行われているかなどの現状を知るためCollege IMENAを訪問した。

College IMENAについては、今夏私たちより一ヶ月早くルワンダに渡航した大学院生が現地で知り合ったという校長先生の連絡先を教えてもらったことがきっかけで、現地で連絡・調整した。当日は、校長先生のAthanaseが私たちを大学まで迎えに来てくれた。

【COLLEGE IMENA 概要】

College IMENAは、ブタレにある国立大学から車を走らせて30~40分ほどのところに位置するSenior School(日本の中学・高校)。学校へ行くには舗装されていないでこぼこな登り道を数十分走らなければならない、決して交通

の便がよいとはいえない。この学校は、虐殺以前に親たちの組織によって設立・運営されていたが、虐殺時にはその親たちが子どもを殺し、子ども同士が殺しあうなど壮絶な状況に見舞われた。虐殺後は、孤児になった子どもたちが無料で教育を受けられるようにと数人の親たちによって再建され、現在は運営資金の多くが外部からの支援によって賄われている。

600人の在籍生徒は皆虐殺を経験したか、又は虐殺後に生まれた孤児である。授業料は年間で180,000ルワンダフランであるが、生徒の約9割は政府からの虐殺生存者のための基金で援助を受けている。その他はNGOからの援助か自分で払うことができている。教師数は15人で、学校運営が外部援助で賄われている関係で、教師の給料も援助額によって大きく左右されている。

この学校は、一つの学年に在籍する生徒は皆同じ年とは限らない。なぜなら、虐殺のトラウマによってNational Exam（進学のための全国規模の試験）に失敗した生徒や、勉強に手がかからない生徒が2、3年留年している場合があるためである。Senior1～Senior4は英語による授業、Senior5、6はフランス語による授業がおこなわれている。授業は国が定めた基準に従っているが、学校では生徒たちがクラブを作り、そこで自分のトラウマや考えていることを話し合う機会が設けられている。このように気持ちを打ち明けることによって、精神ケアとなっている。

現在この学校が抱えている課題の一つは、学校の運営資金不足である。具体的には、電気、水の供給が足りず、ランプが教室に1つしかなく、生徒の視力が低下するという問題が起きている。また、水は生徒が片道2時間をかけて汲みにいくという状況である。ロータリークラブによる援助によって、牛（牛乳を生徒が飲んだり、先生が飲んだりする）やコート（野外にバスケット、バレーができるコートがある）が供給さ

れた。また、生徒の抱える問題もある。生徒の多くが大学への進学を望んでいる。しかし、物資の不足や街から遠いという不利な環境のなかで勉強しなければならず、National Examでは苦戦する。

【当日の概要】

◆学校見学

実験室



資金不足のため、実験キットは少量・小さめのものを購入している。実験キットの数が少なく、種類も少ないが、先生が様々な工夫をこらして使用している様子。他のSecondary Schoolにもこのような施設が存在するのか不明である。日のあたる場所に薬品を保管しているなど、管理が十分ではないように見えた。

調理室



給食づくりを体験

訪問日は、給食室で男性がトウモロコシ粉にお湯を加えたものを大きな籠で混ぜていた。また、籠では豆を煮ていた。給食室の黒板には、今週の献立表が書かれていた。バナナ、トマト、ニンジンなどの野菜は学校の畑で栽培。

コーン、豆、米、砂糖、油はマーケットで購入。
(購入費は school fee に含まない)

<図書館>



蔵書数 3000 冊以上あり、ほとんどがフランス語で書かれてた本。ここに、タイプライターと印刷機が各 1 台ある。コンピュータを買うお金がないのでタイプライターを使用という。中には文学系の本もあり、物理・数学など理系の教科書内容は日本のものとほぼ同様。エンジニア系の教育にはとても力が入っているし、生徒側の職業評価も高い。

その他



学校の廊下には、生徒たちが作った新聞が掲示されていた。生徒たちが好きなテーマを選んで記事を書くなどの取り組みを行っているという。

◆生徒へのインタビュー

質問 1 夢は何ですか？

- A1 エンジニア (理由：数学が得意だから)
- A2 秘書
- A3 在日ルワンダ大使 (理由：政治科学

を勉強しているから)

A4 看護師

質問 2 この学校で学ぶことをどう思うか？

A 誇りに思う。

質問 3 あなたたちはルワンダの将来を担う責任があると思うか？

A (生徒一同うなずく)

◆生徒から日本メンバーへの質問

(回答は省略)

質問 1 ルワンダにきた目的は何か？

質問 2 ルワンダにくるのに支援はもらっているのか？

質問 3 原爆が日本に投下されたことを、今どう思うか？ (先生から)

質問 4 原爆で死んだ人々を弔うことはあるのか？

質問 5 海外に留学するにはどうすればよいか？



◆先生へのインタビュー

Athanase 校長先生 (29 歳)



Athanase は、29 歳という若さで College IMENA の校長を務めている。Atanaz は、自らも 1994 年の虐殺の生存者・被害者であり、

壮絶な日々を送ったという。彼は、虐殺後働きながら教育を受け、3年前国立大学で教育と臨床心理学の学位を取得した。

・虐殺時のことについて

「家族を目の前で焼き殺されたんだ。誰がやったのかもわかっている。今は加害者を許しているし悲しみはない。でも、今日まで家族のことを思い出さなかった日なんて一日たりともない。」

・学校運営について

「私は政府からなんの教育援助も受けられなくて、働きながら学校に行った。私と同じような経験を持つ子どもたちの力になりたくて先生になった。中学校のときは「ファミリー」というグループを作っていた。親なしで生きていくのはとても大変なことだけど、あなたを支えられない親を持つことも大変だと思う。私たちにできることは子どもたちに勉強するように励ますこと。彼らには親も親戚もいない。残されているのは教育だけだ。だから勉強する機会を大事にしなければならない。」

Emile 先生 (28歳)

Emile 先生は科学の授業を担当している。学校内を案内してくれた後、学校の前にある記念墓地へ連れていってくれた。彼は、私たちにこの記念墓地のことを説明した後あるお墓について話してくれた。そのお墓は2ヶ月前にできたばかりで、虐殺について証言した男性のものだという。その人は、恨みをかい殺されたのだという。それも、ナタで切られ、舌と性器も切断されたという。そして、墓地内にある倉庫にも水路を作るために掘った土地から発見された50体の遺体が積んであった。この状況を指して、Emile は次のように話してくれた。

「未だに自分の罪を白状しない人がたくさん

いる。この前も、ある家と家の間に300体の遺体が発見された。和解を進ませるため加害者には真実を言う義務がある。しかし、それができない人もいる。そのため発見されていない遺体はまだまだたくさんあるし、家族の遺体の行方を分からない人生存者もいる」

【感想】

まず、この学校が若い先生たちによって運営されていることにとても驚いた。当日私たちを案内してくれた校長先生も科学の先生もまだ20代である。私たちは皆、かれらの取り組みや姿勢にとっても刺激を受けた。学校全体の雰囲気も、先生や生徒たちが虐殺生存者であるということが大きく反映されていた様子で、孤児である生徒たちのケアに力を入れているということがわかった。

また、学校設備に関しては、先生方の認識では不足面が多いと認識しているようであったが、この学校に訪問する前に見てきた他の公立学校と比較してみても感じることは、むしろCollege IMENAの設備はかなりしっかりしているという印象を受けた。特に、図書館や実験室があること、また、それらが生徒たちに日々利用され、機能していることに感心した。

生徒たちの雰囲気も他の学校と違って感じるように感じた。質問をし合ったりする場面では、積極的に手を挙げて発言する生徒が非常に多く、私たちに対する質問も興味深かった。一つの教室内の生徒の間の年齢差は大きいですが、年齢が上の生徒が頼もしい存在として他の生徒から信頼されているようで、年齢の違いが不利になるような雰囲気がなく、とても温かい空気が流れていたことが印象的だった。生徒へのインタビューを通して、特に自らの将来やルワンダの将来への関心の高さを感じた。孤児が学校に通うことの経済的・精神的な厳しさを知ったが、生徒たちの意欲的な発言からはそれを感じさせなかった。生徒たちの前向きな姿勢に心を打

たれた。

College IMENA では、当事者がつくりあげていく平和構築の一側面を見たように思えた。皆が1994年を経験し、その後をどのように生きていくか自ら考え、この学校に誇りを持っている姿がなんとも力強い光景であった。



REACH 家造りプロジェクト訪問報告

担当：千田大介

【訪問日時・場所】

2009年9月16日（水曜）

キレヘ郡キギナ村ルガラマ集落

【訪問目的・準備】

言語、文化、宗教をほぼ共有していたルワンダで“民族アイデンティティ”を理由に起きた1994年の虐殺。それは植民地時代から始まった民族分離主義、独立以降続く政治闘争に翻弄され紛争状態に陥った社会で扇動された市民によって引き起された大量の殺戮と言えるだろう。民族と言ってもそもそも社会階級であったものが植民地支配の際に民族アイデンティティとして政治利用されていく。民族間の婚姻はごく一般的で、父親のアイデンティティが継承されていた。ここにルワンダ再建の困難があるのである。虐殺では隣人同士、あるいは身

JRYC

内同士であった者が加害者と被害者に分断された。国家再建に必要な正義とは現実の場面でどう達成されていくのか。人々はどうか共存していけば良いのか。憎しみを乗り越えどう和解していけばよいのか。人間の弱さと強さという視点からその問いを考察した。

【REACH の家造りプロジェクト概要】

1. プロジェクトについて

Gacaca 裁判を終え公共労働奉仕刑が決定した受刑者の奉仕内容は必ずしも決まっていない。REACH はその労働奉仕刑を請け負う形で受刑者による虐殺生存被害者（以下「被害者」）の為の家造りのプロジェクトを担っている。心の問題に直接アプローチする和解セミナーと、実際に罪償いをする機会を与える家造りプロジェクトを主たる活動とし、虐殺後のルワンダにおける被害者、加害者間の和解を目指している。家造りは、大工の経験がある受刑者も現場に入れ加害者が被害者である受益者のために労働奉仕を行う。プロジェクトを受けるには土地を持っているという条件がいくることと、材木は原則自ら準備しなければならない。レンガは赤土と藁を練り型に流して日干しにして作る。レンガさえ作ってれば家は結構な速度で出来るという（例、1週間で土台から壁建築まで）。被害者に対する基金も存在するが全ての人が恩恵を受けるのは難しいそうだ（汚職の問題）。

2. REACH について

代表佐々木和之さんのプロフィール



1965年横浜市生まれ。鹿兒島大学農学部卒業 コーネル大学国際農業・農村開発修士課程修了。1988年国際飢餓対策機構からエチオピアに派遣され、約

8年間農村自立支援活動に従事。エチオピア在住の2000年にルワンダを訪問し、紛争の深い

傷跡に衝撃を受ける。同年10月からプラットフォーム大学平和学部博士課程に在籍し、ルワンダの紛争問題と平和構築について研究。日本バプテスト連盟国際ミッションボランティア・洋光台キリスト教会員。

【当日の概要】

公益労働奉仕刑の一環である償いの家造り作業現場での見学、家造りお手伝い（体験）、被害者・加害者へのインタビューを行った。

本訪問における協力者は、REACHスタッフの方々（佐々木和之さん、アウグスティンさん、セレスティンさん[通訳] 他）であった。

◆現場1

ボランティアでの家造りプロジェクト

Gacaca 裁判を終え労働奉仕刑として被害者遺族への家造りをしてきたある加害者が、刑終了後もボランティアでまだ家のない虐殺生存者（被害者）への家造りを継続しているという現場（地名）を訪問。その集落の集落長もこれに喜んで共に働いているという。刑期終了の加害者達は週3回午前中にボランティアで家造りをしているそうだ。とても良い活動なのでREACHも積極的に協力をしている。REACHとしては今後もこのような活動が広がっていくと信じているそうだ。

インタビュー協力者

被害者女性A（ステファニアさん）

被害者女性B（ヴァレリアさん：実際に現場で家を作ってもらっている女性）

加害者男性C、加害者男性D（タデヨさん）

協力者プロフィール

被害者女性（A）：ステファニアさん

生存者であり受益者の一人。虐殺当時夫を失う。自分の3人の子どもと母親失踪の子ども1人を引き取り現在5人で暮らしている。本人も

加害者を赦し労働奉仕を受け入れたが、家造りが始まった時は、加害者に対する戸惑いと受刑者が本当に家を造ってくれるかという心配があったという。加害者との距離が近づいていくきっかけは、子どもが家造りを手伝い始めたことであった。通常受刑者は昼食を自分たちだけで煮炊きするが、Aさんの娘と一緒に昼食をとっても良いかと聞いた際、彼らの食事を奪っては悪いから一緒に作って食べさせてあげなさいとAさんは言ったそうだ。子どもたちが加害者との繋がり、関係の架け橋となったのである。家自体も立派なものが完成し共にとても喜んだ。REACHでは家造りプロジェクトが始まる前に受益者に心の準備をさせるようセミナーを設けている。受け入れられていると感じる受益者は作業を通して喜びを感じとても良い仕事をしてくれるという。現在は、加害者との付き合いなどに慣れていない生存者の所に行ってアドバイスなどを与えているそうだ。家は居間の他3部屋と外に台所、トイレを含め立派なものだった。（トイレは10メートルほど掘らなくてはならないので大変）。彼女は物静かな性格に見えた。穏やかだがはっきりとした目つきからは、日常生活における一定の心のゆとりや家族がいることで希望を持っているように感じられた。

被害者女性（B）：ヴァレリアさん

虐殺生存者の方。夫と二人の子どもを殺され、一人きりになってしまう。虐殺後はタンザニアに逃げていたがその後帰国。その後ある男性の第2夫人として子どもも2人いる状態で、男性はどこかへ逃げてしまった。現在は直径3メートルもない小さな小屋に3人で暮らしている。受益者であり彼女のために加害者グループが家造りを行っている。REACHのセミナーで和解に向けた心の準備をしてきたので「加害者は赦している」「家を造ってもらえるのはとてもうれしい」と言うものの、やはりまだ心の中

では納得していないようにも見えた。彼女は訪問中始終強張った表情をしていた。心の葛藤を乗り越えてきた被害者女性 A さんとの会話を通じて、自分も和解に向け加害者を受け入れようと努力しているようだった。



(左) A ステファニアさん・(右) B ヴアレリアさん

加害者男性 (C) : 名前不明

この男性には子どもと奥さんがいる。作業中とても誇らしげに、充実した表情を浮かべていた。



(男性) C さん・(子供) 息子・(女性) 妻

加害者男性 (D) : タデヨさん

虐殺が起こった際に自分の婚約者殺害に加担

JRYC

する。Gacaca 裁判を終え労働奉仕刑の一環として婚約者の妹である被害者に家を造った。罪滅ぼしの意識から懸命に働き、ある時涙を流して被害者女性に謝罪をする。ところが、被害者女性は虐殺当時の状況を思い出しショック状態で病院に運ばれてしまう。その後も女性は彼のことを赦すことができず苦悩を抱えているようだ。タデヨさんは奉仕刑が終われば罪がなくなるのではなく、真に反省しているという姿勢を見せるためにもボランティアで村の被害者女性のための家づくりを継続したいと自ら申し出て、REACH も支援することにした。



D タデヨさん

◆現場 2

労働奉仕刑としての家造りプロジェクト

ガチャチャ裁判を終え刑務所外で労働奉仕刑に就いている受刑者達が、刑の一環として同じ村の貧しい被害者の為に家造りを始めた。

(佐々木さんの解説：この村にいるある男性が)

インタビュー協力者

被害者女性 E (ドナタさん)

加害者男性 F (ムヨンバネーザさん)

加害者男性 G (エリヤブさん)

協力者プロフィール

被害者女性 (E) : ドナタさん

虐殺で両親、兄弟を殺される。最近まで藁の屋根でできた貧しい家に住んでいたという。明るい性格で、ときより大声で笑っていたのがと

でも印象的だった。過去について聞かれるとやはりうつむき悲しい表情を見せたが、家造りのおかげで希望も見えてきたようだった。



E ドナタさん

加害者 (F) : ムヨンバネーザさん

償いのプロジェクトの一環として REACH の和解セミナーを受ける。2日目に彼は叔母さん以外全てを殺されてしまった14歳ぐらいの虐殺生存者(高校のときに妊娠出産して子どもと一緒に叔母さんのところに住んでいたのだが、叔母さんとも関係が悪くなり居候できなくなったそうだ)を連れてくる。彼は彼女の家族を虐殺したグループの一人であった。REACHに頼めば家造りプロジェクトを受けられるかもしれないと思い、好意からこの女性を紹介。当初受益者リストは決定していたが、偶然一人引越しの為空きが出たので少女は入れてもらうことができた。彼は通常プロジェクト受益者の負担である材木も自ら提供した。

加害者 (G) : エリアブさん

Gacaca 裁判を終えて労働奉仕刑期の一環として REACH のプロジェクトで働いた経験を持つ。現在は刑期を終えたが、大工としての優秀さを買われ REACH に雇われて現場に勤務する。穏和で明るい性格で、ムードメーカー。



(左) F ムヨンバネーザさん・(右) G エリアブさん

◆インタビュー・証言録

現場 1 : 被害者女性

(A) ステファニアさん・(B) ヴアレリアさん

質問 1 出身はどちらですか？

- (A) : 現在のゴマで生まれ、46歳。
- (B) : 現在のムハンガで生まれ、47歳。

質問 2 どんとき幸せを感じますか？

- (A) : 虐殺を生き延びられたのは神のおかげで、自分が神に守られていると感じるときです。
- (B) : 夫と子供と一緒にいた虐殺前の日々を思い出するときです。

質問 3 最低限の生活水準はありますか？

- (A) : 衣食住はあるので、幸せだと感じます。
- (B) : 同じく、ある程度の衣食住は持っているので幸せだと思います。もちろん、これ以上に必要なものはたくさんありますが最低限の生活水準は保っているので幸せと言えます。
- (A) : たとえ家しか持っていないとしても服や食べものを得るためには仕事をしなければなりません。また、(生活を向上させる為には)子供の教育水準を上げることも考えるようになります。

質問 4 家造りプロジェクトをどう受け止めていますか？

- (A) : 私は家族以外の人の家にお世話になって

住んでいましたが、(REACH の) 支援によって家が建ちとても幸せです。誰かが自分のことを考え、家まで建ててくれることは奇跡だと思います。

(B) : 言葉では言い表せないくらい喜ばしいことです。夫も子供も死に、穴の中に一人ぼっちでいるような暮らしをしてきた私に誰かが手を差し伸べ家を建ててくれたのです。奇跡としか言えません。

質問 5 加害者との関係はどうですか？

(A) : 私は REACH のセミナーに参加したので、心構えはしていました。公益事業従事者(受刑者)は自らの罪を告白しました。彼らは悪事を働いた者ですが、同時に愛されるべき人間でもあるのです。私は彼らを受け入れたので、共に働くことは難しくはありませんでした。彼らが私の為に家造りの仕事をしていることは分かっていたし、また私が受け入れることで彼らも殺人という罪の重荷を減らすことができると理解していました。それは彼らの重荷を私が共有するということでした。

(B) : 私はとても幸せでした。彼らは家を破壊し財産を略奪した罪人でしたが、自らの罪を認め罪滅ぼしに家を造ってくれたと言ったので、私は喜んで受け入れました。

質問 6 家を破壊した者をどうやったら受け入れるのですか？

(B) : 受刑者達は罪を認め、心を入れ替えようとしていました。刑務所での刑期も終えていたし、罪滅ぼしに家を造ると言ってくれたのです。私のような生存者がいることで彼らも罪滅ぼしができるのです。受け入れる方が私も彼らも多くのものを得られるのです。

質問 7 彼らを赦していますか？ そうだとすれば何故赦せるのですか？

(B) : はい。彼らは罪を告白し認めました。そ

して、私に赦しを請いに来たのです。彼ら自信が反省し私との関係を修復しようとしていたので、赦すことにしました。

(A) : キリスト教信者として、「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされる。」という訓辞に従っています。赦すことは祝福であり、他者とのよりよい生き方を創ることなのです。

質問 8 現在は幸せですか？

(B) : とても幸せです。

(A) : 神が多くの方を授けてくださったので幸せです。

質問 9 将来の夢はありますか？

(A) : はい。一つは、どんな人とも良い関係を築き、他者と調和し、幸せな生活を送ることです。それは神の意志に仕えることを意味します。二つ目は、幸福で調和した世界を生き、天国で神と暮らすことです。

質問 10 子供や家族を含めて将来の展望はありますか？

(A) : 子供には教育を受けさせ、自立した生活を送ってほしいです。

(B) : 将来は予想できません。私は貧しく子供の学費を払うことも困難です。子供の将来のために必要なものを与えることはできていませんので、将来はわかりません。

質問 11 日本人についてどう思いますか？

(B) : 日本人の援助を神のご加護として感謝しています。これからも日本人が助けに来てくれることを願っています。

(A) : ルワンダは歴史的に外国人が悪い影響を与え、虐殺に加担した者もいましたが。私が知っている日本人は皆援助など良いことしている人です。日本人は外国人の中には良い人もいるということを感じさせてくれます。

質問 1 2 現在、健康だと思えますか？

(B)：虐殺があった後、多くの問題を経験し、肉体以上にも精神的に私は苦痛を受けてきました。家造りは精神的な癒しも与えてくれます。

(A)：私も肉体的には大丈夫でしたが、精神的に苦痛を受けてきました。今は REACH のセミナーで良い人たちが助けてくれるので回復してきました。

現場 1：加害者男性

(C) 名前不明・(D) タデヨさん

質問 1 3 なぜこのボランティアをしているのですか？

(C)：虐殺で多くの人が死にました。生存者も財産を失い家もない人も多いです。私達は家を造ることで加害者として彼らを助けたいと感じています。

(D)：刑務所で罪を告白し公益労働を終え家に戻ってきたときに、家のない隣人や友人を目の当たりにしました。私は家を破壊したものとして、今は時間を採りボランティアで家造りをしています。これによって被害者、加害者が共に働き和解も促してくれます。

質問 1 4 被害者との関係はどうですか？

(C)：今は被害者とも会話し、多くのものを共有しているので問題はないと思います。

質問 1 5 人々を殺し、家を壊し、財産を略奪してどうして問題ないと言えますか？

(C)：REACH のおかげで被害者と再会することができました。セミナーを共に受けたので、加害者として赦しを請い、被害者は赦しを与えることができました。その後、共に働くことは簡単でした。

質問 1 6 家造りで償いは十分だと思えますか？

(D)：家造りだけで十分な償いとは言えませんが、全ての生存者が家を持てるように、ボランティアで家造りをしたいと思います。特に、残された女性が家を持てるように働いていきたいです。家造りはほんの小さなことだと思いますが、自分たちに出来ることをしていきたいです。

質問 1 7 罪の意識はありますか？

(D)：もちろんあります。だからこそ、このような償いの行いによって自己呵責が和らいでいきます。罪滅ぼしによって赦されていると感じることができるのです。また、生存者が私を受け入れてくれることはとても有難いことです。実際の償いの行為を見てもらうことによって、加害者は赦しを請うことができ、生存者も赦せるようになります。

(C)：加害者である私にとって、虐殺によって責められるべきは当時の政府やリーダーだと思います。当時の政府は人々を扇動し殺戮を支援していました。政府が止めていたら虐殺は起こらなかったでしょう。実際、悲劇は起きてしまいましたが、私は神が私たちの良い関係を回復できるよう手助けしてくれると信じています。

質問 1 8 子供はいますか？彼らに自分がしたことを説明しましたか？

(C)：はい、3 人います。

(D)：はい、5 人います。

(C) (D)：子供に虐殺について教えました。実際、私達が加害者としてここに来てボランティアで家造りをしていることを子供たちは知っています。今日の朝も子供や家族にこのプロジェクトについて教えました。

質問 1 9 虐殺は二度と起こしたくないと言っていました。もし政府がまた悪い統治を行ったとしたら、人々には何ができますか？

(C) : 当時、人々は自分たちが何をしているか知るすべがありませんでした。今は自分たちが何をしてしまったか、政府が何をしたかをすでに学びました。そして物事の善悪を知った我々は今後自らの意志で決定しなければなりません。また、人々は善を守る為には命を懸けて戦うことができると信じています。

質問 2 0 悪い政府に従うことはないと思いますか？

(C) : 全てのルワンダ人が虐殺から教訓を得たので、少なくとも私は悪い政府に従うことはないと思います。私は抵抗することができます。

現場 2 : 被害者女性 (E) ドナタさん

質問 2 1 今日は何をしていましたか？

(E) : 今日の家造りに参加して埃や土を外に出す仕事を一緒にしていました。レンガを作ったりするのは大変な仕事だけど、それ以外は手伝えます。

質問 2 2 ジェノサイドの時何がありましたか？

(E) : 当時は全く平和ではありませんでした。父母兄弟は皆殺されて、近い親戚 20 人も全て殺されました。当時私は 12 歳でした (現在 27 歳)。ここの近隣の人に自分の家族は殺されました。

質問 2 3 悲しみはありますか？

(E) : 悲しみはたくさんあります。両親も兄弟も殺されましたが、自分は神様が生き延びさせてくれたと感じています (自分が生きていることに意味があるはずだと信じています)。最近になって、自分の中の苦しみが和らいできたように思います。それは REACH が家造りをしてくれたおかげで心が楽になってきたからです。以前は家族と一緒に住んでいた家は立派なものでしたが、虐殺の時に壊され現在はバナナで覆

JRYC

われている (最貧の) 家に住んでいます。REACH には加害者側、被害者側が集まってする活動あり、そこで和解について学ぶ経験が自分の心を和らげてくれます。

質問 2 4 家を造ってもらっただけで赦せますか？

(E) : 家を造ってもらっただけではなく、REACH でセミナーに参加し色々学び、また聖書から教訓を得る中で赦すことができるようになりました。

質問 2 5 加害者は謝りましたか？

(E) : 刑務所の中で、Gacaca 裁判で謝罪しました。直接家族を殺したうち 5 人は自分の家に来て謝罪しました。

(佐々木さんの解説: 家造りプロジェクトの前には色々な過程があり、謝罪後にも行動で罪滅ぼしを示しますが、それが赦す条件とは断定できません。それでも、この人たちは反省している、変わったのだという印象は持てるのです。)

質問 2 6 謝罪はどのような内容？

(E) : 自分たちは悪いことをしましたが、悪い政府に扇動されたからしょうがなかったという主旨でした。

(佐々木さんの解説: 多くの加害者と接触して来ましたが、個人的責任、罪を認められる人はほとんどいません。日本人の中にも戦時中のように「服従」の気質はあると思いますが、ルワンダ人も服従の気質は強いと感じます。しかし、「これは君の責任だ」と押し付けても本当の意味で罪を認めさせることはできません。人間は責められれば自己弁護してしまうものなのです。REACH の目標は、人間的な関係から罪の意識を深めてもらうことです。被害者が加害者に対し直接苦しみを伝え、一方で人間的な接し方をする事で加害者は心の防御を解き罪の意識を深めていけるようになると思います。)

質問27 被害者側の努力は？

(佐々木さんの解説：REACHでは色々な活動を通して被害者に学びの場を提供し準備してもらいます。その中で、多くの被害者は「自分は見捨てられたと思ったけど、そうじゃなかった」と実感していきます。そのうちに、加害者の前でも赦すことができる被害者が出てきます。そういう人はある意味特別な人かもしれませんが。彼らを皮切りに関係修復の機会がまた広がります。REACHはそういう場をつくるよう工夫しています。被害者が女性の場合(ほとんどの場合そうですが)、加害者の家族(妻)と最初に関係を築いて、加害者との関係を徐々に修復していくというのが一般的です。そこで我々は、直接両者を突き合わせて和解してくださいということは決してしません。現場1の被害者は一度加害者からの謝罪を受けた後、心ではやはり受け入れることが出来ず、トラウマが再発し病院にいかなければいけない程でした。加害者も謝罪だけで赦されると思っていましたが、そうではないと気づきました。その後、REACHは家造り現場に被害者女性をそれとなく誘い一緒に加害者の労働を見てもらうことで、ちゃんと罪滅ぼしをしていると実感してもらおう工夫しています。自然な流れでそういう場を設けることが重要だと思います。そうしているうちに、いつか「あなたを赦します」と言える瞬間が来るかもしれない。それを待つしかないと思います。そもそも関係が保てる場がなければなかなか和解への道も拓けないわけです。また、被害者と加害者に和解が必要なのは、同じ村で生きていかなければいけないという厳しい現実的な側面もあります。REACHではこれまで和解の劇的な瞬間を見てきました。それは人為的なものでは決してないと思います。)

質問28 家造り以外の場で加害者と出会うこと、接触することはありますか？

(E)：加害者は市場で出くわすこともあります。

教会の礼拝で一緒になったり、聖歌隊メンバーにもいるので、言葉を交わす場所は日常的にあります。

質問29 REACHの活動以外で心の支えになるものはあるか？

(E)：特に教会での活動は助けになっています。

(佐々木さんの解説：REACHは教会やイスラム教のリーダーにセミナーをしています。彼女の通っているキレヘ群での教会の牧師はREACH教会セミナーの書記をしているので、間接的には協力関係にあります。ただし、REACHは日常的な活動ではないので、教会での活動は彼らにとっての日常的な支えになっていると言えます。)

質問30 虐殺の前と後で気持ちの上で何が一番大きな変化でしたか？

(E)：虐殺後普通の精神状態でいるのはとても難しかったです。私の家や家族を奪ったであろう人達に出会うと恐怖を感じていました。でも、このような状態でも私は教会に通い和解についての多くの教訓を与えられました。神と、自分自身と、また他者とどう和解するべきか。そして、私は劇的な転換をし始めました。それは大きな変化でした。

質問31 和解に対して教会は重要だと思いますか？

(E)：はい。キリスト教徒には、罪を犯した後でいかに赦しを請うかを示す教えがあります。「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされる。」和解の先には天国があることを知っているのです。

質問32 虐殺の前と後であなたの将来への希望はどう変わりましたか？

(E)：虐殺の前、私は両親と共に暮らし守られていました。しかし、虐殺によって私は一人に

なり、もう面倒を見てくれる人、守ってくれる人は誰もいません。だから、神に助けを求めながら自ら決断し進んでいかなければなりません。今、将来は困難なものになりました。

質問 3 3 あなたは加害者赦すことができますか？

(E) : REACH でセミナーを受けて、赦すことと赦さないことの損益について学びました。私は和解による利益を頭で理解し、赦すことに決めました。

質問 3 4 あなたの人生で今何が一番必要ですか？

通訳 : 長い間一人の暮らしを強いられてきて、今家を手に入れたのです。旦那さんが欲しいでしょう？

(E) : (笑) (はい)

質問 3 5 子供を授かったらどんな名前をつけますか？

(E) : 男の子なら日本語で「神は信じるべきものだ」という意味の名前、女の子なら日本語で「神は聖霊をもたらすもの」という意味の名前を付けます。

質問 3 6 この村に結婚したい人物はいますか？

(E) : いいえ、いません。

**現場 2 : 加害者男性 (F) ムヨンバネーザさん・
(G) エリアブさん**

質問 3 7 おいくつですか？

(F) : 43 歳です。

(G) : 49 歳です。

質問 3 8 出身はどちらですか？

(F) : キレヘで生まれ今はギセニに住んでいます。

す。

(G) : 生まれも育ちもキレヘです。

質問 3 9 結婚していますか？

(F) : 結婚し 3 人の子供がいます。

(G) : 妻と 3 人の子どもがいます。

質問 4 0 最低限の生活水準があると思いますか？

(F) (G) : 長い間刑務所にいたのであまり生活水準は高いとはいえません。

(G) : 私は 10 年間刑務所で過ごし、2 年間は公益労働のため刑務所の外で働きました。

(F) : 私は 8 年半刑務所で過ごし、1 年半を公益労働につきがら過ごしました。

質問 4 1 この 5 年間で生活水準は向上したと感じますか？

(G) : 5 年の間では刑務所にいた時期もありましたので、外の生活を刑務所と比べることは難しいです。刑務所から出られたことが一番大きな生活の向上です。今は妻とも一緒にいられ、子供にしつけをしながら、家族みんなで暮らせています。

(F) : 私はまだ公益労働の刑期期間中ですが、刑務所からは出て家族と暮らし家から仕事(公益労働)に通っています。刑務所の生活と比べれば環境はとても向上しました。

質問 4 2 日本について知っていることはありますか？

(F) : 初めて被害者と再会したのは REACH のセミナーに呼ばれ参加したときでした。そのとき日本人である「カズ(佐々木さん)」に会いました。日本について知っていることは全て REACH を通してです。

(G) : 多くの国がルワンダに来ていますが、国際協力団体である REACH が日本に拠点を持っていることを知っています。

質問 4 3 生存者の為にどれくらいの家を造りましたか？

(F) (G) : 8 つの家を公益労働中に建てました。その他 2 つの家を少しの賃金をもらい建てました。

質問 4 4 あなたにとっての幸せは何ですか？

(F) : 刑務所から出られたときが一番の喜びでした。自由を得られたのです。また、REACH が被害者と再会し和解する機会を与えてくれたことも大きな喜びです。

(G) : 私も 10 年過ごした後に刑務所から出られた時が一番の幸せでした。しかし、村に戻ってきた時、生存者にどう顔合わせすればよいのかわからず、最初はとても恐ろしかったです。皆私が多くの人を殺したことを知っていました。生存者が受け入れてくれるとは夢にも思いませんでした。REACH の助けによって、生存者達は私を受け入れてくれました。彼らは好意を持って受け入れてくれたのです。これはとても信じられないことであり、予期しなかった喜びの瞬間でした。

質問 4 5 虐殺の責任は当時の政府にあると思いますか？

(F) (G) : はい。当時の政府が望まなければ虐殺は起きませんでした。政府は人々にどう殺すかを教えたのです。現在の政府は和解を促し人々はそれに従っています。

質問 4 6 当時の政府は人々をなぜ動員できたと思いますか？

(F) (G) : 当時の政府はツチが自分達を脅かす敵だと教え込みました。そして、ためらえば自分が殺されてしまうから先に敵である彼らを殺しなさいと言って人々の殺戮を支援しました (恐怖心を利用したのです)。

質問 4 7 当時平静を保つのは困難だったのですか？

(F) (G) : 自分自身を保つのはとても困難でした。国家から草の根まであらゆるレベルで監視されていたので、抵抗したり逃げたりすれば地域のリーダーに通告され殺される危険がありました。当時は誰もが従うしかありませんでした。

質問 4 8 虐殺前メディアによる洗脳はどう影響しましたか？

(F) (G) : メディアは当時の政府によって人々を扇動し悪事をさせるために重要な役割を担いました。当時メディアは様々なことを隠していたので、人々は実際何が起きているのか知ることは出来なかったと思います。メディアは真実を隠し人々に嘘を吹き込んだのです。

質問 4 9 国内、国外どちらに向けて嘘をついたのですか？

(F) (G) : 国内、国外両方に対し真実を隠し、嘘をつきました。

質問 5 0 虐殺が実際に起こっていたのに人々は虐殺について知らないことなどありませんか？

(F) (G) : おそらく虐殺の前よりも後になって人々 (私達以外の人を含め) は事実を知りました。私たちは殺人者ですが、当時の政府が私達を訓練し虐殺を指示しました。その後現政府が私達を刑務所に入れ、真実を語るよう促しました。それから、私達は全てを語り始めました。何を教えられたか、何が起きたか、それをどうやって行ったか。一方虐殺が始まった時、国外 (ウガンダ) から「敵の兵士 (RPF)」が攻めてきたと私達は聞かされていました。侵攻してきた兵士 (RPF) が「敵」というのは真実ではありませんが、当時は RPF、国勢、政府につい

て誰も正確なことがわかりませんでした。人々を扇動していたラジオを通してのみ情報を得ていたのです。後になって、人々は自分達が経験したことの裏側を知り、世界にも事実を伝え始めたのです。

質問 5 1 何故このプロジェクトに参加したのですか？

(F) (G) : 私達は多くの人を殺しました。REACHが生存者との再会を手助けしてくれ、その後加害者で生存者の為に何が出来るか考え始めました。そして、REACHの協力でこのプロジェクトに参加し生存者の為に家を造っています。

質問 5 2 将来の目標はありますか？

(F) : 長い間家族と離れていましたが、今は一生懸命働き自分の力で家族を養いより良い生活を与えていきたいです。

(G) : 私の人生はとても困難です。刑務所にいる間多くのものを失いましたが、今は自由です。自分の持てる力を全て家族の生活向上の為に使って生きていきたいです。

質問 5 3 加害者の中で自殺した人はいましたか？

(F) : はい。タンザニアの難民キャンプで、ある夜に私達はルワンダに帰らなければならぬと告げられました。多くの方は自分達が殺しや略奪など多くの悪事を働いた場所へ帰ることなど出来ないと考え、その中には自殺した人もいました。ルワンダへ帰る途中アカゲラという川を渡らなければいけないのですが、そこで川に飛び込んで自殺をした人もいました。縄を使って首を吊った人もいました。しかし、私達を含め他の人々は悪事を働いたとしても現実に向き合わなければならぬと考えルワンダまでたどり着きました。殺人者だと分っていても帰らなければならぬかったです。心の準備は出来ていました。もし、仮に赦してもらえ

なら幸いだと考えていました。

(G) : 私はその夜の前に帰ってきたのでそのことについては知りませんでした。ルワンダの近くまで来るとすぐに刑務所に入れられました。その自殺については後で噂やニュースで耳にしました。多くの者は罪の意識から自殺したと聞きました。

質問 5 4 虐殺を防ぐ方法はどんなものがあると思いますか？

(F) : 当時の政府はツチが敵 (RPF の仲間) であり、人間ではなく蛇だと言い、兵士 (RPF) が外から攻めてくると吹き込んだのです。私達は恐怖から従いました。政府による扇動がなければ虐殺は起きないと思います。

(G) : 私は「抵抗」が必要だと思います。現在生存者がいるのは兵士 (RPF) が国外 (ウガンダ) から来て当時の政府に抵抗したからだと思います。だから、兵士、軍人、警察や刑務所の看守が悪い政府に対し抵抗し戦えば虐殺は起きないと思います。いずれにしても虐殺に関して政府には大きな責任があります。

質問 5 5 家を造ることは償うという意味で十分だと思いますか？

(F) (G) : もちろん、これで十分だとは言えませんが、少なくとも家も家族も奪った人に住む場所を与えることで関係を取り戻すきっかけになります。家造りは自分にとっても (罪の意識に対して) 癒しを与えてくれます。

質問 5 6 家を建ててあげた人と関係は築けましたか？

(F) : 最初の頃と比べれば関係はとても良くなりました。長い時間働く中で徐々に関係は良くなっていきました。今では作業の間の昼食を一緒に食べることもあります。

(G) : 自分が傷つけた人が「共に食事を取りましょう」と言えることは内的トランスフォーメ

ーションがなければ起こりえません。この内面的な変化によって私達の間には和解が生まれています。

質問 5 7 事実を次世代に語ることはあなたの義務だと思いますか？

(F) : 刑務所にいた時、自分がしたことを振り返りながら、子供達には同じことをさせてはならないと思いました。あの時、私達はまるで獣のようだったのです。そのような狂気を子供達に持たせてはならないし、自分の経験から彼らに教訓を伝えていくのは私の責任だと思います。

(G) : ルワンダには追悼週間というものがあり、そこでは過去を忘れないよう皆当時のことを心に留めます。18 歳の息子も追悼行事に参加し多くの事実や証言を聞きました。そして、私のところに来て「お父さん、どうして人を殺してしまったの？ どうして？」と言いました。私は答えられず、ただ泣いていました。それから、私と同じ過ちを繰り返さないでくれと伝えました。このように、子供達に事実を伝えそれを繰り返してはならないと教えることは重要だと思います。



G エリアブさん

質問 5 8 奥さんとの仲は良いですか？

(F) (G) : 自分も彼女もお互い愛し合っています、3 人の子どもがいます。ちゃんと挨拶や食事の準備もしてくれます。

質問 5 9 一番大切なものは何ですか？

(F) (G) : 神様から平和をもらうことです。全てを与えてくれる神様が一番大切です。

質問 6 0 虐殺の時神様を信じていなかったのですか？

(F) (G) : 自分たちはキリスト教徒でしたが、本当の意味で神様を信じているとは言えなかったのだと思います。本当の信仰がなかったと思っています。今は違います。

(佐々木さんの解説: 私が接してきた多くの加害者の返答は「そのときは異常な心理状態、社会全体がおかしくなっていた。」というものでした。)

質問 6 1 将来子どもにはどのようになってほしいですか？

(F) (G) : 先生とか、国を愛し、神を愛する人になってほしいです。例えば学校の先生のように知恵を与えるような人になってくれたら嬉しいです。

【感想】

隣人同士が殺し合ったルワンダの再建の難しさは、和解をいかに進めていくかということに尽きる。今回の見学で出会った被害者女性ステファニアさんやドナダさんは「心からの赦し」を体現しているように見受けられ、それが信じがたいことであった。ルワンダ人の多くがカトリック教徒であり、REACH のセミナーを通じて和解の意義と利益を学んだとはいえ、それは一人の人間として決して容易なことではないと感じた。穏やかな表情で加害者を受け入れられるようになるまでには、いったいどれ程の時間的、精神的道りがあったことだろう。最近家造りの受益者に選ばれたというヴァレリアさんは、言葉では明確に「赦し」を口にしていたものの、表情は硬く未だ心にわだかまりがあるようでした。それはむしろ自然なことと

思えた。そういった葛藤を目の当たりにして、被害者が加害者を赦せるようになったのは、紙に書かれた教義や偶然だけではなく「人間の努力」もあったからこそなのだと感じた。

ボランティアで罪滅ぼしとしての家造りを続ける加害者男性 C さんの充実した笑顔にはとても説得力があった。刑だから奉仕しているというレベルを超え自発的に労働奉仕を続けることで、被害者の中にも彼らが本当に「反省」しているのだとう実感がもてるようになるのではないかと感じた。インタビューの最後で「もし政府が悪い方向に行けば、今なら抵抗できる覚悟がある。死をも恐れない。」と語った C さんは本当の意味で後悔し反省したのだということが伝わってきた。また、加害者男性のエリアブさんは、息子に殺しの罪を責められた時、泣きながら自分と同じことを繰り返してはならないと伝えたそうだ。これらは考えてみれば決して当たり前のことではない。私たちは、REACH のプロジェクト以外でも加害者側の人に虐殺の原因と責任について問う場面があったが、多くの加害者は眉間にしわを寄せ「反省はしているが、政府が悪かったからしょうがなかった。」ということをお口にしていた。戦争の加害に対する日本人の態度にも通じるころがあるが、誰かを殺さなければ自分が殺さるという異常事態の中に一人の人間として自分個人の罪と責任を認めるのは非常に難しいことだ。服従と死に対する恐怖、それは人間の弱さである。私たち誰もがこの本質的な弱さを抱えているのではないだろうか。1000 万近い人が四国の 1.5 倍ほどしかない土地に暮らしているルワンダでは、国民全てが被害者側か加害者側かに分断された。REACH の活動見学では、被害者も加害者もそれぞれの不条理の中で同じ正義を求め苦悶していた。復讐することもでき、一生他人として暮らすこともでき、賠償だけを要求することもできる。それも人間の性だということとは否定できない。しかし、彼らはも

JRYC

う一度人間としての関係を取り戻そうとしていた。その葛藤は人間の強さを示唆しているようでもあった。和解への取り組みは被害者の努力、加害者の努力、スタッフの努力によって始めて成り立つということがよく分かった。家造りという過程は正にルワンダ人の手による国家再建の一つの道筋なのだとすることを深く実感した。

最後にご多忙の中見学活動をコーディネートして下さった佐々木さん、セレスティンさん、アウグスティンさんなど REACH のスタッフの皆様、インタビューに協力して下さったステファニアさん、ヴァレリアさん、タデヨさん、ドナタさん、ムヨンバネーザさん、エリアブさんなどキレヘ群の皆様メンバー一同心より感謝いたします。今後もこのような活動がきっかけで着々とルワンダに和解の契機が広がっていくことを願っています。

ウムチョムイーザ学園 訪問報告

担当：大久保美希

【訪問日時・場所】

9 月 18 日（金）9:00～12:00

Umuco Mwiza School：キガリ（キミロンゴ）

【訪問目的・準備】

ルワンダの教育の実態について知る一環として、特色のある私立の学校としてウムチョムイーザ学園への訪問を決めた。結果的に、今回は幼稚園の見学が中心となったが、小学校の様子も垣間見る中で公立の学校との違いなどが伺える訪問となった。

訪問実現までの経緯としては、福島県在住のマリエルイズさんと事前に連絡をとり、ウムチ

ウムイーザ学園の校長先生(ルイズさんのお兄さん)であるチャールズさんに繋いでもらった。チャールズさんには出発前にメールで訪問日程や目的などを記載した企画書を送り、ルワンダ到着後、15日頃電話で連絡を取った。当日は、ドライバーのムニャカジさんの車で現地へ。学校は、キガリのキミロンゴマーケットのすぐそばにある。

当日は、到着すると年少～年長の幼稚園児が歌や踊りの真っ最中で、数十分見学し、その後子どもたちの教室に入りアクティビティを見学。その後、校長先生に学校全体を案内していただき、小学6年生のクラスを見学。最後にホールに集まって歌や踊りをした。

【ウムチョムイーザ学園概要】

ウムチョムイーザ学園は、日本在住のルワンダ人マリールイズさんが設立したNPO「ルワンダの教育を考える会※」の支援によって作られ、1992年に設立された現地NGOであるADESOCが運営する学校である。この学校は、1994年の虐殺で傷ついた子どもたちや、貧しい子どもたちも通うことのできる総合学園(幼稚園から大学まで)を目指しており、現在は幼稚園と小学校が運営されている。教員数は25名で、現在在籍する子どもの数は、幼稚園と小学校合わせて270名(そのうち30名ほどが孤児)である。また、当日訪問した小学校6年生のクラスの子どもの年齢にもばらつきが見られたことから、多様なバックグラウンドを持つ子どもたちを受け入れているようだ。



ウムチョムイーザ学園は、その理念を反映し、

JRYC

入学する子どもは貧富の差に関係なく先着順で受け入れている。よって、中には学費を払えない子どももあり、そのような子どもは年々増えているが、現在のところ学費未納分は日本からの支援で賄っている。マリールイズさんは、「貧しい家庭の人々が抱える問題を共に解決していけるような学校を目指している」とおっしゃっている。学園の運営には、日本との協力が重要であることがわかる。

今後の学校環境の改革ビジョンとしては、中学校の建設を目指しているとのことだった。現在は英語教育の義務化によって、ネイティブの教師などの採用費用がかかっており、中学校は2011年頃からスタートする予定になっている。

【補足】

※NPO「ルワンダの教育を考える会」について

1994年の虐殺の時に難を逃れて日本にやってきたマリールイズさんは、ルワンダの平和構築にとって教育が必要不可欠であると考え、NPO「ルワンダの教育を考える会」を設立し、様々な活動を始めて今に至る。ホームページには、「戦争で心身共に傷ついたルワンダの子供達に対して、教育の機会を与え、民俗や宗教政治思想にとらわれることなく、その人らしく生きていくための様々な教育支援に関する事業を行い、ルワンダの平和に寄与する」という平和への願いが込められた目的が掲げられている。ウムチョムイーザ学園の設立・運営支援に加え、ルイズさんの講演活動、イベント開催、ルワンダ民芸品販売なども行っている。

【当日の概要】

◆幼稚園のアクティビティ見学



到着するやいなや、校庭で子どもたちが元気に英語と日本語の歌を歌っていた。年少から年長までの園児たちが、先生の叩く太鼓のリズムに合わせてはっきりと日本語を口ずさむ姿を見て、日本から来た私たちはとても驚いた。子どもたちは10曲以上の歌を既に覚えているようだ。



歌の後は、教室での子どもたちの姿を見学。「おはようございます」、と日本語のあいさつで始まった。教室には、子どもたち一人ひとりが描いた絵などの作品が飾られ、日本の幼稚園と変わらない雰囲気をもっている。ただ一つ日本と異なる点と言えば、ルワンダの幼稚園は「勉強する」という印象が強い。この日も、絵を描いたり工作したりするアクティビティに加え、幼稚園児が算数の計算をしていた。ウムチョムイーザ学園に赴任している JICA 協力隊員（現在2人目）の加藤麻子さんによると、現在工作などのアクティビティの幅を広げようとはしているが、ルワンダ（途上国の幼児教育全般に当てはまるが）ではそのような活動がなかなか理解されづらいという。なぜなら、幼児教育自体が普及しておらず、公立の幼稚園もないということで、金銭的に余裕のある一部

の家庭の子どもしか幼稚園に通えていないため、学費を払って幼稚園に通わせる親の期待は、子どもたちが「勉強する」ことであるためである。そのような期待から、幼稚園では読み書き中心の勉強が主体で、小学校と変わらないような光景がみられた。加藤さんは、このような幼児教育のあり方に課題意識を持ちながら、今後も時間をかけて、現場の先生や保護者に向けて子ども主体の保育、発達に応じた活動、就学前教育を伝えていきたいと語ってくださった。



切り絵の時間。どの子どもも作業に夢中



校庭で遊ぶ子どもたち



算数の計算をする年長クラスの子

◆小学校 6 年生クラスとのセッション

この日は、National Exam の翌日で学校が休みであったにもかかわらず、校長先生が私たちのため 6 年生のクラスの児童たちを集めてくださった。教室で日本側の私たちから挨拶をして、子どもたちに夢は何かなどの質問をすると、皆とても恥ずかしそうにしてなかなか手を挙げなかった。一人が手を挙げて発表すると、段々と手を挙げる人が増えてくる。また、ホールに移動して歌とダンスの披露会をしてくれたのだが、その際も子どもたちは皆恥ずかしそうでお互いを茶化し合ったりしていた。このような姿を見て、私たちは、ルワンダの子どもたちが日本の小学生の雰囲気にとっても似ているという感想をもち、妙に親近感が増した。



ルワンダの伝統ダンスを披露してくれている子どもたち。

また、ホールには日本から寄贈されたピアノがあり、子どもたちが皆で合唱してくれた。ここでも、日本の小学校に似た雰囲気を感じた。ピアノを弾いてくれた男の子は、日本側のメンバーの一人（ピアノが得意）に熱心にピアノを習おうとしていた姿が印象的だった。



【感想】

ウムチョムイーザ学園は、驚くほど日本の幼稚園や小学校と似ており、まるで日本の学校を訪問しているかのようだった。マリールイズさんを中心とした日本からの支援や協力が感じとれる学校だった。また、初めてルワンダの幼稚園を見て、小さな子どもたちの素直で生き生きとした姿がとても愛らしかった。日本語の単語を自然と身につけている子どもたちが、将来どのような大人になるのかとても楽しみに思う。

小学校に関しては、他の公立の小学校と比較して明らかに異なっていたことは、同じ学年の子どもたちの年齢層が様々であったことである。これは、ウムチョムイーザ学園の理念を反映させた結果であり、過去の経験や家庭の事情によって教育機会が奪われぬよう学びたいと希望する子どもたちを全力で受け入れているということが実際によくわかった。ユニセフの調べでは、ルワンダでは 15～24 歳の識字率は 75%であるものの、24 歳以上の人々も含めると 65%となっている。この数字から言えることは、1994 年の虐殺などによって当時教育機会を奪われたまま大人になった人々が多く存

在しているということではないだろうか。この意味でも、ウムチョムイーザ学園の担う役割は、今後も非常に大きいと言える。

マリールイズさんは、年々学費を払えない子どもたちが増えていく中で経営面の困難を口にしていて一方で、そのような状況を前向きにとらえ、「とにかくもっとたくさん子どもがもっと教育を受けられるようにしたい!」とお話している。ウムチョムイーザ学園は、これからもルワンダと日本の懸け橋になるのだと思う。



Gacaca 裁判 訪問 報告

担当：勝俣玲、Kristina Gan、千田大介

【訪問日時・場所】

9月19日(土)

キガリ・ギコンドセクター

【訪問目的・準備】

ジェノサイド時裁判のシステムが崩壊し、その後多くの囚人を抱えることになったルワンダでは、ジェノサイド関連の事件を扱うために 2002 年から伝統的な裁判システムである Gacaca 裁判を開始した。

この Gacaca 裁判はルワンダ特有のシステムであり、渡航前から研究の対象としていたが、イメージだけで捉えている部分が多く、その実際を見てみたいとの思いから見学させてもらうことになった。

【Gacaca 裁判とは】

伝統的にルワンダには、争いに対し地域住民で解決を導き出す Gacaca 裁判が存在した。争いに関わる当事者だけでなく地域の住民が参加し、各自が見たものやそこで起こったことを証言し、主張・議論して年長者が決定を下す。この過去の伝統的なシステムが改善され新しい裁判のシステムとなったことはルワンダの文化の特性の一つである。これはジェノサイド時の犯罪のみを扱うもので、罪の大きさによって、村単位や行政のレベルで行われるものもある。この Gacaca 裁判は真実と正義を抽出するのに一役買うが、それはまた甚大な危険性も伴っている。ルワンダ人にトラウマを甦らせ、または新たな敵意・暴力を作り出す可能性も持っているのである。

しかしそれらは、暴力の根源を人々に理解させることで軽減され得る。暴力の元となったものを理解することは生存者と犯罪者の両方に、理解できない悪としてではなく何が起こったのかという認識を促す。生存者は Gacaca 裁判のプロセスの中で彼らが見聞きしたものを認識していくことで彼らの感情的な行動を抑えることが出来、犯罪者は彼ら自身の暴力における役割と被害者との公平な関係のための労働を受け入れることにつながる。

被害者と生存者の苦しみを理解することは生存者のいやしのための第一のステップなのである。真実と正義の効果は修復と将来における関係の構築に貢献し、それによって平和な未来もより期待される。

【当日の概要】

なんとといってもまず許可が下りるまで相当の労力をかけた。申請書と見学料が必要と言われ事務所に行くと、今度は写真とパスポートのコピーが要求され、事務所と町を行ったり来たりして駆け回った末、やっとのことで許可を得ることが

出来た。

そのようにしてやっとのことでたどり着いた Gacaca 裁判見学は私たちのイメージとは異なったものだった。草原で町の人が集まって輪になり話し合う程度のものだと思っていたが、全くそのようではなく、集会を行う小さな体育館のような所で行われた。ルワンダカラーのカーテンで前面の壁一面が飾られ、その真ん中に大統領カガメの写真が飾ってあり厳かな雰囲気を持っていた。その写真の前には長机が用意されているのが Judge の席、Judge の席に向かい合うようにして何列も並べられている長イスが証言者、目撃者などの席となり、私達もそこに入って見学させてもらうことになった。しばらくすると 5 人の judge が入ってきて、私達を含む約 50 人で裁判が始まった。

◆当日得られた情報

1. 容疑者について

容疑者は3つのカテゴリーに分類される。

カテゴリー1: 黒幕・首謀者、強姦犯人⇒終身刑
被害者の保護のため性的犯罪は非公開で行われる。多くの強姦犯人が終身刑か 25 年の懲役。このカテゴリー 1 に属する囚人は Arusha International Tribunal Justice for Rwanda で裁かれる。

カテゴリー2: 殺人またはジェノサイドの共犯者
⇒19 年から 0 年

多くの女性囚人がこのカテゴリーに属する。文字の読み書きの出来ないまたは自白をした容疑者は減軽される。

カテゴリー3: 器物損壊または窃盗⇒6 年から 0 年

払い戻しや損害賠償をする場合は釈放される。

※未成年の容疑者は特別の収容所に入れられるが、多くは自分の行動に対して責任を持っていなかったことにかんがみ、釈放される。

2. 裁判官について

裁判官は専門家ではなく 20 歳以上の市民から選ばれる。法廷で被告人は裁判官が被害者の関係者であることを理由に、裁判官を拒否することが出来る。その場合裁判官は権利を失い、新しい裁判官に代わる。5 人の裁判官が揃えば、裁判は開始される。また、裁判官はその仕事に対していっさいの報酬を受け取らない。全てが無償で、しかも仕事を断ることも出来ない。賄賂を受け取ったとして裁判官に選ばれた人が収監された事例もある。

3. 再審について

被害者・被告人の双方とも、判決に納得しない場合“appeal”することが出来、再審を求めることが出来る。その後の判決にも納得出来ない場合は、“revise”を申請出来る。

【Gacaca 裁判の当日のケース】

ケース：大虐殺当時に起きた殺人事件

被疑者：アロイという男

証言者：アロイの兄・一般人 2 人（両方男）・アロイが指名した 3 人の受刑者（女性一人・男二人）

告訴人：殺害された男の妻

通訳の話しによると、私たちが見学した裁判は通常のケースより複雑だったという。被疑者は 8 ヶ月前（渡航 9 月の時点）に 17 年の刑を受けたが、納得できず無罪を訴え再審を求めた。今回はその事件を再審するための裁判だった。アロイは証言者として、兄と 2 人の一般人証言者に加え、3 人の受刑者を指名した。この男性 2 人の受刑者は今回の殺人事件とは別件ですでに 10 年以上刑務所で服役しているが、近所に住んでいたため証言者として連れてこられた。女性の受刑者は殺害された男性と当時不倫関係があり、被害者である元妻に 12 年前に訴えられたという。

証言者は次々と発言をし、裁判官はそれに対して厳しい質問をする。その間傍聴人も挙手すれば発言できる。告訴人の証言に対し、傍聴人が「前回の裁判と違う証言を言っている」と指摘したこと、できたことが驚きだった。途中から新しい者が名乗り出て、彼はその場で証言者として登録された。「遺体が積んであったトラックを運転していた人を見た」「道路にあった遺体を隅っこにけり転がした」など虐殺当時の生々しい証言を聞いたのははじめてだった。他の訪問地である「和解村」と「REACH」で加害者をインタビューしたときこのような詳しい話しはできなかった。緊迫した空気の中参加者は真剣に裁判に取り組んでいた。

また、一般の証言者 2 人の証言には一貫性がない、あるいは重要な内容を隠していると判断されたため、それぞれ 3 ヶ月と 6 ヶ月の刑を言い渡された。妨害行為として携帯が鳴ってしまった人の携帯は没収後 84 時間拘束された。Gacaca 裁判は、遠くから来ている証言者、または傍聴人がいるためほとんど一日で終わらせる場合が多い。だが、被疑者が不参加であったためその日判決は下されなかった。

【3 人の容疑者へのインタビュー】

あなたはなぜ再審を要請しないのですか？

男 A:たとえ要請しても、この事件に私は無関係だということを証言者などがしっかり証明できなければ刑がもっと重くなる可能性がありリスクが高いので。

男 B: 私は終身刑が確定している。再審を要請しても意味がない。

【感想】 勝俣玲

私たちの見てきた Gacaca 裁判は、全くイメージと異なるものだった。裁判官は、専門の裁判官ではなく一般市民から選ばれた裁判官であるのに、そうとは思えないような厳かな雰囲気は漂わ

せていた。何人かの人生を大きく変え得る裁判なのだから当然とも言えるが、その整然とした空気に少し驚いた。写真を載せることが許されなかったことは残念だが、そこでは上記のような新たな情報も得ることが出来、意義のある訪問であったと思う。

実際に見学してみて感じたのは、住民が参加することの問題点。

不公平感、被告人を周りが糾弾するような裁判になってしまうことはないか—考えればいくらでも思いつく。特に、被告人にとっては、その人権が本当に守られているのかは少し疑問に思うところだ。日本における裁判では弁護士がつくが、ここではない。

もう一つは、ルワンダ人が自分達の問題を自分たちで解決し、その社会のルールの体系を自ら形づくっているということ。

裁判が始まると、参加している多くの住民たちが次々に手を挙げ、積極的に発言していた。住民が自らの力で、物事の判断を下し、社会を形づくる—日本においては、法とは一般市民から程遠いものであると思う。最近裁判員制度が導入され、少しずつ、市民の裁判への認識が高まることが期待されているが、それでもやはり法は自分とは縁遠いものと捉えている人がほとんどであるだろう。

法とは社会を形づくるルールである。一つの判決は他の判決にも反映され、それが積み重ねられていくことによってルールが完成に近づいていき(完成というものはないと思われるが)、市民に共有される。したがって、一つ一つが全く別々なのではなく、それぞれが独立しながら、かつ牽制し影響し合っている。だから、それぞれの裁判に参加した住民は自らその社会のルールを作り上げることに参加しているのでであると私は思う。

日本人には、そのような感覚がないのではないか。ルールというものはどこかのだれかによっ

てあらかじめある程度決められており(もちろんそれは事実だが)、それはよくわからない細々としたもので、概して自分には関係ないことのように思っている。Gacaca 裁判は修復的司法と説明されることがしばしばある。そのように表現すると難しいが、それは現在の日本において欠けている観点である。ただしそこには宗教的な背景もあると思われるため、修復的司法を日本に取り入れるべきなどと簡単に言うことは出来ない。しかし、それだけではなく、他人のこと・自分の地域のことへのプレゼンスの必要性、責任をどのくらい重く受け止めているかの違いであるように思う。当事者意識の違いが、ここにはあると思った。最も、それは日本の市民の怠慢や無責任さというわけではないと思う。もともと堅実に作られている法が、市民から容易に理解され得ないものであることは仕方がない。だから私は、どちらが良くてどちらが悪いというのではなく、ただそれが、ルワンダ人の自分たちで社会を形作っていく姿が、かっこいいと感じた。Gacaca 裁判はただ単に、従来の裁判システムが手に負えなくなった囚人の対応をするためのものではない。住民が自ら納得する解決を導き出し、一緒に乗り越え社会を形作っていくための重要なプロセスとして機能しているのだと、私は思う。

【感想】 Kristina Gan

政策としての Gacaca 裁判はある程度知っていたものの、実際にはどのように行われているのか勉強していなかったため驚きばかりだった。裁判官が一般市民から選ばれ、彼らは無償でその義務を果たし、証言者は当日でも登録でき、傍聴人は証言者と一緒に座り発言権があるなど想像を超える制度である。偶然にも私たちが見学したケースは複雑だったようだ。

裁判官は法律のバックラウンドがあるとは限られず、事前の取調べもない。ルワンダには

JRYC

一人ひとりの被疑者に対して厳格な裁判をしている余裕はない。難しい問題だが、市民一人ひとりの手で正義を果たそうという強い意思が伝わってきた。ここまでオープンな裁判は他にはないかもしれない。Gacaca 裁判は 2009 年 12 月で全国規模の裁判としては終了となる。それ以降は必要のある事件のみが行われる。国民の過半数以上が被害者という国には 15 年という短期間に虐殺の罪に関する裁判がほぼ終了しようとしているというのは、よい意味で悪い意味でも Gacaca 裁判は草の根レベルでの裁判。

これから日本でも裁判員制度が導入される。ルワンダの Gacaca 裁判と日本の裁判員制度は異なる裁判システムだが、裁判の効率化と法意識の向上という目的と分析・判断能力の不足という欠点は市民参加型の裁判である両者に共通しているだろう。

虐殺当日のなまなましい証言を聞き、ホテルルワンダを思い出した。自分の目を見た人、自分も殺人に加わった人の声は、映画よりもはるかに迫力があり、ぞっとするものだった。平和そうなルワンダの悲しい過去を身近に感じさせる経験となった。

第4章

学生意識調査アンケート

学生意識調査アンケート

日本・ルワンダ学生会議 学生意識調査アンケート結果（日本編）

有効回答数（日本側 51 ルワンダ側 24）

目的

1. ルワンダと日本の大学生の違い・共通点を発見し、また“生の声”を集めることで“相互理解”を深める。
2. それを日本において伝えることで、日本人のルワンダへの興味喚起・理解促進を図る。

以下日本、ルワンダ双方の大学生を対象にしたアンケートを実施した結果（一部抜粋）を掲載する。

質問 1 あなたは、男性ですか？女性ですか？

日本	1. 男性 26 票 2. 女性 25 票
ルワンダ	1. 男性 14 票 2. 女性 10 票

質問 2 なぜ大学に入ったのですか？（3つまで複数回答可）

	日本（票）	ルワンダ（票）
将来やりたいことを考える時間を持てるため	26	8
多くの人に出会い人間関係を築けるから	25	6
より良い職業につくため	22	12
純粋に勉強をするため	22	0
勉強以外の色々なことにチャレンジする機会を持てるから	16	11
安定した職に就くため	13	6
進学するのが一般的だから	11	0
国家を運営する立場になれるから	3	12
なんとなく	3	0
その他	2	0
学者になるため	0	15

質問 3 勉強以外に打ち込んでいることはありますか？それは何ですか？（3つまで複数回答可）

	日本（票）	ルワンダ（票）
クラブ活動（文化系）	8	21
アルバイト	25	6
ボランティア	11	10
クラブ活動（スポーツ系）	8	5
その他	7	1

ビジネス・インターンシップ	6	2
勉強のみ	3	7
特に何もしていない	1	1

質問 4 あなたは社会をより良い方向に変えられると思いますか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
大学生として変えられる	11	11
将来変えられる	21	9
変えることは難しい	19	1
変える必要はない	0	1

質問 5 問 4 でそのように答えた理由を教えてください。

日本	<ul style="list-style-type: none"> ・インドの孤児院、学校に給食を作るプロジェクトを開始したから。 ・社会を変えるためには、それ相応の立場になることが必要。 ・今、自分がしていることが社会に影響するほどのこととは思えない。
ルワンダ	<ul style="list-style-type: none"> ・社会を変えるには時間が必要。 ・将来的に私はより良い能力を手に入れられるはず。

質問 6 大学生はエリートであると思いますか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
大学生であれば誰でもエリート	1	1
どの大学に入るかによる	22	0
特にエリートではない	28	18

質問 7 大学生になるために必要なものは何ですか？ (2つまで複数回答可)

	日本 (票)	ルワンダ (票)
金	29	11
努力	26	4
頭の良さ	15	19
やる気	12	6
どの大学か選ばなければ誰でもなれる	12	0
運	5	8
その他	1	0
人脈	0	0

質問 8 学費は誰が負担していますか？（複数回答可）

	日本（票）	ルワンダ（票）
近親者	48	4
奨学金	11	19
自分	2	1
その他	0	1

質問 9 将来、国内と海外のどちらで活躍したいですか？どちらに貢献していきたいですか？

	日本（票）	ルワンダ（票）
国内	22	13
場所は特定しない	20	12
海外（アメリカ）	3	0
海外（アフリカ）	1	2
海外（ヨーロッパ）	1	1
海外（それ以外）	1	0

質問 10 問 9 でそのように答えた理由を教えてください。

日本	<ul style="list-style-type: none"> ・身近なところから始めたい。 ・自分の生まれ育った国のためになることをしたいから。 ・恒常的に世界に貢献していくにはまず日本の発展が不可欠だから。
ルワンダ	<ul style="list-style-type: none"> ・知識は国境を越えるものだから。 ・自分の国が好きだから。

質問 11 自分の国が目指すべき国はどこだと思いますか？

日本	北欧、西欧諸国が多く挙げられた。
ルワンダ	日本、アメリカ等の先進国が多く挙げられた。

質問 12 問 11 でそのように答えた理由を教えてください。

日本	北欧諸国を挙げた方の多くは福祉の充実を理由としていた。
ルワンダ	先進国の高い技術

質問 13 今自分の国で一番深刻な社会問題は何だと思いますか？最大 3 つまで挙げて下さい。
（複数挙げられたものの中から抜粋）

日本	<ul style="list-style-type: none"> ・年金問題 ・高齢化社会 ・福祉制度 ・格差社会 ・天下り ・歴史認識 等
ルワンダ	<ul style="list-style-type: none"> ・貧困 ・教育水準 ・エイズ ・医療制度 等

質問 14 政治に関心がありますか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
ある	26	10
少しある	18	6
あまりない	2	7
全然ない	2	0

質問 15 政府はどう評価できると思いますか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
よくやっている	0	6
まあまあ評価できる	14	16
あまり評価できない	29	1
まったく評価できない	5	0

質問 16 政府に対する要望はありますか？

日本	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎を受け継ぎながら斬新な改革を。 ・ 今後 100 年の展望を見据えての政策打出しを希望。 ・ 天下りの廃止、官僚人事の厳重化。
ルワンダ	<ul style="list-style-type: none"> ・ インフラと教育に対する支出のバランス。

質問 17 ルワンダ (日本) についてどのようなイメージを持っていますか？ (*)

日本	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知らない国だったので、特にイメージはなし。 ・ アフリカの国のひとつ ・ ジェノサイドのあった国 ・ 食糧危機や、学校へ通えない子供達が多く居るイメージ。 ・ 小さい国、丘の国、イモ
ルワンダ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 島国 ・ 高い技術を持つ先進国

【恋愛編】

質問 1 告白の方法は？

日本	・ E メール ・ 電話 ・ 直接会って ・ 行動で表現
ルワンダ	・ 電話

質問 2 どのようなデートをしますか？

日本	・ ショッピング ・ 散歩 ・ 映画館 ・ 家でくつろぐ
ルワンダ	・ 散歩 ・ レストランでの食事 ・ ナイトクラブ

質問 3 どんな男性が好きですか？どんな女性が好きですか？（3つまで複数回答可）

	日本 (票)	ルワンダ (票)
優しい	25	14
頭が良い	19	7
まじめ・誠実	18	9
かわいい	18	5
明るい	14	6
素直・従順	14	6
おもしろい	7	2
強くて頼りになる	7	0
その他	6	0
かっこいい	6	4
落ち着いている	5	4
情熱的	5	1
家庭的	3	3
運動ができる	2	4
お金を持っている	1	5
社会的地位が高い	0	0

質問 4 結婚したいですか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
したい	40	19
したくない	10	1
どちらでも良い	1	3

質問 5 何歳で結婚したいですか？

日本	80%以上の学生が 30 歳以下での結婚を希望、 27～28 歳が平均値。
ルワンダ	日本と同様、30 歳前後での結婚を望む学生が大半。

質問 6 結婚前のセックスは良いと思いますか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
しても良い	47	2
婚約者ならして良い	1	12
しない方が良い	3	7

質問 7 子供は欲しいですか？

	日本 (票)	ルワンダ (票)
3 人以上欲しい	16	4
2 人欲しい	30	15
1 人欲しい	4	1
欲しくない	1	1

質問 8 結婚後も働きたいですか？ ※女性のみ

	日本 (票)	ルワンダ (票)
働きたい	26	10
パートくらいはしたい	1	0
働かなくて良い	0	0
働きたくない	3	0

質問 9 パートナーが結婚後も働くことは賛成ですか？ ※男性のみ

	日本 (票)	ルワンダ (票)
賛成	21	13
パートくらいなら賛成	1	0
経済的に必要なら仕方ない	4	1
反対	2	0

第5章

感想

—日本側参加者

- ・大久保美希 早稲田大学第一文学部 4年
- ・大山 剛弘 早稲田大学創造理工学部 2年
- ・Kristina Gan 早稲田大学国際教養学部 3年
- ・勝俣玲 早稲田大学法学部 4年
- ・清水大志 早稲田大学政治経済学部 3年
- ・渡部香 早稲田大学社会学部 3年
- ・朴淳夏 社会人
- ・千田大介 早稲田大学教育学部 4年

—ルワンダ側参加者より

- ・UMUKUNZI Marine National University of Rwanda.
- ・HABIMFURA Maurice National University of Rwanda.

渡航の感想

大久保美希

早稲田大学第一文学部 4 年

◇なぜルワンダか？

「なぜルワンダなの？」そう何度も聞かれるにつれ、ルワンダに行く目的が自分でもわからなくなることがあった。高額な渡航費を支払って、飛行機を数回乗り継ぎ 24 時間以上かけてようやく辿り着けるところ。相当な目的があるはずと思われて当然なのだろう。だからこそ、「大学生と交流しに行く」という目的に首をかしげる人が多かったのかもしれない。私は何をしにルワンダに行こうとしたのだろう。

そこにはたくさんの偶然や衝動があったのだが、現地に行って人々と接すれば、自分の納得がいけないと思っていることが解消される気がしたという動機が強い。数カ月間の隣人同士の殺し合いで、約 100 万人の人が亡くなっているという現状にどうして納得がいくだろうか。私には受け止められない。でも、当時のことをよく知ろうとすればするほど、想像できてしまうこともある…もし自分があの時同じ状況におかれていたら、きっと加害者か被害者になっていたに違いない、と。傍観する、逃げるなど不可能だったはずだ。そんな風に思いながら、ルワンダ渡航への思いが強まっていったのだと思う。

◇ ルワンダの第一印象

昨年秋、ルワンダプロジェクト（本団体の前身）の渡航報告会で「15 年前に虐殺があったことなど見えなかった」と口を揃えて言う渡航メンバーの話を聞いて、それはなぜなのだろうと強く疑問がわいた。今回、自らルワンダに足を運んでみて、確かに、ルワンダの街並みや人々の姿を眺めていると、15 年前のことなど

JRYC

全く目に浮かばないどころか、自分がこれまでイメージしてきた「アフリカ」とは異なる世界が広がっていた。首都キガリには道路にゴミ一つ落ちていないし、街の中心には 24 時間営業のスーパーがそびえ立っている。バイクタクシーの運転手は皆例外なくヘルメットを着用していて、交通ルールを乱す者がいない。街の人は外国人をしつこく構うこともなく、夜 10 時頃まで街にいても宿舎まで歩いて帰ってしまうほどの治安の良さ。また、昨年と比較してもストリートチルドレンやホームレスは激減しているという。

これはあくまでも私の目に映った現状であるが、正直「きれいな」ルワンダに混乱した。それでも、数カ月かけてルワンダについて事前に学習してきた私の頭からは、「虐殺」や「和解」というキーワードが離れることはなく、人々の心の内に迫らなければ見えない何かがあるはずだ、といつしかルワンダの人々の内面を探るようになっていた。かれらの心には、何か葛藤があり、ぬぐい去れない感情に包まれているに違いないというこちらの想像は、かえってルワンダ人とのコミュニケーションを難しくしたかもしれない。結局、過去の話になると、ルワンダ人の口からは溜息とともに「It's a long story.」という返答しかもらえないことがしばしばあった。でも、この言葉こそが、かれらの心境を最大限に表現しているのだろう。

◇ 学生との交流から



国立大学の学生との交流が始まって、ルワンダ人と接する際に私の中で構えていた気持ちがどんどん楽になり、ルワンダの土地でかれらと過ごす時間が心から楽しいと感

じた。思えば、ルワンダの紛争背景を紐解く複雑な論文を消化しても見えてこないことがあまりに多いからこそ、私には今回ルワンダの学生と交流するというシンプルな活動に惹かれるものがあったのだった。日本とルワンダというあまりにかけ離れた土地に暮らす私たちが、「同じ学生である」というただそれだけの事実によって、こんなにも多くのことを共有できたことが今考えると不思議だ。

私は、かれらとディスカッションしたり、食事をしたりして一緒に過ごす中で、ルワンダ人と日本人の気質がとても似ていることを実感した。余談であるが、2年前にカナダの大学へ留学した際、現地の生活でカナダ人と接することにたびたび苦痛があったことを思い出す。そこでの私は、周囲から優先的に意見を求められるようになってしまうことがあるほど主張力が足りないと見なされ、日本人としての自分が「ワールド・スタンダード」にそぐわないという感覚に陥ってしまうことがあった。だから、留学を経験した私には、世界の人たちと接する際には背伸びしなければならないというちょっとした前提が出来上がっていた。しかし、ルワンダ人と接する際には、とにかく普段通りの自分が通用していたように思う。ルワンダ人の比較的小となしい性格や、互いの状況や雰囲気



を気にしながら言葉を使おうとする感覚が、私にはとても心地よく思え、日本人とルワンダ人

は似ているという感想をもったのだった。私から見た違いといえば、ハグとキスの

あいさつくらいだった(笑)でも、私はこのあいさつが大好きだ。
交流した INDANGAMUCO (ダンスグループ)の学生は、皆兄弟のように仲がいい。全員

JRYC



でいるときは、まるで一つの大家族のようだった。かれらの傍にいと、本当にそれ

を実感する。そんな風に仲がいい理由には、やはり過去の経験が関係しているのだと思う。友達のデニーゼは、「私たちメンバーは、お互いの過去について全て共有してるよ。だから、お互いのことを本当によく知ってるの」と言っていた。なんだか、心強いと思った。そんなかれらのことを知った上で、かれらのダンスを見せられると、体が震えるくらいカッコいいと思った。



ルワンダの学生と友達になって、お互いがお互いをもっと知ろうと思う時、自然と家族の話や虐殺の経験が口から紡がれる。かれらが少し照れながら自分のことを話すその姿が、痛いほど共感できた。共に過去を経験したわけではなく、見ている将来が必ずしも同じでなかったとしても、自ずと共感できることがこんなにも多いのはなぜだろう。今度は、かれらが日本に来る番だ。日本のこと、私の生活、友達、家族のこと、とにかくたくさん伝えたいと思う。

◇ 和解について

起こってしまった過去の出来事に対し、どのように向き合えばいいのか。私は、大学の国際教育論のゼミを通じて、人と人がどのように関

わり合うことが平和の文化をつくる歩みであるといえるのかという問いに取り組んできた。このことをルワンダで考えることもまた、私の今回の渡航目的の一つであった。私は、現地に行くまでは、現在のルワンダでは、被害者であれ加害者であれ、今を生きる人々にとって必要なことは積極的な「和解」であり、これこそが経済開発の前提にあるべきものだと考えていた。しかし、現地で様々なプロジェクトや人々の声を聞いていく中で、必ずしも全ての活動の土台に意識的な和解があるというわけではないことを知った。

JICA の農村開発プロジェクトや WFP の給食プログラムを通じて、農村開発や食糧自給の問題など、山積する問題に真剣に取り組む徐々に暮らしを変えている人々の姿を目の当たりにした時、人々の葛藤は今を生きることにあり、過去を振り返ることではないのかもしれないと感じた場面が何度もあった。また、UNHCR の難民キャンプ訪問でコンゴ難民の声を聞かなかで、ルワンダが抱える問題の多面性に直面した。ルワンダでは、虐殺を引きずる間もなく、取り組まなければならない多くの重要課題が立ちはだかっているようだった。

今回の渡航を通じて、「時（とき）」の解決力にも目を向けるべきであるという考えが芽生えるようになった。実は、時間とはものすごい解決力をもっている。人々が今を真剣に生きているうちに、街並みが変わり、人々の日常から「虐殺」という言葉が消えていき、虐殺を知らない世代が生まれる。私は、時の流れによって風化する物事というものに危機感ばかりを抱いていた。しかし、私が接した多くのルワンダ人は、未来に向けた幸せな生活を望んでおり、日常の中で虐殺の過去を掘り返したいなど思っていない。むしろ、必死に忘れようとしている。きっと、戦後の日本もそうだったのではないだろうか。戦後 64 年経った日本では、原爆投下について知らない若者が出始めている

ことが新たな問題となっている。ルワンダはまだその段階ではないが、ルワンダの未来にこの問題を生むかどうかは、私自身を含めた人々の手にかかっている。少なくとも、今回交流した学生たちは、ルワンダの過去を次の世代に伝える使命感を強く持っていた。だから私は、時の解決力を少しポジティブに捉えることができるようになっていた。

しかし一方で、結論を出すことは難しいが、私は渡航を通じて改めて意識的な和解も必要であるということを実感した。和解村の Deo が言っていた「和解とはプロセスであり、とても難しいものだ」という言葉を忘れないようにしたい。和解とは、人々を地域開発に巻き込めば成立するものでもなければ、自然な相互関係に任せておけばうまくいくなどといった簡単なことではない。和解村や REACH の活動を見学して、被害者が相手を許せない自分に苦悩している時、加害者もまた、自分のしてしまった行為を何か外在的な要因に向けなければ自分自身のことすら到底理解できないという苦しみを抱えていたことを知った。REACH の佐々木さんは、「まだまだ多くの加害者が自分の罪を正直に告白できず、このように罪を認めている人はごく少数なのだ」とも言っていた。その証拠に、ブタレの IMENA School では、学校裏の墓地の倉庫にごろっと置かれた骨の数々を指さして、教師のエミールが言った。「未だに骨がこんなにたくさん見つかるんだ。真実を語らない人が山ほどいる」。ギコンゴロの虐殺記念館では、一部屋一部屋に横たわるおびただしい数の遺体と悪臭の中に、ありありと浮かびあがる 15 年前の人々の死に際の表情を見た。これら全てが、表面的には見えなかった現在のルワンダ社会に潜むあらゆるものを突き付けてきた。どうしたらよいのか、とても言葉にならない瞬間が何度もあった。和解という取り組みをやめてしまったら、生きることをあきらめてしまう人々もきっといるのだと思う。

忘れてはならないことは、ルワンダの虐殺は、国家間紛争ではなく、国内で隣人同士が、家族が、殺し合ったのだということ。とても信じがたいことが起こったのだ。あの時以来加害と被害に分けられた人々は、これからもずっと一緒に暮らしていかなければならない仲間だったはずである。だからこそ、今ルワンダに暮らす多くの人々にとって、自らが生きる術を見出すために修復していかなければならない人間関係がきっとある。ルワンダで二度と憎悪を生みださないためにできることは、人々が、隣の人同士が、もう一度同じ人間として見つめ合うことなのだと思う。

◇ 最後に

私たちは、いつも生活の中に変化を求めている、そのために立ち止まっていることなんてないのだと思う。交流したルワンダの学生メンバーは、来年から仕事を始める人もいれば、日本への留学を目指したいと言っていた人もいた。学校をこう変えていきしたい、結婚したい、そんな風に語るルワンダ人もいた。ルワンダに行った私も、そこから自分が新しい道を切り開くことを自分自身に期待していたのだと思う。私にとって、ルワンダで出会った様々な人たちとの対話の中から、ルワンダや日本の社会について、世界について、そして何より自分自身について見つめることができたことは、本渡航の最大の意義であったように思う。

ルワンダとは、これからもずっとつながってほしい。

大山 剛弘

早稲田大学創造理工学部 2年

2009年10月26日。僕がルワンダ共和国から日本に帰ってからちょうど1か月が経つ。帰ってから何度あの国について『簡潔な』感

想を求められたことか、もう分からないほどだが、未だまともに答えられた記憶がない。情報量が多すぎたのか、とにかくまだこの頭では処理しきれていない。何が一番印象的だったか、ともよく聞かれる。こちらには答えられるが、聞かれるたびに新しい選択肢が浮かび上がる。

もしもルワンダという国を知らない人に、一言である国の説明を求められたら、不本意ながらもまず1994年の虐殺、その言葉が出てきてしまうだろう。

いま僕たちの生きている社会では、シンプルなものが好かれる傾向にあると思う。皆時間がない。少なくともそう思っている。だから虐殺という言葉を用いてルワンダを説明するのは、多くの場合正しいことなのだろう。けれど、今回試みたのはそれとは全く逆のことだ。

あれからわずか15年で、ルワンダはアフリカ史上例を見ない速度で急速な発展を遂げている。素晴らしい成功であるのは間違いない。絵に描いたような素晴らしい成功。そして、そこに少なからず疑問をもった。

「どうしてそんなことが出来る？」

「まだ大事なものが隠れているはずだ」

「15年で、人は肉親の敵であっても赦すことが出来るのか？」

そんなに簡単なはずがない、と。

おそらく一般的な海外旅行とは随分違った心持ちでこの旅には臨んだ。

観光、食事、休息、そのいずれもそこには求めていなかった。(結果として味わうことにはなったし、それはそれでとても素晴らしかったのだが)

きれいにまとめられた活字からではなく、現地の生きた人の生きた言葉や生活から、15年前のあの事件の遺したものを知りたかった。

本当に様々な答えが、様々な人たちから、様々な形で得られた。

それは他の報告書やドキュメンタリー、渡航メンバーの話などを通して伝わると思う。

簡単な現実などどこにもないのだと、毎日どこかに行き、人々の話を聞くたびに感じられた。

同じ時期に同じ事件を体験したからといって、誰一人おなじ感情など持ってはいないのだと。まったく当たり前のことだが、本当にそれを強く実感することができた。

国際協力というと、とにかく食糧や物資の支援、税の優遇などハード面に目が向きがちだが、それと同等に現地の人々との意思疎通・価値観の理解とソフト面も切実に求められているのだと感じた。

それは、これから何らかの形で国際社会と関わっていかねばならない一人の大学生にとって、とても貴重な経験であったと思う。

彼らとの交流の中で感じたことをもう一つ書いておこうと思う。

一番印象的なシーンは？と尋ねられれば返答に困るが、一貫して感じていたのは彼らのたくましさだ。

誰に対しても笑顔で手を差しだし、道を聞けば自分が知らなくても周りの人に尋ねまわり、音楽が聞こえれば歌って踊って、日常を最大限楽しみ、とても幸せそうだった。見ているだけで、僕まで幸せになれた。

だが、彼らのほとんど皆が15年前の事件を体験し、かけがえのないものを失い、そして今でも経済的・精神的な重荷を抱えて、日々を生きているのである。

それは僕がいままで20年間日本で生きてきて、体験したことのないものだった。人はあんなに強く、明るく生きられるのだと思い、わが身を振り返れば情けなくなかった。

きっと僕のこれからの人生にとって彼らと出会い、話し、笑い、踊り、歌ったことは、これからとても大きな意味を持つてくるのだろうと思う。

そしてそんな友人たちをあの国で得ることができた、そんな僕は本当に幸せ者である。



Kristina Gan

早稲田大学国際教養学部3年

ルワンダに行ってみたくと思ったのは「違う民族かもしれないけど同じルワンダ人。本当に殺し合いなんてできるの」と、もう起きたが大虐殺が信じられなかった。首都キガリに着いて、一見虐殺の痕跡など見えなくて、ビルもタクシーもあり、人はみなどこにもあるような日常を起っているように見え、「ここで本当にあの悲惨な出来事が起きたの」というのが私の第一印象だった。ホームレスもストリートチルドレンもあまり見かけなく驚いた。ルワンダに行く前どういうルワンダを期待したのか思い返してみると何も思い出せない。なぜなら私のルワンダのイメージは映画ホテル・ルワンダで止まっていたから。しかし、現実に見た風景ではないことは確かだ。楽しかったかと聞かれるとすぐには返事できない。たくさんの人と交流ができて、楽しかったけれど私のルワンダの旅をまとめるのに違和感がある。「よかった」という言葉も足りない気がする。3週間、短かったようで長かった。そこで経験したものをすべて消化するのにま



だ時間がかかりそうだ。

まだ傷は癒えてないだろうと思っていたのに、みんな笑顔がまぶしい。初めて出会う人たちはとてもフレンドリーで、ルワンダ人はボデー



タッチが好き。現地で交流した学生たちは明るくていつも笑っていた記憶がある。

知り合った被害者はもう許したと話す人が多く、だからあのような笑顔ができるのだろうか。子どもたちは目が輝いていた。ルワンダの未来を背負っているのはこの子どもたちなのだから光っていなければその国の将来も分からない。

全部経験できたものは貴重だったが、自分のなかで一番忘れられない出会いは REACH という償いの家プロジェクトに関わっている元加害者とのインタビューだ。現場に向かう途中虐殺のことを聞いていいのか、普通に接することができるのか不安だった。厳しい質問にも彼らは正直に答えてくれた。そして、1人の元加害者がこのようなエピソードを話してくれた。

「息子が追悼記念祭から帰ってきたら、人はなぜ人を殺せると聞かれたの。元加害者としてどう答えたらいいのか分からなかった。ずっと泣くしかできなかったの。でも私には本当のことを話す義務がある。泣いたあと虐殺があった当時のことを話して、息子に同じようなこと、なにがあってもなにが起きても私たちがやったことを振り返さないで欲しいと言ったんだ」

文章では十分に伝わらないと思うが、キニャルワンダ(ルワンダ語)はわからないけどあの時は彼の深い悔恨を感じていた。なかにはなんの後悔もしない人たちもいる。一方で、被害者にとってもそうだと思うが、前に進むには切

り替えるしかないし、前向きになるしかない。貧困から抜け出せば平和でいられ



ると。生きようとしているルワンダ人の努力と強さに頭が上がらない。今もなぜあの虐殺が起きたのか理解できない。一方で、誰にでもどこにでもそれが起りうることだと分かった。人間の生命力は本当にすごいとも思った。フィリピンに住んでいたときもそうだったけど、貧しいけれど、前向きに希望があれば大丈夫。彼らは日本のように発展したがっている。わがままかもしれないが、今のままでは駄目なのかなと思っていた。

多忙になりすぎて、純粋な笑顔と人間味を失ってほしくないからだ。しかし、3週



間だけではルワンダのすべての側面を見ることは不可能で、ルワンダ人すべての希望を知ることありえなかったが、その限られた時間のなかで難民や大学に行けない人たちという切実な状況に置かれている人たちのことも知ることができた。虐殺に関わった人のなかで他人の財産が目的だった人も多々という。今も貧困は広がっていて、被害者への支援だって隅々まで行き届いているわけではない。教育の機会も限られた人たちにしか与えられない。必要なことはまだまだたくさんある。でも何が本当に必要なのだろうか。私たちの快適な生活は必要なのだろうか。自分のなかでもその葛藤は消えることはないだろう。

脳裏に一番刻まれているのは、元被害者・加害者・ルワンダの未来の担い手である若者・よ

りよい社会を築こうと頑張っている人たち、彼らの笑顔と奥深い眼差しだ。あの笑顔と目は多くのことを語っていた。

私も思い切り生きなきゃー。

勝俣玲

早稲田大学法学部4年

虐殺記念館をいくつか訪問している時に感じた。こんなにむごい殺し方をするほど、加害者は被害者を憎んでいたのだろうか？隣人が隣人を殺し合ったという点が、ルワンダでのジェノサイドの特徴の一つだが、もともとは仲の良かった人間同士が、そんなに憎みあうことが出来るのだろうか？このような出来事はルワンダだけではなく世界中で起きている。虐殺に限らず戦争の歴史はどこも持っている。人はある時何かのきっかけで凶暴になってしまうのだろうか。私も、平和に生きる全ての人たちも本質的にはそのような性質を持っていて、普段は封印している凶暴な一面が顔を出し、暴走する。なぜ人は争うのか？答えにたどり着きそうもない疑問が私の頭の中を駆け巡った。

しかしこの国は再生しようとしている。そう感じた。誰もが一生懸命に生きている姿勢に、小学校でこの国の発展に貢献していきたいかという質問に対しクラス全員の生徒が一様に大きくうなずいたのを見て、また私たちが交流していた学生たちが自分の国について真剣に考えている姿を見て、そう感じた。この国はみんなで立ち直ろうとしている。みんなが歴史を知っていて、“もう二度と”という気持ちを共有している。それが力になって、発展へとつながっているようだ。何年か先、もう一度訪れた時この国はどうなっているのか、とても楽しみに思った。

自分たちにこれほどの責任感とパワーがあるだろうか。悲しい過去を持っていても、それ

JRYC

でも生きていかななくてはいけない。きちんとそれらと向き合い立ち直ろうというのは簡単なことではないはずだ。

だからこそ、彼らはとても楽しそうに、歌い、踊るのかもしれない。ディナーの途中で突然歌が始まり、素敵なパーティが始まってしまう。こんなにハッピーに生きている人たちを見たことがあるだろうか。

この滞在は、私に何をもたらしただろうか。私にとっては英語で交流することだけでもタフな作業であり、また文化の違う人との出会いは刺激的だった。彼らの責任感に刺激され、背中を押され、また私は自分の抱えている物事にトライ出来るように思う。紛争、そして和解。それらがその短い言葉で済まされるものではなく様々な意味、たくさんの利害や要因、プロセスを持っていることを知った。人や国が再生しようとしている姿勢を見て、感じ取ることが出来た。この旅から私が得たものは大きい。



だから私は、この滞在が、自分の成長のためだけとなってしまうかわりか、心配である。残された学生生活は短い、社会人になっても、自分たちの活動を社会に還元していくことの責任は忘れないようにしたい。

清水大志

早稲田大学政治経済学部3年

「許すもの」と「許されるもの」、「許すこと」と「忘れること」、こうした言葉のあいだに横たわる、人間の葛藤や社会の現実というものについて深く考えさせられた渡航であった。たま

たま、私がルワンダに持っていった小説が私たちの暮らす日常における「許し」をテーマにしたものであった。私は著者のあとがきを読んで始めて、各短編が「許し」といったテーマを有機的に結んでいることに気付いたのだが、それはつまり私たちの生活に「許し」というものがありふれたものとして存在しているということの意味している。

和解村を訪れて、ジェノサイドにおける加害者、被害者に会ったとき私は微かな違和感を覚えた。彼らがあまりに淡々とジェノサイドや現在の生活について語っていたからである。もちろん、15年という月日は人々の記憶を薄めることも出来るだろう、日々の困窮や豊かさへの欲求は人々の目を過去ではなく、未来へと向けさせることもあるだろう。さらには、突然現れた外国人に対して、感情的な姿は見せたくないのかもしれない。しかし、それらを頭で理解をしても目の前で話す彼らの心情や感覚を理解することは難しかった。

おそらく、私が違和感を覚え、憤りにすら近い感情を抱いた理由は「許し」のプロセスを彼らが経ていないように思えたからではないか。彼らの口からは、「私は、これほどの憎しみがあつたが、こうしてそれを乗り越えた」、「こうだから、彼らを許せた」、「こうして、私は許された」などといった、一人ひとりの感情の経過に関する言葉を聞くことが出来なかった。

こうした状況は他の訪問先でも見受けられ、個人の責任は政府の責任に、個人の葛藤や心情の変化は豊かな未来のための結束、といったものにすり替えられてしまっているように感じた。つまり、政府や国家といった大きなものの中で一人一人の責任や感情といったものが覆い隠されてしまっているようだった。そしてそうした状況は「許し」というものを国家規模で「忘れること」というものに置き換えてしまったのではないか。

「許すこと」と「忘れること」、「許されるこ

と」と「忘れられること」、これらのあいだにどのような違いがあるのか、そして、その差異が将来どのような結果をもたらすかは私には分からない。だが、少なくとも、「許し」を経てしか越えられない壁があるのではないというものがかかっているのではないか。

渡航中、ジェノサイドの記憶を尋ねた際に前向きな言葉と、翳った表情のギャップを感じた人もいた。もちろん、前向きな言葉で自らを鼓舞することも必要だが、表情や感情がありふれた言葉によって形づけられてはならない。自らの感情を乗り越えた後に発せられる、言葉というものが本当に大切なものなのではないか。

小説に描かれていたように、私たちが暮らす平穏な日常が多く「許し」に支えられている。今後、ルワンダは「忘れた」に過ぎなかったものが思い出されたときに、人々がどのような行動をとるのか、という問題と向き合い続けなければいけない、と感じた。

渡部香

早稲田大学社会学部3年

ルワンダはとても乾燥していた。それがアフリカらしさを感じさせた。しかし、気温や天候は日本とあまり変わらないように感じてとても過ごしやすかった。

「千の丘の国」という名の通り、どこまでも丘が続いている。丘の上部にはまばらに木が生え、裾野には家が建っていて、丘と丘の谷間のわずかな平地に田や畑があった。土地の所有制がまだ明確化されていないということで、何に使用されているかわからない荒地のようところが多かった。国土が小さいので、土地の管理はしやすいと思うが、狭い分有効な土地利用をすることが必要だと感じた。

キガリとブタレを主な拠点として活動していたためか、想像以上に快適な生活を送ること

ができたのだが、実際にルワンダ人がどのような生活をしているのかということがいまいちわからなかった。

街を歩いていると、あまり年配の人を見かけなかった。これは大虐殺によって40,50代くらいの人口が減った影響だろう。また、キガリ市街には無職と思われる男性の若者がたくさんいた。ルワンダはアフリカの中でも人口密度が高い国であり、労働需要が十分でないことは問題である。

ジェノサイドのメモリアルは、ピンとした静寂に包まれており、虐殺がおこなわれた建物に殺された人々の衣服などが無造作に置かれていた。その静けさが、逆に虐殺時の混乱を彷彿とさせ、人々の悲しみが今尚ひっそりと佇んでいるように感じた。大虐殺があったことはまぎれもない事実であることを実感した。メモリアルはルワンダにいくつもあって大虐殺が全国でおこなわれていてそれらがどれも残酷で惨いものであったことを感じさせた。

過去を乗り越えて、いい国をつくろうという気概が会った人々から感じとれた。過去を忘れるのではなく、心に留めて、前進する力がこれからのルワンダをつくり上げていくのだと思った。

社会人 朴淳夏



ルワンダに行きたいと思ったのはもう何年も前だった。なぜかルワンダと私には共通点があるような気がしてならなかったから。映画・ホテルルワンダを見に行っ

た後からはその気持ちは強くなるばかり。そしてついに社会人にも関わらずこの会に参加させてもらった。

私のルワンダ渡航目的は、やはり「ルワンダと私（在日コリアン）の共通点と違いは何か」をじっくり見てくることであった。そしてこれを「早稲田の学生（日本人）と一緒に見てくること」は私にとって、とても大事な事になるだろうと予感していた。

彼らと私との共通点は、「虐殺」の過去を持つこと。彼らはその時に感じた、マグマのようなドロドロとした気持ちを、どのように噛み砕いているのだろう、彼らは今何を感じ、何を考え、次に何をしようとしているのか、それが知りたかった。そしてそれを私も彼らから吸収したかった。実は私自身が乗り越えたかったのかもしれない。それをルワンダでさがそうとしていた。

驚いたのは、彼らはこの虐殺の過去を克服しようとしていること。言葉では簡単に「克服」というが、家族を殺されたことをどう克服するのか、私には到底無理だと思っている。彼らは私たちが何十年経ってもできていないことをしようとしているのだ。ルワンダで聞いた言葉が今も残る。「憎悪は未来に何も生まない。許すことのみが未来を作る。次の世代のために。」この言葉を聞いた時思った。彼らは自分自身のために、次世代のために、前に進もうとしている。

キガリに降りたつと、やはり皆が口をそろえて言うように、虐殺があったとは思えない「普通の」生活がある。笑顔がある。今の私にも「普通の」生活があり、笑顔がある。しかし、心の中には私たちにしかわからない「普通」じゃない部分が多々ある。虐殺を経験した世代ならばなおさらだ。宗教や歴史、虐殺の背景など、我々とは違う点はいろいろある。しかし、彼らは間違いなく前進しようとしている。

ルワンダでの経験は、朝鮮半島と日本、アジ

アと日本が共存していくために、前進するために、心が越えなければいけないものはなにかを教えてくださいましたような気がする。

最後に、今回一緒にルワンダに行った早稲田のみんなが、現地で感じたことを、是非自分の問題として考えてくれたらと思う。ルワンダの話は決して飛行機 20 時間かかる遠いアフリカの話ではない。一緒に渡航した私の話であると思ってもらえばいい。

映画・ホテルルワンダのパンフレットで見つけたこのフレーズ、このフレーズが私をルワンダまで行かせた。

「日本でも関東大震災の朝鮮人虐殺からまだ百年経っていないのだ。」



千田大介

早稲田大学教育学部 4 年

プロローグ

成田空港で搭乗ゲートをくぐってから 5 回の機内食をたいらげ 4 回の離着陸をやり過ごしキガリ空港で滑走路の一步を凝り固まった足で踏み出す頃には 30 時間が過ぎている。東アフリカのケニアから西方に位置する小国は四国の 1.5 倍ほどしかない。標高が 2700 メートルまで達する丘陵地の夏は東京よりも涼しい。現地の挨拶には「ムラホ、ボンジュール、ハロー」とキニアルワンダ語、フランス語、英語の 3 言語が飛び交う。GDP は世界 147 位だが年二桁の経済成長をしている。ダイヤモンドも石油もないが、肥沃な火山土で作られるプレミアム・コーヒーはアフリカ初のカップ・オ

JRYC

ブ・エクセレンスの称号を勝ち取った。残念ながらワールド・カップ予選ではエジプトとの戦いに敗退してしまった。マクドナルドもスターバックスも存在しないこの国には、赤土と薪の煙で靄のかかった丘にバナナの葉が揺れている幻想的な朝焼けが良く似合う。都市を歩けば 24 時間営業の高層ビルが大雲の空を貫き、道路を埋め尽くしたトヨタの黒い排ガスをバイク・タクシーで追い抜いていくと喉がカラカラになる。夕暮れにミツギ・ビールを飲みながら 2 時間待って食べる串一本のプロシエットはとてありがたい。バナナワインでほろ酔いした真夜中の家路には街灯だけあれば女性でも心配は要らない。頭の土埃をはらってから横になると窓から差し込む月明かりがゆっくりと静かな夜闇を教えてくれる。

この国で 15 年前 100 万人の市民が虐殺された。

隣人がナタを振り下ろし、銃を轟かせ、火を放ち、何度も絶望の悲鳴が響いた。

その度に瞳から人が消える孤独な刹那があった。

1994 年のルワンダには不気味な生暖かい空気が漂っていた。

正体のわからない真っ赤な血が人々を覆っていた。

2009 年 9 月私達がルワンダに降り立った日、それはルワンダ人が「人間」になった日だった。恐怖と憎しみばかりを映し出していた遠い土地に、歌と笑い声を聞いた。人を殺めた父親は苦悩と後悔の目を伏せていた。女が抱えていた空っぽの重い心は家族を奪った者に注がれ少しだけ軽くなっていった。泣いていた少年は兄弟たちを助ける為に必死に走っていた。子供た

ちの歌声は約束されるべき未来を人々に告げていた。希望のともし火が千の丘に浮かんだ夜景のように孤独な背景を小さく点々と照らしていた。受け継がれるダンスのステップは西に引かれた線上を跳び越えて、雄叫びは行く先をまだ知らない。トビの見下ろす赤い大地に脈打つ太鼓が鳴り響いていた。

2008年の活動軌跡—対等な関係と支援—

私が、去年ルワンダ・プロジェクト（現・日本ルワンダ学生会議）に参加し渡航した際には、「相互理解・対等な関係」という言葉が腑に落ちなかった。多大な時間とお金と労力を掛けていくのなら、学校や道路を建設したり、薬やパソコンなど物資を運んだりする「支援」をするべきではないのかと思った。15年前虐殺が起こった国で「文化交流?」、何か学生の自己満足のように思えてならなかったのだ。しかし、当時のリーダー岸田有香子は最初の渡航で「彼らの為に何かをしてあげたい」という強い思いで現地を訪れたが日本人を歓迎する彼らはそんなものを求めていなかったことを実感したのだという。彼女の言葉を信頼していたので、心の中では実感できなかったが交流を通じた相互理解という理念に賛同し参加しようと決めた。

現地を訪れると急勾配が続く丘に芋、バナナやコーヒー、お茶が栽培されている緑豊かな土地に「貧困」という印象は抱けなかった。何より虐殺の傷跡が街を歩いているだけではまるで見えてこないことが不思議であった。大学生との交流でもダンスを一緒に踊ったり、学校生活について話をしたり、ごく対等な友人として関係を築けたと実感した。各地の小学校を訪問した際も熱烈な歓迎を受けいい思い出ができた。何処へ行っても物珍しいムズング（キニアルワンダ語で外国人のこと）を好奇心と時には冷かしの笑顔で向かい入れる彼らとの交流は確かに胸に残るものがあった。



しかし、一方でこの国の人々が直面する問題を改めて実感させられることもやはり多かった。そしてそんな時「支援をできたら…」と思っていた自分にはいったい何ができたのだろうか。JICAの除隊兵士職業訓練プロジェクトの現場を訪れたとき、ある女性生徒が私たちにに向けた「どうやったら現在の生活から抜け出せるのかアドバイスをください」という熱意溢れる質問に「毎日一生懸命働いてください」としか返せなかった。彼らは技術訓練を受けているので頑張れば道を切り開ける可能性も高いように感じた。路上で右も左もわからずにいた私たちを銀行まで案内してくれたレミーという青年は虐殺によって教育の機会を奪われてしまった。私たちに「学校に通うお金を下さい」と丁寧にお願いしてきた。父親が政府の職員で母親が教師と教養ある家庭で育った彼は虐殺で両親ともに失い、現在は下の兄弟を養わなければいけない立場にいるという。今は失業中なのでお金がどうしても必要というのだ。私は路上でテレホンカードや新聞を売る仕事でも何でもやればお金は稼げるはずじゃないのかと尋ねると、「あれは正規の職業ではないので安定した生活を得られない。兄弟のためにももう一度大学を出て安定した職業につきたい」と言っていた。友人の家に居候し、流暢なフランス語に片言の英語を喋り小奇麗な服装を着こなす彼は十分それなりの仕事がありそうに思えた。だまされているのかと不審に思ったが、突然空っぽの財布に手で書かれた「GOD」という大きな字を見せて「Now I believe in GOD. I hope He helps me. But my friend, life is very...very...bad in here. Do you understand me?」と片言の英語でゆっくりと語っていた彼からは、虐殺後の空白とバイタリティを取り戻しながら日々悶々とする兄として背負った立場がとてもよく理解できた。

「私たちは学生だしあなたにお金をあげることにはできない、でもあなたの立場はよく理解できるよ」、そう伝えるとあっさり納得してくれた。奨学金制度もあるし政府にお願いしてみればどうかと提案すると、奨学金はごく限られたトップの人にしか与えず政府はどうせ聞いてくれないと諦めていた。そして何度も「Other friends do not understand me. But you understand me.」と繰り返し確認していた。自分を理解してくれた外国人にとっても嬉しそうな顔を見せた彼は、田舎に帰ればそれなりの生計は立てられるが成功するには首都キガリでないとだめだと意気込んでいた。しかし、レミーは理想と現実のギャップの中でもっと賢くなるか自分のプライドを捨て不安定な仕事でもお金を稼ぐしかないのかもしれないと思うと自分と同じくらいの青年が背負った困難な人生がととても哀れに思えた。何かできないかと考え、知り合いになったルワンダ人のある国連職員にメールして彼を助ける手立てはないかと丁寧に尋ねてみたが返答はなかった。この国には私が困難と考える状況にある人は五万といえるのだろう。一々一人ひとりを可愛そうと考えることはできないのかもしれない。彼よりもさらに貧しい生活をしている人も数え切れないほどいるはずだった。路上で古新聞を買おうとした際にはある少年が定価 300RwF の新聞を中古であるのに 500RwF で吹っ掛けてきたので、「ふざけるな」といって 300RwF (哀れみを込めてこの値段) だけ差し出すと「Life is not easy here.」と下を向いてしまった。路上での生活は 200RwF の戦いで日々の生計を立てなければならぬ。これで大学に通い、家族を養うことはとてもできないと感じた。運よくだまされる外国人のお財布の 40 円 (5RwF = 1 円) に期待して彼の生活が向上するとも思えなかった。もし仮に私が大統領の立場にいたとしたらこういった問題にも向かい合わなければ本当の意味で経済発展したとは言えないの

だろうと感じた。

これらは私が短い滞在の中で直接話し実感できた困難な人々だが、その他の人を含め実際ルワンダに「助け」が必要なのは言うまでもな



いだろう。土地の痩せている東南部では作物が育たず物資援助なくしては日々

十分な食事も摂れないという。資源も広大な国土もないこの国では教育によって人材を育てなければ国の発展は望めないが、教育の機会はまだまだ行き渡っていない。たまたま風邪になって医者に掛かったときにも聴診器と手動の血圧計しかない大学病院の診察場にルワンダにおける医療事情の一端が垣間見れた。渡航では目にすることができなかったが、エイズ問題もルワンダ社会に深刻な影を落としているという。

2009 年—ルワンダにおける支援のあり方—

今回の現地活動で JICA や WFP、UNHCR といった国際協力機関のプロジェクトを訪問した際、受益者から様々な要求が出ていた。「新しい機械を買ってください、服をください、油をください、パソコンをください、学校にいけるようにしてください」。これらは現地の人々が多くのものを必要としているということの証明である一方で、外国人の支援に依存した精神の表れでもあると感じた。私たち外国人は何でも与えてくれるスーパーマンのように写っているのかもしれない。

米の品種改良を専門分野に国際協力の舞台で活躍してきたある教授に、「食料において災害や紛争といった緊急時の支援というのは絶対に必要だが、恒常的な支援は支援国の都合が優先されていることが多く返って現地の市場

の成長を妨げる原因にすらなりうる」という趣旨の話聞いたことがある。また、WFPを訪問した際今回の見学活動を報告書にしてよいかと尋ねると、現地の職員は「支援機構というのは政治的にもあくまで政府のパートナーであり、最終的にその国の責任と主権を負うのは政府である」ことを忘れずにと忠告していた。1994年にも結局国連を始め国際社会はルワンダ人を目の前で見捨てたのだ。利害がコストを勝らなかったためだ。最後はRPFの軍事勝利による内戦の終結という形で現在に至っている状況を考えれば政府の立場も理解できる側面がある。

やはり「先進国から可愛そうな人たちを支援してあげる」という態度では、依存関係を作り出してしまい結局うまくいかないことは目に見えている。仮に10年なり単なる物資支援をして現地の人の生活が安定したとしても方針が変わり支援機構が撤退してしまえば、与えてもらうことが前提となってしまう現地の人には自立などできるはずがないし、国際社会はそれに対し本質的には責任を負わない。現地の人にこそ多くの努力が必要なのだ。もちろん、JICAやWFPは自立への道筋を立て早期撤退を理念とはしているが、私たちが見学した現場ではまだまだ支援が必要なところもあるように思えた。もし、国際協力の場面で働くとしたら、困難な立場にある人への「哀れみや同情」というのはやはり原点としてあるべきで、その上で彼らが自分の道を切り開いていくにはどういう「協力」ができるかという姿勢を持つ必要があると今は実感している。

それでは、「対等な関係」を掲げる学生団体として私たちには何ができるのだろうか？何かの役に立つほどの専門性もない私たちにはまず学ぶことが必要だと考える。ただし、大事なものは理論だけで国際関係や国際協力を学習するのではなく、現場で様々な生の情報から学び取っていくことではないだろうか。具体的に

は、大学生との交流やディスカッションを通してルワンダ・日本の価値観を理解し合い、両国を始め世界で起こっている問題を共有し、それぞれが学んだものを社会で活かしていくことではないだろうか。2回目になるルワンダ国立大学生との学生会議・ディスカッションでは前回同様に格差問題や歴史問題といった「負の側面」と戦後復興など「正の側面」をプレゼンした。ルワンダ人の中にある「日本＝発展した何の問題もない国」という固定イメージを壊し、GDPなど表面的な経済発展を追及し善しとすることのないようにメッセージを与えるという目的を持って会議は行われた。短い時間ではあったが、毎回朝9時から午後5時までみな真剣に議論し違いや共通など点様々なものを確認し考察し合った。中には、「日本のように経済発展するにはどうしたらよいか」、「今のルワンダの農業には何が必要か」と熱意を持って迫られる場面が何度もあった。義務教育の普及、農業近代化の必要性や国際協力の可能性について言及することしかできなかったが、こちらにも真剣に答えた。大事なものは問題意識を共有し、それを自分の糧とすることだ。大学に通える彼らはルワンダの国家を担うべきエリートだ。自国の問題について真剣に議論する彼らに時には自らの足元（日本）を振り返る機会も与えてもらった。去年の活動よりも「相互理解・対等な関係」という意義がわかって来たような気がしている。団体としては、今後教授やNGO職員を始め様々な専門家とネットワークを広げ勉強会を開くことが重要だと考える。「教育的価値のある場」として学生が交流、議論をする中で双方が置かれた立場を一人の人間として理解し、それぞれのメンバーが自ら次の段階に繋げていくことのできるような団体として持続的に発展していくことを願う。



プレゼンし議論した内容を発表するまでの様子

虐殺の傷跡—痛みと和解—

前回の渡航でも抱いていた「虐殺があったことが信じられない」という違和感は、今回始めて渡航した他のメンバー同様に滞在を通してやはり持ち続けていた。街を歩き人と話してみても悲しみの陰は容易に見えてこない。子供達が笑いながら「Ni hao?」と声をかけ大人たちもはにかみながら握手の手を差し伸べる。首都キガリは建築ラッシュで近代的な都市へと日々様変わりしている。アフリカの中で治安は極端なほど良好で、ゴリラの観光ツアーも人気を博している。

しかし、去年は訪問しなかったギコンゴロという記念館を訪れた際には、まだ体毛や肉体の残っているおびただしい数の遺体に対面することになった。その時は独特の匂いや克明に刻

まれた死の表情を目の当たりにし、とても気分が悪くなった。同行してくれたルワンダ国立大学の学生アルフレッドが虐殺について意見を述べてくれた。彼は少年時代に虐殺を生き延びた孤児だ。幼いころは記念館に来ると当時のことがフラッシュバックし気分が悪くなったという。「こんな非人間的なことが起こったんだ。想像できるかい？今でもほとんどの被害者はトラウマを抱え、加害者の中でも発狂してしまった人すらいる」。恨みや憎しみはないのかという質問には、「もちろんある。家族を殺した者を忘れることなどできない。でも、これを見てください。これをまた繰り返すというのかい？加害者が真に反省し努力していくなら和解していく以外に方法はないだろう。」と答えた。

このような話は不思議なくらい多くの方が口にする。本音と建前がはっきりあるルワンダ人の気質のせいでもあるが、ちょっと話だけでは見えない悲しみや憎しみを皆抱えながら、「和解」という言葉が自分をなだめるおまじないのように共有されているようでもあった。政府が進める経済開発を包括する和解政策やキリスト教教義に基づく信念から、人々はどうしようもない絶望的な心の中に希望と生きる術を探しているのかもしれない。

ルワンダ社会の復興と安定化には、経済発展と心のケアという2つの側面が必要で、政府や国際協力機関は経済発展を中心に尽力している。一方で、専門性が問われる心のケアというのは資金的優先順位としてもなかなか難しいようである。経済発展を主導する「物質的に満ち足りていけば、心の余裕も生まれてくる」という立場は確かにそうだと思うが、やはり心の直接的ケアの必要性は依然としてある。日本で知り合いになったあるルワンダ系カナダ人は17歳の頃に虐殺を生き延び国を出た。彼は悪夢にうなされ飛び起きることが毎晩のことで未だに睡眠は4時間くらいしかとれないという。トラウマを抱える今のルワンダには精神的

ケアが最も必要だと述べていた。

今回の渡航で、教会系のNGOとして心のケアと生活向上から和解にアプローチする日本の組織（REACH）を見学した。和解の重要性をお説教やセミナーという形で学んだ村人の間では徐々に心のわだかまりが解消されていく過程を目にすることができるという。悪い政府ではなく自らの罪を深く後悔した加害者と、償いの公益労働をする加害者を苦悶の末許し受け入れるようになった被害者との劇的な和解の瞬間というのもこれまで目撃してきたという。ただ、その過程にも家を造るという行為によって被害者が「加害者の罪滅ぼし」と「生活向上」という希望を手にするという要素が大きいようであった。



REACHの支援する償いの家造り現場

また、イメナ孤児学校を訪問した際には、虐殺後の社会が抱える現状を知ることとなった。校長をしているアタナーズは自身虐殺の生存者であり28歳という若さで資金をかき集めながら学校を運営している。目の前で両親を殺された彼は、もう恨みはないという。近くの共同墓地を案内してくれた時、ごく最近水路を工事していたところ数十体の遺体が発見されたという現場を見た。ルワンダでは何かのきっかけで未だに何百体もの死骸が掘り起こされることは珍しくないそうだ。未だに裁かれていない虐殺の際の犯罪が無数にあるのだ。同僚の青年で、虐殺加害者である父親の罪を告発したE氏は加害者でありながら罪を伏せ逃れようとしている者が許せないと言う。虐殺によって孤

JRYC

児になった子供たちを20代という若さで背負い日々懸命に働いている青年達の苦勞を感じさせない充実感に満ちた誇らしげな笑顔がとても印象的だった。最近給料が入らず収入がない漏らすと彼らは「お金が無ければ、無いなりの生活をするだけさ」と笑い飛ばしていた。私は、ルワンダ人が必要とする和解の具体像とこの国の将来を2人の背中に見たような気がした。



イメナ孤児学校にて

ホームステイ—25歳の背負った人生—

ルワンダ国立大学でダンスグループに所属するモーリスの家に一泊だけホームステイする機会があった。ルワンダで大学に通えるのはごく限られたエリートでモーリスは首都キガリに実家があるから、豪華な家に住んでいると勝手に想像していた。街灯も全く通っていない凸凹道をバイク・タクシーで登っていくと大きなトタンでできた門のある家についた。従妹に出迎えられ家の中に入ると冷蔵庫と電気がある小綺麗な居間に通された。ルワンダ全土から比べればやはりかなり良い方の暮らしだと察するが、日本で生まれ育った私の目には到底豊かな暮らしとは映らなかった。モーリスを始め交流している友人達は全く同じ大学生として捉えようとしてきたので余計にショックだったのだろう。団体理念である「対等な関係」という言葉がその時はとても無垢なものに思えた。夜なのに病気でほとんど寝たきりの母親を起こしてきて客人を迎えさせるモーリスは、

「構わず寝させてあげてくれ」という私に「No problem. Don't care.」と言った。お母さんは会釈をして力ない手を差し出してくれた。額にしたたる汗は病気の痛みを耐えている証拠だった。何かを訴えているような物静かな深い目が私の存在を確認しているようだった。その横でモーリスは構わず陽気にしていた。お母さんは少しだけモーリスと会話しベッドに戻っていった。モーリスが何事もないかのようにしているので、私は「お母さんのことがずっと心配なんだけど」と言ってみた。お母さんは胃の病気で1年ぐらい具合が悪いのだという。56歳という高齢なのでこの先良くなるかわからないらしい。しばらく沈黙した後で、「But, what can I do?」と、まるで大人にしかられた子供が自分なりの理屈で弁解している時のように言った。それは自分を慰めているようで、私は何もできない自分が責められているような気になった。「I am really afraid of my mom.」

しばらくすると、また何事もなかったようにモーリスは笑っていた。

その後モーリスが孤児であることを知った。確かにお母さんと顔が全然似ていないと思っていた。小さい頃から自分の将来は自分で切り開けと叩き込まれてきたという。だから、時には頑固だが自分の考えと決断でここまで進んできた。将来はもっと成功していい暮らしをすると野心を語ってくれた。そしてルワンダ全体が発展するためには何が必要かと私に何度も尋ねた。家族について尋ねたとき、「I don't like my dad. He was discouraged man.」と言っていた。彼のお父さんは94年の前に病気でなくなったのだという。自分を産んだお母さんはどうなったか聞けなかったのだが、虐殺が起こったときは兄弟を連れて逃げ回り NGO などから食べ物をもらい生き延びたのだという。まるで獣のような大人が恐ろしくて小さい頃は毎

日泣いていたという。とても静かで恥ずかしがりの性格だった。いつも冗談を言って人を笑わせ、誰よりも華麗にダンスで喜びを表現しているあのモーリスからは想像ができない。「I like dancing, because I can forget my concern.」。ルワンダで何度も見たダンスは彼らの強さの象徴のようであった。悲しみや孤独や困難の日々の中にある大切な喜びを精一杯享受し表現しているように見えたのだ。このホームステイから私はルワンダの現状についての一つの尺度を得ることとなった。「My life is totally normal, compared to other people.」という言葉聞き、モーリス自身の生活や母親の病気に対する姿勢とその他のもっと困難な状況にあるはずの多くの人々のことが少しだけ理解できたような気がした。翌朝、夜明けと共に起床しバケツ一杯の水で顔と身体を洗い歯磨きをした。それから赤い土の付いた靴を脱ぐように言われた。何年も履いているアディダスの運動靴だったので別に気にもしていなかったのだが、「This is very good shoes. Sorry, road is dirty in our country.」と私の身なりを気遣い自分の靴と一緒に丁寧に洗ってくれた。

私はルワンダという国でただ単純に友人の家に遊びに来たという自分の立場を振り返っていた。「対等」という形容にこだわる私の目線はモーリスの目線が何処に置かれているのか分らずにいた。夏でも肌寒いほどの高原の青空の下、ピカピカの2足の運動靴が真っ白に輝いていた。



モーリス

全体の感想

今回の渡航では改めて、虐殺、貧困、経済発展、希望といった視点からルワンダの人々の生活を学ぶことができた。あえて「対等な関係」という視点を置くからこそ浮かんでくる「対等とは何か」という疑問や、交流を通して見えてくる「対等ではない現実」にもとても敏感になった。日本は戦争で加害者として多くの市民を殺した一方で、原爆という恐ろしい兵器により多大な被害を経験した。そして戦後一人ひとりの国民が努力し復興を成し遂げていった。私たち日本人の責任や立場はここから出発し、ルワンダ人との関係において多くの意義を持っているのだと感じ

させられる。ルワンダで見た現実を胸に、今後大学生との連携をさらに強め「協力関係」を模索していきたい。報告書を書いている今もルワンダ国立大学学生と密に連絡を取りながら、突然の日程変更で2ヶ月前倒しを余儀なくされた第3回日本ルワンダ学生会議・12月日本開催に向け準備を進めている。これは去年の交流で何度もルワンダ人学生からの「日本に連れて行って欲しい」という願いを真摯に受け止め実現させるべく頑張ってきた結果としてなんとしても成功させたい。両国での学生会議が実現すれば「対等な関係」により近づけるのではないだろうか。



UMUKUNZI Marine.
National University of Rwanda.

First of all,my warm greetings and best wishes for you.Am very honoured to make again a comment on the conference shared last time at Butare .

Now,my comment on the conference is that it has been prepared in a short period whereby some issues weren't achieved and japanese students didn't have time to visit our country's regions of tourism and what would have been benefiting .BUT on the other side,the conference was good in those matters of a consensus after each discussion which permitted us to find together solutions helpful to reach a good society,It was really good the way we use to share everything including lunch.....,we became friends one side another,etc.....

What I ve learnt about japanese culture can be summarised on their high level of education which interested everyone from Rwandan side

The discussion was really interesting and I learnt so many things not only from Japan but also things which I ignored and from my country, I came to notice the extent of sufferings caused by tragedies our countries faced last periods and which make us, as youth to play an



写真右が Marine.

important role in building strong societies with good governance as long as we share similar past history.
Thanks

HABIMFURA Maurice,
National University of Rwanda.

To the Coordinator of Japan-Rwanda Youth Cooperation in Japan

I'm sorry to send these comments too late because of missing the machine but it's fine now and it is my time to say something on the trip of 8 students from Japan in the case of Japan-Rwanda youth cooperation .

First of all I want to express thanks to every body who was a delegate from JRYP in Japan during this year and say congratulation to Daisuke CHIDA, the coordinator of RJYP in Japan.

I learnt many things from the Japanese

JRYC

especially their organisation, I would like to ask them on how they perform everything perfectly without make even a small mistake, really an error is a human behaviour but they always tried to over root that error before it appear. Those show me that they were experienced in whatever they did.

I appreciated:

- Their presentations on different topics during our workshop in August,
- How they were very kind with the Rwandan people
- Their tolerance on the mistakes committed by the Rwandan within their disrespectful of the time, and so on
- Unwavering courage they always show me in our daily collaboration (chat, Idea support,....)

You know that National university of Rwanda gathered over 10,000 students and I'm sure that after your departure I had a conversation with 25% of the NUR students from my Classroom, Soccer team, Departments, Room mates, NUR Artist Forum, Indangamuco and journalist students who told me that they liked how we (RJYP members) was similar to a family unit during our workshop, which means that your sociability is highly good so that you are able to live anywhere you want on this planet.

I prove again that I have some of the

Japanese people who are my best friend than other people from Rwanda because of sharing every thing we have except what we don't have.

The Japanese members have learnt more from the Rwandans as we are grateful to learn more from you, on my behalf, the sociability of the Japanese students have enable me empower my customs, habits in my daily life .

Finally, I'm grateful for your sympathy you have revealed to us, so continue your willingness to assume full responsibility of our JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION.

Your kind Regard,

訪問先に関する参考資料・URL

◆PFR 和解村

Prison Fellowship Rwanda ホームページ

<http://www.pfrwanda.org/>

◆JICA JICA 国際協力機構

<http://www.jica.go.jp/>

ルワンダ国キガリ・ンガリ県南部ブゲセラ地区 事業事前調査表

http://www.jica.or.id/activities/evaluation/tech_ga/before/2005/pdf/rwa_01.pdf

◆WFP 国連世界食糧計画

<http://www.wfp.or.jp/>

◆UNHCR 国連難民高等弁務官事務所

<http://www.unhcr.org/pages/49e45c576.html>

◆ウムチョムイーザ学園-ルワンダの教育を考える会-

<http://www.rwanda-npo.org/>

◆REACH

佐々木さんを支援する会 ホームページ

<http://rwanda-wakai.net/>

◆Kigali Genocide Memorial Centre.

<http://www.kigalimemorialcentre.org/old/index.html>

第 3 版 2010.2.1

日本ルワンダ学生会議